Update Information:

2026/10/24/ 9:33 PM

◆各話へのクイックリンク

設定資料を飛ばして、本編を読まれる方は、クイックリンクを使ってばすことができます。

□第一話

□第二話

□第三話

□第四話

□第五話

□第六話

□第七話

□第八話

□第九話

□第十話

Copyright@2026 D&S

設定資料

「X接点」

Copyright@2026 D³S

みちたけ

設定資料

タイトル

「X接点」

全体あらすじ

新入社員　大谷博紀の周りで起こるサラリーマンの裏事情
そこには、彼を狙う上司、お局様
そして、大谷の前に現れた　謎の男　古屋。サラリーマンの裏恋事情の行方に
壮大なバックストーリーと、別作品の「私が工業高校に進学した理由」との
クロスオーバーに、発見と驚きがあります。

※本作品は、過去のところどころで、フラッシュバックし、過去の回想を多く
取り入れてます。

シリーズ構成

全三シーズン
・「X接点」
・「X接点Ⅱ」
・（仮タイトル）「X接点Ⅲ～奇跡の贈り物～」

記号

□第〇幕　サブタイトル

Copyright@2026 D³S

・小見出し
〇場所
▽ト書き

（＃　フラッシュバック　＃）
　画面をフラッシュさせる

←＃　回想　＃←
→＃　現在に戻る　＃→
　回想シーンに移る時

←＃　インサート　＃←
→＃　インサート　＃→
　短時間動画を挟み込む

Copyright@2026 D³S

登場人物

大谷　博紀（おおたに　ひろき）二十三歳
営業一課　所属
今年の新入社員
住まいは、木造二階建ての２Ｋのアパート
中学から　陸上で短距離走をしている
小柄で細身だが、腹筋、太股は筋肉があり　いい体つきをしている

古屋　豪（ふるや　たけし）三十二歳
システム部所属
謎の社員である
住まいは、そこそこ広いワンルームマンション

亀山　麻里（かめやま　まり）二十八歳
営業一課
会社内で、お局的な存在
古屋に密かに恋をしている

林　（はやし）二十六歳
営業一課　女子社員

Copyright@2006 D³S

亀山の後輩で、２歳下

松本　（まつもと）二十四歳
営業一課　女子社員
林の後輩にあたる
大谷とは、一年先輩
元気で活発。おしゃべりで、社内の噂話しを色々と収集している

渡辺　（わたなべ）
営業部部長
実は、もう一つの物語で出てくる渡辺部長とは兄弟である

野崎　（のざき）
営業一課　課長
大谷を狙っている同性愛サラリーマン
上司の子息に手を出し、会社を解雇され　ゲイバーの雇われマスターとなる

山下　（やました）
営業一課　主任

小村　健一（こむら　けんいち）
高校時代　大谷の一つ上の先輩であるが、古屋の恋人でもあった

Copyright©2026 D³S

ゲイバーでボーイをしている
※別作品で主要人物として出演

大谷　直人（おおたに　なおと）
大谷の父　知り合いの借金の保証人になり、借金取りの取り立てに危険を感じ大谷が小学生〇年生の時に大谷をおいて失踪
その後、借金を返済するが亡くなる
※別作品でも主要人物として出演

その他　社員

川端　（かわばた）
営業一課　課長　野崎の後任

森崎　（もりさき）
営業二課　社員

影山（かげやま）

Copyright©2016 D'S

総務課
大谷の同期

榎木（えのき）
東京支店に勤務
大谷の同期

片岡（かたおか）
大谷の同期。開発部に所属

鈴木　圭子（すずき　けいこ）
総務課所属
社内ではお局的な存在だが、亀山より後輩の為、亀山には逆らえない
独身で、若い男の子を家に呼び遊んでいる

他に、鈴木の友だちで、ハルカ・トモエ　が登場

杉本（すぎもと）
システム課　課長
古屋の上司に当たる

中島（なかじま）

Copyright@2026 D³S

営業一課　大谷の一年先輩になる

亀山家

家は郊外の住宅地にあり2階建ての一軒屋

父

母

妹・千里（ちさと）二十一歳　大学生

丸尾昭博（まるお　昭博）二十一歳　大学生

香

（香）二十一歳　大学生

千里の友だち

☆スペシャルゲスト

本作には直接関係ないが、続編での繋がりに必要

河合（かわい）

続編で出てくる、中年サラリーマン

Copyright@2026 D³S

地名など

会社名

P＆H商事株式会社（ピーアンドエイチ株式会社）

国内大手の商社

Copyright@2026 D³S

目次

内容

◆各話へのクイックリンク……1
「X接点」……2
設定資料……3
タイトル　「X接点」……3
全体あらすじ……3
シリーズ構成……3
登場人物……5
地名など……10
目次……11
「X接点」（第一話）……28
サブタイトル「歓ゲイ会での出来事」……29
あらすじ……29
新入社員歓迎会で、上司の野上にせまられるところを、古屋に助けられる……29
□第一幕　歓ゲイ会……30

Copyright@2026 D³S

○（朝）ビジネス街……30
○（夕方）P＆H商事　事務所……31
○（夜）居酒屋の中　大谷と野崎の席……33
○亀山　林　松本が、座っている場所……38
○（夜）スナックの前の道……39
□第二幕　サウナって超危険……43
○（深夜）雑居ビルのエレベーター前……43
○サウナ受付のカウンター……44
○（同）ロッカールーム……46
○（同）風呂場……48
○（同）サウナールーム……49
○（深夜）雑居ビルの外……59
□第三幕　古屋と初めての夜……63
○（深夜）古屋の住んでいる　ワンルームのマンション……63
○古屋の部屋……72
←＃　回想　＃←　夢の中で　過去に起こった大谷の出来事……73
○真っ暗な部屋の中……73

Copyright@2026 D³S

（＃　現在に戻る　＃）……74
○（翌朝）古屋の部屋……74
「X接点」（第二話）……77
サブタイトル「裏切り者には制裁を」……78
あらすじ……78
□第一幕　野崎からのパワハラ……79
○（月曜日の朝）P＆H商事株式会社　給湯室……79
○古屋の席……80
○（始業時間後）事務所……82
○給湯室……87
（数日経過）＃契約書の行方＃……91
○（ある日昼食が終わった午後）事務所内……91
○男子トイレの中……93
○事務所……93
○エレベーターの前……94
（数日経過）＃野崎の難癖が続いている＃……96
○（数日経過　ある日）事務所……96

Copyright@2026 D³S

○トイレの前……97
○（夕方）会社ビルの玄関　大谷が待っている……99
◦（数分後）会社近くの繁華街……99
○（夜）古屋の家……101
○（深夜）古屋の部屋のベット……102
第二幕　野崎の転落……103
○（夜）某ゲイバーの中……103
○（深夜）ラブホテルの建物から数メートル離れた電柱の影……105
○ラブホテルの入口……108
○（翌日の朝）P＆H商事株式会社の事務所……108
○（同）部長室……109
○（同）営業一課……112
「X接点」（第三話）……114
サブタイトル「大谷の誕生日」……115
あらすじ……115
□第一幕　ある土曜日……116
○（土曜の朝）古屋のマンション……116

Copyright@2026 D³S

○（昼すぎ）古屋の家のリビング……124
○（夜）古屋の部屋のベッド……126
□第二幕　（仮称）ユニバーサル・ランド……131
○（土曜日の昼過ぎ）テーマパーク（（仮称）ユニバーサル・ランド）……131
○コースターの列……131
○テーマパーク内のアーケード……133
○遊園地の迷子センター……139
○遊園地の帰り　古屋の運転する車の中……141
○大谷のアパートの前……141
○大谷の部屋……143
□第三幕　会社で一番怖いのはＯＬ……146
○（日曜日　夕方）　繁華街。……146
○古屋、大谷の反対側の歩道……147
○（同）イタリアンレストラン……150
○（同）古屋　大谷の席……150
○（その日の夜）松本の部屋……152
○（次の日の朝）Ｐ＆Ｈ商事株式会社の給湯室……153

Copyright@2026 D³S

○（昼）事務所　大谷の席……154
○（夕方）会社近くの喫茶店……156
○繁華街の道……160
「X接点」（第四話）……162
サブタイトル「亀山と古屋」……163
あらすじ……163
□第一幕　嫌がらせ……164
○（翌日の昼過ぎ）P＆H商事株式会社の事務所　大谷の席……164
○（翌日）会社　大谷の席……167
○（ある日の朝）会社　大谷の席……174
○事務所　古屋の席……175
○サーバールーム……176
○（数分後）事務所　杉本の席……177
○（数日経過後の昼休み）　会社近くの道……178
□第二幕　マグカップの想い出……183
○（翌日の朝）事務所　大谷の席……183
○男子トイレの個室の中……185

Copyright@2026 D³S

○（同）給湯室……185
□第三幕　古屋と亀山の出会い……191
○（十五時のお茶の時間が終わった）給湯室……191
←＃　回想　＃←　数年前　亀山　入社当時）……192
○（定時後）事務所　亀山の席……192
○（二十二時）会社　亀山以外誰もいない……194
→＃　現在に戻る　＃→……198
○（現在）会社の給湯室……198
○（就業時間後）古屋の席……199
□第四幕　デパートにて……201
○（夕方）百貨店の食器売り場……201
古屋　亀山、マグカップの場所をを探しながら歩いている……201
↓＃　回想　＃↓　亀山　古屋とのもう一つのできごと……202
○（前回の出来事から　さらに数ヶ月後）事務所……202
○給湯室……203
○ビルの医務室……204
○（翌日）会社　古屋の席……204

Copyright@2026 D³S

〇（就業時間後）どこかの百貨店……207
→＃　現在に戻る　＃→……209
〇（現在）デパート……210
〇（夜）道……210
〇公園の前……211
「X接点」（第五話）……213
サブタイトル「大谷　ピンチ　再び」……214
あらすじ……214
□第一幕　仲直り……215
〇（翌日の朝）会社……215
□第二幕　仲直りの遊園地……219
〇（週末の土曜日の朝）ユニバーサル・ランド……219
〇コースターから出たところ……220
〇（夜）帰りの電車の中……221
〇電車　停車し扉が開く……223
□第三幕　女王様の宴　もう一人のお局　（大谷　ピンチ！）……224
〇会社　経理課前の廊下……224

Copyright@2026 D³S

○（その週末の土曜日の昼）　鈴木のマンションのドア……227
○鈴木のマンションの部屋……228
□第四幕　翌日の会社で……253
○（月曜日の朝）会社　古屋の席……253
○（同）総務課の前の廊下……256
○エレベーターの中……261
「X接点」（第六話）……263
サブタイトル　「プール」……264
あらすじ……264
□第一幕　プールにて……265
○（夏の暑い日）屋外プール……265
←#　回想　#←　大谷　父とプールでの想い出……270
○プールサイド……270
○流れるプールの中……273
○（夕方）プール……274
○プールの事務所……274
○大谷の住んでいるアパート……275

Copyright@2026 D³S

→＃　現在に戻る　＃→……276
○大谷の部屋……276
○（夕方）大谷のアパートの玄関……277
←＃　回想　＃←　大谷　高校二年生……279
○小村の家、小村の部屋……279
○小村の家の駐車場……282
○中年男性の部屋……283
○（夕方）カメラ屋の前……287
○（その夜）大谷の入っている施設　大谷の部屋……287
→＃　現在に戻る　＃→……288
○大谷の部屋……288
第二幕　大谷が発熱……289
○（プールへ行った翌日の月曜日）事務所……289
○（夜）大谷の家……289
←＃　回想　＃←　大谷の入社試験……295
○会社の会議室……295
→＃　現在に戻る　＃→……297

Copyright@2026 D³S

〇大谷の部屋……297
〇（数十分経過）大谷の部屋……299
〇夜道……301
〇駅の改札……302
古屋と亀山が話をしている、……302
〇亀山家の玄関……303
〇亀山家、リビング……304
〇（翌日の朝）会社の給湯室……305
「X接点」（第七話）……307
サブタイトル　～大谷の恋人候補～……308
あらすじ……308
□第一幕　大谷に恋人をつくろう……309
〇（夕方）会社のビルの前……309
〇レストランの中……311
□第二幕　妹　登場……315
〇（その日の夜）亀山家のビング……315
〇（翌週の日曜日の朝）駅前　待ち合わせ場所……318

Copyright@2026 D³S

○電車の中……321
○ユニバーサル・ランド……321
○テーマパーク内の休憩所……322
□第三幕　昭博との再開……324
○（ある日の土曜日）街のどこかの待ち合わせ場所……324
←＃　回想　＃←　鈴木の部屋での出来事……326
○鈴木のマンションの部屋……326
→＃　現在に戻る　＃→……327
□第四幕　昭博に誘われて……334
○（翌日の日曜日　昼）古屋の家……334
□第五幕　四人でデート？？？……338
○（土曜日の夜）繁華街の居酒屋……338
○（深夜）カラオケ店の前……340
□第六幕　昭博のマンションにて……345
○（三十分後）昭博の住んでいるマンションのドアの前……345
○（深夜）タクシーの中……358
□第七幕　～微妙な距離の人～……358

Copyright@2026 D³S

〇（ある日の夜）レストラン……359
◦（その日の夜）亀山家　千里の部屋……360
〇（夜）大谷の部屋……363
□第八幕　千里とのデート……364
〇（翌日の昼）街中……364
〇ホテルのプールのフロント……365
〇（夜）ホテルを出た道……373
「X接点」（第八話）……376
サブタイトル「いつかの河原にて」……377
あらすじ……377
□第一幕　許しあった夜……378
〇（夜）飛行場近くの土手……378
〇（その夜）古屋の部屋……384
〇（翌朝）会社の事務所　入口……384
〇（一週間経過した夜）飛行場の見える土手……385
〇（翌日の朝）古屋のマンション……386
□第二幕　～寒い季節がやってきた～……388

Copyright@2026 D³S

○（夜）新幹線の中　古屋　大谷が座っている席……389
○（翌日）会社の事務所……393
○（退社時刻を過ぎた）会社……394
○（その日の夜）大谷の部屋……395
「X接点」（第九話）……397
サブタイトル「クリスマスの夜」……398
あらすじ……398
□第一幕　クリスマスの夜……399
←#　回想　#←　少年時代の大谷　クリスマスイブ……399
○昔の大谷の住んでいるアパートの一室……399
→#　現在に戻る　#→……403
○（クリスマスイブの夜）会社……403
□第二幕　亀山編……405
○（クリスマスイブの夜）レストラン……405
○（夜）繁華街……408
○古屋のマンション……410
○古屋の家のリビング……411

Copyright@2026 D³S

□第三幕　大谷編……414
〇（クリスマスの朝）大谷の部屋……414
〇街中……419
〇古屋の家のリビング……419
第四幕　野崎編……420
〇（昼過ぎ）繁華街……420
〇野崎の店……423
□第五幕　小村編……431
←＃　回想　＃←　小村　就職したての頃……431
〇（数年前）雨の降る　夜のビジネス街……431
〇（数時間前）小村が働いている会社　事務所……431
→＃　現在に戻る　＃→……431
〇雨の降る　夜のビジネス街……431
〇（その夜）古屋の住んでいるマンションの部屋……436
←＃　回想　＃←　小村　会社での出来事……438
◦小村が新入社員の頃　努めていた会社の一室……438
〇（同）古屋の部屋……439

Copyright@2026 D³S

→＃　現在に戻る　＃→……442
□第六幕　脱出……443
○野崎のバー……443
「X接点」（第十話）……458
サブタイトル　「最終章」……459
あらすじ……459
□第一幕……460
〇古屋の部屋……461
〇野崎のバー……462
□第二幕　思い出の場所……464
〇（深夜0時）　古屋の部屋……464
ベッドで大谷が寝ている……464
〇飛行場近くの土手……465
←＃　回想　＃←　一時間前の出来事……467
〇コーヒーチェーン店の入口……467
→＃　現在に戻る　＃→……468
□第三幕　野崎のバーにて……47

Copyright@2026 D³S

〇（数時間前）野崎のバー……473
□第四幕　再び古屋の車の中……475
〇古屋の車の中……475
□第五幕　野崎のバー……477
〇野崎のバー……477
□第六幕　空港の土手……480
〇（クリスマスの朝）　空港近くの土手……480
□第七幕　会社……481
〇（月曜日の朝）事務所……481
□第八幕　夜に消える……486
〇（夜）ビル街……486
「X接点」完……487

Copyright@2026 D³S

「X接点」（第一話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「歓ゲイ会での出来事」

あらすじ

新入社員歓迎会で、上司の野上にせまられるところを、古屋に助けられる
その後、古屋の家に一泊させてもらうことになるのだが？

Copyright@2026 D³S

（ナレーション）

□第一幕　歓ゲイ会

X接点、カメラとストロボを接続する接点
ここに電気が流れると、まぶしい閃光が光る。

人は、ふとしたきっかけで、過去を思い出す。
まるで、ストロボのような閃光を発し
過去の出来事がよみがえる。

それを、

（＃フラッシュバック＃）

フラッシュバック　と言う。

○（朝）ビジネス街
ビジネスマンの出勤風景

季節は春
世間の会社は、紺色の真新しいスーツに包まれた新入社員が
大勢・・・・と言いたい

（ナレーション）

Copyright@2026 D'S

ところだが、バブル崩壊以降、新入社員の採用数は年々減ってきている。
そして、わずかな新入社員
貴重な新入社員は、重宝されるのかというと、そうではない。

優秀な新入社員は、追い越されまいと、先輩社員のイジメにあい、
耐えられなくなり、　会社を去って行く。
そして、彼らはフリーターとして、生きていく事になるのである。

運良く、先輩のイジメに合わず可愛がられる社員もいる。
しかし、その可愛がり方にもいろいろある。

〇（夕方）Ｐ＆Ｈ商事　事務所
　サラリーマン、ＯＬが　退社前時間前で慌ただしく動いている

〇壁に掛かった時計の針が　まもなく十七時三十分を指そうとしている

“キーン・コーン・カーン・コーン”

▽野崎、自席を立ち上がる

▽野崎、課員に聞こえるように話す

（チャイム）

Copyright@2026 D³S

野崎　「おーい、今日は、新人歓迎会だぞ。仕事は切り上げろよ」

▽営業課メンバー、一斉に机の上の物を片付けだしす

▽森崎、（隣の営業二課）振り向き、亀山に声をかける

森崎　「お！今日は、飲み会かい？」

▽亀山、振り向き、森崎の顔を見る

亀山　「そうよ、新人君の歓迎会なの」

▽森崎、少し離れた場所に座っている新人（大谷）の方をチラッと見る
　大谷が帰り支度をしている

森崎　「そっか、一課は今年　新人さん入ったんだよな」

森崎　「カワイイ顔してるじゃん。
　酔わせて、お持ち帰りするんじゃないぞ」

亀山　「何を言ってるの。お子ちゃまには興味ないわ」

Copyright@2026 D³S

森崎　「冗談、冗談。強姦罪だもんな」

▽松本、亀山のそばにくる

▽松本、亀山に声をかける

松本　「姉御、早く着替えて行きましょうよ。良い席を取らないと」

亀山　「そうね、Ｎ（エヌ）の横になんかだそ最悪だもんね」

▽亀山　松本、更衣室へ移動

〇（夜）居酒屋の中　大谷と野崎の席

歓迎会は、居酒屋の一室を借り切ってあった。

営業一課は、総勢８名の部署

一番奥の上座と呼ばれる場所に、大谷　野崎が並んで座っている

▽大谷、緊張している

▽野崎、大谷に顔を向ける

野崎　「大谷君、どうだ？　少しは会社に慣れてきたか」

Copyright@2026 D³S

大谷　「いえ、まだまだです。でも、がんばって、早くみなさんの役にたてるようにがんばります。」

野崎　「そうか、判らないことがあったら、山下君に聞くといいよ。彼は、うちの会社の中でも、優秀だと俺が押すよ」

大谷　「はい、山下先輩には、いつもいろいろ教えてもらってます」

野崎　▽野崎、山下にグラスを向ける

　「おい！　山下、ちゃんと面倒みてやるんだぞ！」

山下　▽山下、野崎に向かってガッツポーズ

「おう！　任せてください」

　＃　歓談中　＃

野崎　▽野崎、だんだん酔いが廻ってきている

「最近の若い子は、どうなんだ．ねぇ　大谷くん」

Copyright@2026 D's

大谷　「課長、なにがでしょう」

野崎　「金よりも、休みが欲しいんだって。俺の新人のころは、車買いたくて金、金、金。残業、休日は喜んで会社に来てたぞ」

大谷　「そうですね。僕はどっちかって言うと、何もすることがないので、お金がもらえるなら、残業でも、何でもしますよ」

野崎　「えらい。世の中、金だよ金」

大谷　「そうです、そうです」

▽大谷、取りあえず野崎の話に合わす

野崎　「金が欲しいか」

大谷　「はい。欲しいです」

（大谷の耳元で）

野崎　「じゃ、俺が1万円で、君を買いたいっていったらどうする」

Copyright@2026 D³S

▽野崎、机の下で周りから見えないように、大谷の膝卯の上に手を乗せる

大谷　「いいですね」

▽野崎、指先で、大谷の股間をつつく

大谷　「それは、ダメです」

▽大谷、野崎の手をどける

野崎　「ほら、これよこれ」

▽野崎、大谷の膝上をさする

大谷　「冗談は止めてくださいよ」

▽大谷、野崎の手をどける

野崎　「ははは、冗談、冗談」

大谷　「課長、酔ってますよ。ほんと、だめですよ」

Copyright@2026 D³S

＃　歓談中　＃

野崎　「ところで、大谷君　彼女とはどうなの」

大谷　「彼女いないですよ。ぜんぜんです」

野崎　「えええーこんなにカワイイ顔してるのに、世間の女は目がないな」

大谷　「いえ、目があるから、ダメなんですって」

野崎　「もったいないな。ここ、立派そうだし」

▽野崎、大谷の股間の上に手を置き握る

大谷　「またまた、ちょっと止めてください。見られてますから」

野崎　「大丈夫、みんな酔ってるから、わかんないさ
ほんと、立派だよな　いつもスーツの前が膨らんでるからさ」

▽大谷、野崎の手をどける

大谷　「まぁ大きいって言われることはありましたけど」

Copyright©2026 D³S

野崎　「だろ、だろ、確認させてもらわなきちゃな」

大谷　「課長、冗談は止めてくださいよ」

野崎　「ははは、冗談　冗談」

大谷　「ですよね。僕、びっくりしちゃいました」

野崎　「ははは、冗談、冗談」

○亀山　林　松本が、座っている場所

▽亀山　林　松本、少し離れた場所で会話をしている

▽林、野崎と大谷の方を見る

　野崎が大谷に顔を近づけて話しているのが見える

松本　「課長の噂って本当かしら」

林　「それが本当だったら、今度の新人君なんか、絶好の餌食よね

Copyright@2026 D's

亀山　亀山さんも、そう思わない？」

松本　「私は、そんな話には　全然　興味ないわね」

「もう、姉御はは、古屋さん以外には興味ないんでしょ」

〇（夜）スナックの前の道

▽一同　帰りの身支度をしている
スマホで家に連絡するもの
数人で談笑している者がいる

社員Ａ　「終電なくなったな。どうやって帰ろうか」‥

社員Ｂ　「タクか、金がもったいないな」

社員Ａ　「そうだな。お前も付き合えよ」

社員Ｂ　「おれは、嫁さんに迎えに来てもらえるんだな」

社員Ａ　「裏切り者」

Copyright@2026 D³S

▽野崎、手でメガホンの形を作り口元へ

野崎「は～い、みんなぁお疲れさん。解散しまぁす。足の無い奴は、自分の金でタクシー拾って帰ってくださぁい」

（一同）「おつかれ～」

▽社員一同、散らばっていく

大谷「ありがとうございました」

▽大谷、お辞儀をしながら先輩達を見送る

▽大谷、周りに同僚がいないことを確認

大谷「さぁて、僕も帰るか」

▽大谷、タクシーを拾うため駅の方向に歩こうとる

野崎「おいおい、大谷くん。こっち、こっち」

▽大谷、声のする方を見る

Copyright@2026 ○○S

野崎が手招きをしている

▽大谷、野崎に近づく

大谷「課長は帰らないですか」

野崎「大谷君は、これからどうするつもりなの」

大谷「えっと、とりあえず、タクシーで帰るしかなさそうなので、駅のタクシー乗り場に行こうと思ってるのですが」

野崎「タクシーか　止めとけ、止めとけ。金かかるぞ。それよりも、俺と一緒にサウナに行かないか」

大谷「サウナですか。行ったことないんですけど」

野崎「サウナはいいぞ。酔いも冷めて、スッキリする。それで、朝までぐっすりだそれで、３０００円ですむ」

大谷「そうなんですか。ここからタクシーで帰ると１万円はしますもんね」

野崎「だろだろ。今日は君の歓迎会だから、金が俺が出してやるよ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「いえ、自分のお金は自分で出しますけど、着替えもないので・・・」

野崎　「男が、着替えくらいで心配しなさんな。それに、お金のことも気にするな。部長からも、ちゃんと面倒見るように言われているんだからさ、今度、部長に会ったら。課長はとってもいい人ですって言ってくれればいいんだよ」

大谷　「わかりました。じゃ、着いて行きます」

野崎　「よし　じゃ、行こう」

▽野崎　大谷、駅の反対方向に歩いて行く

▽亀山　林　松本、遠くから野崎、大谷と野崎の後ろ姿をみている

松本　「課長、やっぱり本物なのよ」

林　「まじ　キモ」

Copyright@2026 D's

□第二幕　サウナって超危険

○（深夜）雑居ビルのエレベーター前
　エレベーターに乗る二人

▽大谷、エレベーターの階数の表示が変わるのを見ている

＃エレベーターが止まる＃

▽野崎、エレベーターから降りる

▽大谷、野崎について降りる

▽野崎　大谷、雑居ビルの通路を歩く

▽野崎、扉の前で止まる

野崎

「ここだ、ここ」

▽大谷、扉の横の張り紙を見る

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Copyright@2026 D³S

＊　　＊
＊　会員制　＊
＊　　＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大谷　「ここって、会員制って書いてありますよ」

野崎　「ああ、俺は会員だから大丈夫だ」

大谷　「サウナの会員って　かっこいいですね」

野崎　「サウナの会員が、かっこいい？おもしろいこと言うな。
俺のような終電逃したサラリーマンなら、誰でもなれる会員だけどな」

▽野崎、扉を開け　中に入る

▽大谷、野崎について入る

○サウナ受付のカウンター
　受付の男がカウンターの反対側にすわっている

受付の男　「いらっしゃい」。

Copyright@2026 D³S

野崎　「大人二名」

受付の男　▽受付の男、大谷を凝視する

「そっちは、、若くてイケメンだね」
じゃ、ワカメン割りで、２人で３０００円」

野崎　▽野崎、財布からお金を取り出す

「はい、三千円」

受付の男　「じゃ、コレね」

▽受付の男、バスタオルとタオル、浴衣の入った手提げカバンを差し出す

▽野崎、手提げ鞄を受取り、一つを大谷に渡す

▽大谷、野崎から手提げ鞄を受け取る

大谷　「ありがとうございます」

Copyright@2026 D³S

野崎　「さぁ、とっとと入ろうぜ」

大谷　「はい」

▽野崎　大谷、カウンター入ってすぐの下手箱に靴を入れ、ロッカールームへ向かう

〇（同）ロッカールーム

ロッカーが並んでおり、サウナが終わった中年男性数人が椅子に座って涼んでいる

▽野崎、ロッカーの場所を把握しているかのように、ロッカールームを進む

▽大谷、野崎についていく

野崎　「ここだ、ここ。大谷君は、俺の横」

大谷　「はい」

▽大谷、ロッカーの扉を開け、シャツのボタンを外しだす。

▽中年男性、大谷が服を脱ぐのを見ている

Copyright@2026 D³S

▽大谷、妙な視線を感じ首を傾げる

▽大谷、肌着のシャツを脱ぎ、上半身裸になる
大学まで陸上で短距離を走っていたため、無駄な脂肪がなく、ほどよく筋肉がついて、俗に言う　良い身体をしている

▽大谷、ズボンを脱いで、ボクサーパンツだけの姿になる
尻は引き締まり、太股は筋肉が付き太くなっている

▽野崎、大谷の全身を足先から胸までじっくりと見る

野崎　「スーツを着ているとわからなかったが、良い身体してるね」

大谷　「ありがとうございます」

野崎　「確か、陸上をやってたんだよね」

大谷　「はい。そうです。短距離走専門でしたので、ガリガリですよ」

野崎　「いやいや、立派なもんだ」

大谷　「そんなこと言ってもらえるなんて、うれしいです」

Copyright@2026 D'S

野崎
大谷

▽野崎、股間をタオルで隠しながら
「先に行ってるからな」
「はい、すぐ行きます」
▽野崎、ロッカールームから、浴槽のある風呂場へ向かう
▽大谷、パンツを脱ぎ、前をタオルで隠して風呂場へ向かう
〇（同）風呂場
▽大谷、空いている場所を見つけて座る
▽大谷、タオルに石鹸を付け身体を洗い出す。
＃　数分経過　＃
▽大谷、誰（野崎）に肩をたたかれる
▽大谷、振り返り野崎の顔を見る

Copyright@2026 D³S

野崎　▽野崎、サウナの方を指差す

「あそこのサウナに入ってるから、後からおいで」

大谷　「はい。わかりました」

▽大谷、体についた石鹸を洗い流す。

▽大谷、立ち上がり腰にタオルを巻いてサウナに向かう

▽大谷、サウナ室の扉を開ける

〇（同）サウナールーム

中は蒸気でよく見えない

▽大谷、野崎の姿を見つけ　野崎の横に座る

▽野崎、大谷の顔を見る

野崎　「お、来たか」

Copyright@2026 D³S

大谷　「はい」

▽野崎、横に座っている大谷の体を上から下まで舐めるように見る

野崎　「いやー本当に、良い身体してるね」

大谷　「そうですか。ありがとうございます。そんなこと言われたの初めてです」

▽野崎、大谷の腹筋を触る

野崎　「腹筋がちゃんと割れている。羨ましいよ」

大谷　「ありがとうございます」

▽大谷、野崎の身体を見る

野崎　「おいおい、俺の見てもしょうがないだろ」

大谷　「野崎さんこそ、中年太りなんかせずに、スタイルいいですよ」

野崎　「ありがとさん」

Copyright©2026 D³S

野崎　「胸も触っていいか」

大谷　「はい、どうぞ」

▽野崎、大谷の胸を触る

野崎　「胸の筋肉はあまりないように見えるが、結構固いな」

大谷　「短距離だったもんで、筋肉は足しかつかないんですよ」

▽野崎、大谷の胸を揉み出す

大谷　「どうしたんですか」

野崎　「ちょっと揉んで見たくなったんだよ」

大谷　「くすぐったいですよ」

野崎　「すまん、すまん」

▽野崎、大谷の乳首の先を指先で触る

Copyright@2026 D³S

大谷　「くすぐったいですって」

野崎　「ははは、ついついだ」

　　▽野崎　手を放して自分の太股に手を置く

野崎　「どうだい、飲んだあとのサウナは気持ちがいいだろう」

大谷　「はい、さっぱりしますね」

野崎　「後は、上の仮眠室で朝までぐっすりだ。食堂もあるから、後で一杯やるか」

大谷　「いえ、僕は、もう十分です」

野崎　「そうか。俺の若いころは、朝まで飲めたんだけどな」

大谷　「僕は、そんなに飲めないので」

野崎　「そっか。飲めないのか。」

　　▽野崎、大谷の下半身を見る

Copyright©2026 D³S

野崎　「俺は、飲めるけどな。君のだって」

▽大谷、意味が分からない

野崎　「ところで大谷君、最近、あっちの方はどうなんだね？」

大谷　「あっちと言うのは」

野崎　「若いんだから、彼女と毎晩のようにやってるんだろ？」

大谷　「いえ、さっきも言ったとおり、彼女はいないので」

野崎　「でも、女との経験ぐらいはあるだろう？」

大谷　「まぁ、あることはあるんですが、実はちゃんとしたのは、まだなんです」

野崎　「ちゃんとしたのとは、意味深だな」

大谷　「まぁ　いろいろありまして」

野崎　「人生　長生きしてれば　いろいろあるさ」

Copyright©2026 D³S

大谷　「そうですよね」

野崎　「じゃ、最近は、やってないのか」

大谷　「そうですね」

野崎　「困るだろう」

大谷　「一人で出来ますから」

野崎　「一人だと虚しいだろ」

大谷　「そうですけど」

野崎　「じゃさ、俺がしてやろうか」

大谷　「え、課長が」

野崎　「俺じゃ不満か」

大谷　「そうではなく、男同士ですよ」

Copyright@2026 D³S

野崎　「俺は、気にしないぞ」

大谷　「課長は気にならないかもしれませんが、僕はちょっと」

野崎　「なんだ、なんだ、誰のおかげで、会社に入れたと思ってるんだ？
俺が、君を押したからじゃないか」

大谷　「いや、しかし」

野崎　「大丈夫だ　心配するな。ちゃっちゃと、手でいかせてやるだけだから」

▽野崎、大谷の陰茎をタオルの上から揉む

▽大谷、周りの目線を感じる

「ほんとうに　止めてください。こんなところで　人が見てますよ」

「ここをどこだと思ってるんだ。ただのサウナだと思ってたのか」

▽大谷、周りをよく見る

サウナの湯気で見えにくいが、抱き合っていたり、
誰かの股間に頭を埋めて、頭を前後に動かしているような

Copyright@2026 D³S

ものが見える

大谷　「ここは」

野崎　「ここは、そういうことをする場所なんだよ」

▽客（古屋）まだ　顔はわからない）大谷の横に座る

野崎　「ほら、おまえが、ちゃっちゃと始めないから、他のやつも来たじゃないか」

▽野崎、タオルの中に手を入れる

大谷の陰毛がないことが分かる

野崎　「お前、パイパンじゃないか。

そうかそうか、やっぱり、こっちの世界のやつだったんだな」

大谷　「違いますって。陸上やってたので、剃ってただけす」

▽野崎、大谷の陰茎を握る

大谷　「あっ、やめてください」

Copyright@2026 D³S

野崎　「ギンギンじゃねぇか」

野崎　「だんだん、気持ち良くなってきたろ」

大谷　「ち、ちがいますって」

▽野崎、大谷の陰茎を扱きはじめる
大谷の陰茎を隠しているタオルが激しく揺れている

大谷　「あ、あ、あい・・・」

野崎　「気持ちいいんだろ。いきそうになったら、言えよ。楽しませてもらわないとな」

大谷　「い、いちゃいます」

▽野崎、扱く手を緩める

野崎　「どれ、おそろそろ、拝ませてもらおうかな」

▽野崎、大谷のタオルを剥ぎ取ろうと手で大谷のタオルを掴む

大谷　「だ、だめです」

Copyright@2026 D³S

▽野崎、大谷の反対側にいる男に手を掴まれ、ひねられる

野崎　「いてて！　誰だ」

▽客（古屋）、野崎の手を掴み上げる

古屋　「いいんですか？　課長、新人にこんなことして」

▽野崎、古屋の顔を見る

野崎　「きさま」

古屋　「俺で良かったっすよね。奥様やお子さんに見られたら、なんて思われるか」

野崎　「きさまこそ、何してる」

古屋　「俺は、たまたま偶然ですよ」

▽古屋、大谷を見る

古屋　「おい、出るぞ」

Copyright@2026 D's

古屋　▽古屋　大谷の手を引っ張る

「ほら、立て」

大谷　「はい」

▽大谷、立ち上がる

野崎　「覚えてろよ」

▽古屋、大谷の手を引きサウナを出る

〇（深夜）雑居ビルの外

▽古屋　大谷、ビルから出てくる

▽古屋、大谷の顔を見る

古屋　「危なかったな」

大谷　「助けてくださり、ありがとうございます。えっと、お名前は？」

Copyright@2026 D³S

古屋　「俺の名前知らない。俺も　まだまだ有名じゃないか。システム開発部の古屋だよ。」

大谷　「すいません、会社で見覚えはあるのですが、名前はまだ知らなくて」

古屋　「ああ。俺だってうちの会社全員の名前なんていちいち覚えてないよ。たまたま、あの課長が、若いの連れてたの見つけたから、つけてみたのさ。まぁ、無事助かったんだから、良しとしよう」

大谷　「ありがとうございます」

古屋　「さて、帰るか」

大谷　「はい。本当にありがとうございました」

▽古屋　大谷、タクシー乗り場の方へ歩き出す

古屋　「大谷だっけ、どっち方面だ」

大谷　「はい。僕は」

Copyright@2026 D's

大谷　▽大谷、スーツの内ポケットを確認する

古屋　「あ！　財布がない。さっき慌ててから、ロッカーに財布を忘れてきたようです。どうしよう」

大谷　「いくら入ってたんだ？　カードは？」

古屋　「カードは使わない主義なんで入ってないんですけど、３千円くらいは合ったと思います」

大谷　「３千円か。微妙な金額だな。ああいう場所で財布を落としてしまったら、出てこないな。諦めるしかないな」

古屋　「でも、それじゃ、タクシーに乗るお金がないんです」

大谷　「しょうがいない、今晩は俺の家に泊めてやるよ」

古屋　▽大谷、ちょっと戸惑う

大谷　「何考えてんだ。大丈夫だって、心配するなよ」

古屋　▽大谷、古屋の顔を見て少し考える

Copyright©2026 D³S

大谷

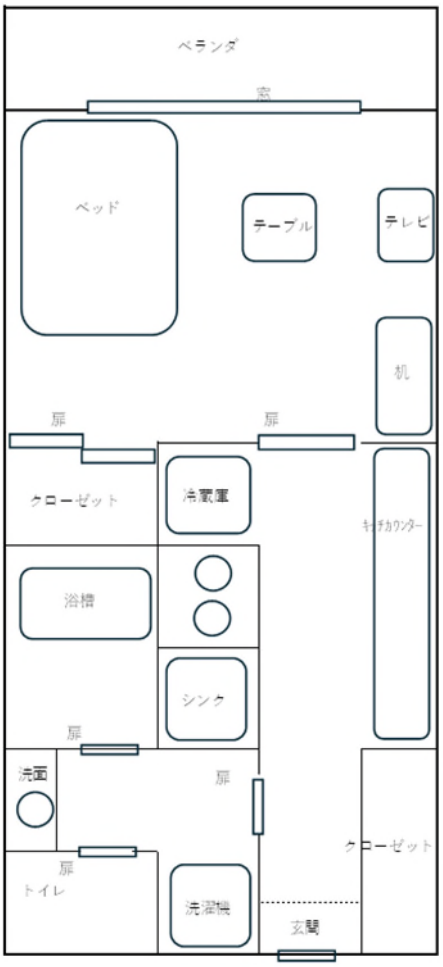
「はい、お願いします」

Copyright@2026 D³S

古屋

□第三幕　古屋と初めての夜

■古屋の部屋



○（深夜）古屋の住んでいる　ワンルームのマンション

玄関を入ると脇にはトイレと風呂場があり、その次にあるキッチン通り抜けると部屋があった。

部屋にはベットと大きな液晶テレビを設置。

テーブルの上にはノートパソコンが置いてある

「遠慮せずに、くつろいでいろよ」

Copyright D³S

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

▽大谷、テーブルの前に座った。

「カッコイイ部屋ですね。」

「物が無いから　そうみえるだけさ。何か飲む？」

「いえ　大丈夫です」

「遠慮するなって。」

「じゃ、水をいただけますか」

「水でいいのか」

「はい」

「オッケー。水飲んだら、シャワー浴びてこいよ」

「大丈夫ですよ」

「遠慮しなくていいぞ。それじゃ、俺が先にシャワー浴びてくるから

Copyright@2026 D³S

テレビでも見てるか」

大谷

「大丈夫です。スマートフォンで動画見てますから」

古屋

「最近の若いやつは、動画だよな」

大谷

「そうですね。家にはテレビがありませんので」

古屋

「テレビ無いの」

大谷

「はい。おかげで、日本国テレビの料金を払わずに済んでますから」

古屋

「そりゃ　良い考えだ。俺もテレビ捨てようかな」

大谷

「そうですよ」

古屋

「よし、俺は、シャワー浴びてくるから、冷蔵庫　勝手に開けて好きなの飲んでていいからな」

大谷

「ありがとうございます」

▽古屋、シャワーを浴びに風呂場に向かう

Copyright©2026 D³S

▽大谷　下を向いてスマートフォンを触り出す

（数分経過）

▽古屋、シャワーを浴びて部屋に戻ってくる
全裸で腰にバスタオルを巻いている
別のタオルで髪を拭きながら

古屋　「さっぱりした」

▽大谷、古屋の引き締まった体に見とれている

古屋　「どうした？」

大谷　「え、古屋さん、かっこいいなぁって」

古屋　「え？俺が。ダメダメ、年とって肉ついてきたし。
それよりも、大谷もシャワー浴びて来いよ」

大谷　「あ、はい」

Copyright@2026 DS

▽大谷、風呂場に向かう
　風呂で椅子に座り、シャワーで体を流している

古屋　▽古屋、風呂場にやってきて、扉の向こうから大谷に話しかける

古屋　「バスタオルと着替え、置いておくから」

大谷　「ありがとうございます」

▽大谷、風呂から出てくる
　ぶかぶかの上下のトレーナーを着ている
　古屋は、黒のボクサーブリーフだけ身につけた状態で座ってテレビを見ている

▽古屋、大谷のダブダブのパジャマを見る

古屋　「やっぱ、大きかったか」

大谷　「そうですね」

古屋　「着にくいなら、着なくていいぞ。俺みたいに、パンイチでよければ」

Copyright©2026 DFS

大谷　「そうですね」

▽大谷、パジャマと肌着のシャツを脱、パンツだけになる

大谷　「今度、洗って返しますね」

古屋　「いいよ、いいよ、間違って、俺には少し小さいサイズを買ったやつだかから」

大谷　「わかりました。ありがとうございます」

▽古屋、テーブルの飲み物が入ったグラスを指差す

古屋　「まぁ、座ってジュースでも飲んで」

大谷　「あ、はいいただきます」

▽大谷、古屋の反対側にすわる

大谷　「今日は、ありがとうございました」

古屋　「気にするなって、あいつの手癖が悪いのは有名だから」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そうなんですか」

▽古屋、大谷に顔を近づける

古屋　「実は、俺も新人の頃、狙われてたことがあってな」

大谷　「え、古屋さんもですか。やっぱりカッコイイですもんね」

古屋　「まぁ、ああいった人の考えはわかんないからな」

大谷　「本当に助かりました」

古屋　「さて、そろそろ寝るか。明日は土曜日で休みだから、好きなだけ寝ていいぞ
それから、俺が寝てたら起こさずに、そのまま帰ってくれていいから」

▽古屋、机をはしによけ、クッションを床に置く

大谷　「え、ベットで寝てくださいよ。僕がここで寝ますから」

古屋　「いいよ、お客さんなんだから、お前がベットで寝なよ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そんなわけにはいきませんよ」

古屋　「もう、暑いから、俺は床の方が寝れるんだって」

大谷　「そんなわけにはいかないですよ。そうだ、
このベット広いので、古屋さんさえよければ、二人で使いませんか？」

古屋　「よければって、ここは俺の家だし、俺のベットだし」

大谷　「そうでした」

古屋　「でも、いいのか」

大谷　「はい。古屋さんを信じてますから」

古屋　「じゃ、そうするか。でも、気をつけろよ。課長より俺の方が
テクニシャンだからな。どうなっても知らないぜ」

大谷　「隠してましたけど、実は、僕もテクニシャンなんですよ」

古屋　「お前、おもしろいな」

Copyright@2026 D³S

古屋

大谷

古屋

大谷

▽古屋、ベットの上に寝転ぶ

「カモン」

▽古屋、大谷に手招きをする

「失礼します」

▽大谷、古屋の横に並んで寝る

▽古屋、掛け布団をかける

「おやすみ」

「おやすみなさい」

▽古屋、背中を大谷の方に向け横になる

薄暗い部屋で　大谷の目に、古屋の背筋が見える

▽大谷、なかなか寝付けない

（数時間経過）

Copyright@2026 D³S

〇古屋の部屋
　一つのベッドに大谷と古屋が寝ている
▽古屋、寝ている大谷の方に向き大谷に抱きつく
▽大谷、驚く
（古屋さん　寝ぼけているのかな）
▽大谷、目の前に古屋の顔
▽古屋、大谷を抱きしめる
（古屋さん　きっと彼女とかと勘違いしてるんだ）
（数分経過）
▽古屋、腕から大谷を離し　仰向けになる
　古屋の立派な胸筋が薄明かりで見えている
▽大谷、上半身体を起こし古屋の寝顔を見る

（大谷）

（大谷）

Copyright@2026 D³S

▽大谷、ゆっくりと古屋の顔に自分の顔を近づける

▽大谷、古屋にそっとキスをする

▽大谷、そのまま古屋の胸に顔をうずめ寝てしまう

←＃　回想　＃←　夢の中で　過去に起こった大谷の出来事

〇真っ暗な部屋の中

暗闇で、裸の男（小村）の上に乗り、小村の乳首を舐めている大谷

（過去の）大谷　「どうですか」

（過去の）小村　「うん、気持ちいいよ」

（過去の）大谷　「もっと、気持ち良いことしてあげる」

（過去の）小村　「あ、あ、あう」

（しばらくして）

Copyright©2026 D's

（過去の）大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

▽（過去の）大谷と、（過去の）小村が、キスをする

「もう、大丈夫」

（＃　現在に戻る　＃）

○（翌朝）古屋の部屋

「おはよう」

▽大谷、古屋に腕枕された状態で目を覚ます
　目を開けると、古屋の顔があり、驚く

「あ、おはようございます」

「よく寝れたようだね」

「はい」

「あんまり、気持ちよさそうに寝てるので、起こしたくなったけど、
俺も起きたいので、腕から頭をどけてもらっていいかな」

Copyright©2026 D³S

大谷　「え」

▽大谷、古屋に腕枕されていることに気がつく

大谷　「すいません」

古屋　「それと、そっちの手も」

▽大谷、左手を古屋のボクサーパンツの中に入れ、古屋の陰茎を握っている

▽大谷、すぐに手を古屋のパンツから取り出す

大谷　「あ、すいません」

古屋　「彼女とやってる夢でも見てたのか？」

大谷　「いえ、そんなわけでは」

古屋　「気にしなくていいぞ　」

▽大谷、体を起こす

Copyright©2026 D³S

大谷

古屋

大谷

▽古屋、体を起こし、ベッドから出る

▽古屋、トイレに行き、用を足して戻ってくる

「すいません」

「大丈夫だって、怒ってないから。食パン焼いてるから食べたら帰れよ」

「はい」

Copyright@2026 D³S

「X接点」（第二話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「裏切り者には制裁を」

あらすじ

野上は、大谷に断れた腹いせに、さまざまなパワハラを行います。
とうとう、耐えきれなくなった時、古屋に打ち明け　その結果

Copyright@2026 D³S

□第一幕　野崎からのパワハラ

〇（月曜日の朝）Ｐ＆Ｈ商事株式会社　給湯室

▽亀山　林　松本、しゃべっている

▽亀山、給湯室から時折顔を出しエレベーターのドアが開くのを気にしている

＃エレベーターのドアが開く＃

▽古屋、エレベーターから出てくる

▽亀山、古屋に近づく

▽大谷、亀山より先に、古屋の前に立つ

大谷　「おはようございます。古屋さん」

▽亀山、思わぬ邪魔が入り唖然とする

古屋　「おはよう。朝から　どうした」

Copyright@2026 D³S

大谷　「借りていた電車賃です」

▽大谷、手のひらに乗せた円硬貨を差し出す

古屋　「別に　返さなくてもいいんだよ」

大谷　「いえ、お金の貸し借りはちゃんとしておかないと」

古屋　「そっか。じゃ」

▽古屋、お金を受け取る

古屋　「確かに」

▽古屋、立ち去る

▽亀山、すごすごと給湯室に戻っていく

（亀山）（何？　今の二人。なんで、大谷君と？）

〇古屋の席

Copyright@2026 D³S

▽亀山、古屋の席にお茶を置く

亀山　「おはようございます」

▽亀山、古屋の机に湯呑みを置く

古屋　「おはよう。毎日ありがとう、亀山さん、課が違うからいいのに」

亀山は、営業一課。古屋はシステム課なので、所属課が違う。
本来なら、関係のないはずだが、古屋のお茶は亀山が入れることが、
この事務所の中では暗黙の了解であった

亀山　「私が好きでやってるので。それに、新人の頃、、古屋さんに
いっぱい助けてもらったので」

古屋　「そんな昔のことを」

亀山　「いいんです。私も好きでやってるので
そういえば、さっき、うちの課の大谷君と話してましたけど、
何かあったんですか？」

古屋　「ああ大谷君ね。先週、営業で歓迎会があったんだろ

Copyright©2026 D³S

亀山　その時に、たまたま道端で酔いつぶれたの見つけてしまったんだよ。しかも財布落としたって言うしさ、電車賃を貸してあげたんだよ」

古屋　「そうなんですか。古屋さんは、誰にでも優しいんですね」

「まぁ　会社の同僚を助けないわけにはいかないしね」

〇（始業時間後）事務所
社員が忙しそうに仕事をしている

▽野崎、大谷を睨んで見ている

野崎　「大谷、三晃商事の件はどうなってるんだ？」

大谷　「すいません、昨日　見積もりを出したばっかりで」

野崎　「何やってんだ！　ノロマ。使えねぇやつ」

▽山下、野崎の声を聞いてフォロー

山下　「課長、その件は僕が責任を持ってやらせていますから、今週中には大丈夫です」

Copyright@2026 D's

野崎　「おまえには聞いておらん。大谷に聞いてるんだ」

山下　「はぁ」

▽山下、野崎の機嫌が悪いことを察し、黙る
　大谷に顔をみて、小さくうなずく

（数時間後）

野崎　「大谷君は、どこの大学だったけ？」

大谷　「え、はい。日商大です」

野崎　「いくら人手不足とはいえ、うちは、そんな三流からも採用しなくちゃならないのか。ずいぶん落ちブレたな。」

大谷　「すいません」

野崎　「人手不足のおかげでよかったな」

▽大谷、無言

Copyright@2026 DFS

野崎
男性社員
女性社員
野崎
大谷

（数時間後）
○昼休みのチャイムが鳴る
▽野崎、席を立ち上がる
「おーい、たまには俺のおごりで昼に行くか？」
「お！　いいですね」
「課長のおごりなら、行ったことない　イタリアンがいいわ」
▽社員、席を立ち始める
▽大谷、席を立ち上がる
「あ、大谷君は、電話番しておいてくれるかな」
「あ、はい、わかりました」
▽大谷、椅子に座る

Copyright@2026 D³S

山下　「課長、昼休みくらい　スマートフォンだって持ってるので、電話番なんか必要無いですって」

野崎　「何言うか、そういうときにこそ、大切な商談の電話が鳴るもんだ」

大谷　「僕、電話番しているので、皆さんで行って来てください」

山下　「そっか、悪いな」

野崎　「ごら、三流は、ほっておいて行くぞ」

▽社員、事務所から出て行く

▽大谷、パソコンで仕事をしている

○昼休み終了のチャイムがなる

▽野崎ら、帰ってくる

野崎　「よく、食ったなぁ」

Copyright@2026 D'S

女子社員　「美味しかったわ」

山下　「ごめん。ちょっと遅くなった」

大谷　「電話は鳴りませんでしたので」

山下　「ありがとう。お前も昼行ってこいや」

大谷　「はい、行ってきます」

▽大谷、席を立つ

野崎　「バカなことを言うな、昼飯は昼休みに取るもんだろう！仕事が忙しい時は、昼飯なんか食いにいってる場合か！」

山下　「課長、大谷は電話番してくれてたんですよ。」

野崎　「電話　かっかってなんだろ。じゃ、仕事してないな」

山下　「しかし、課長の指示でさせたんですから」

野崎　「俺？俺、そんなこと言った。そいつが、勝手にしたんじゃないのか」

Copyright@2026 D³S

大谷　「山下先輩、僕、昼ぐらい食べなくても平気ですから」

▽大谷、席につき再び、パソコンのキーボードを叩き出す

○給湯室

亀山、林、松本がいる

▽大谷、昼食が取れなかった大谷は、お茶で空腹を満たそうと給湯室へ行く

大谷　「すいません、お茶入れてもいいですか？」

林　「あ、どうぞ」

▽亀山　林　松本、大谷の為に　場所を空ける

▽大谷、お茶を入れる

松本　「大谷君、ちょっとちょっと」

大谷　「はい。何か」

Copyright©2026 D's

松本　「今日の課長、君にすごく態度冷たいわね。何かあったの？」

大谷　「いえ、僕には　わかりません」

　大谷は、一連の課長の態度の豹変ぶりは、週末の出来事だと
感づいていたが、とぼける

松本　「そうなのぉ？宴会が終わって、あなたと課長が二人でどこかに行くところを
見たんだけどな」

大谷　「駅の方向が同じだっただけです」

松本　「正直に言っちゃいなさいよ」

大谷　「本当です。駅から課長はタクシーに乗って先に帰りましたから」

松本　「嘘を言ってもだめよ。駅と違う方向に歩いて行ってるの見てるのよ。
しかも、ホテル街の方に」

林　「えぇぇホテル？それは、ちょっと露骨すぎない」

亀山　「ホテルって？　彼らは男同士なのよ」・

Copyright@2026 D³S

大谷　「ホ、ホテルなんて行ってません。ただ、課長とは」

松本　「ただ？　ただ課長とはどうしたの？」

大谷　「も、もう一軒、飲みに行ったんです。で、課長をタクシーに乗せた後、僕は酔い潰れてどこかでしゃがみこんでいたら、そしたら、古屋さんに声かけられて、古屋さん家に泊めてもらったんです。だから課長とはなにもないです」

亀山　「え、古屋さんの家に行ったの？」

大谷　「はい。どこかに財布を落として、タクシーに乗るお金も無かったので」

亀山　「ねね、古屋さんの家ってどうだった？　一緒に住んでいる人はいた」

大谷　「一人でしたよ」

亀山　「で、女の人とかいそうな感じだった？」

大谷　「すごく片付いた部屋で、パソコンとテレビくらいしか見なかったですけど」

Copyright@2026 D's

亀山　「他には？」

大谷　「そんなことまでは　わからないです」

松本　「アネゴ、まだガキンチョに女の気配を感じとるのは難しいですよ」

亀山　「そう、また何かわかったら、教えてね。どんな事でもいいわよ。それから、課長があなたに何を言っても気にしないでいいのよ。私たちはあなたの見方だから」

大谷　「はい。ありがとうございます」

亀山　「さぁ　仕事に戻るわよ」

松本　「もう、いいんですか？」

亀山　「ええ、もういいわ」

▽亀山　林　松本、給湯室から出て行く

▽大谷、給湯室を出る

Copyright@2026 D³S

（数日経過）＃契約書の行方＃

〇（ある日昼食が終わった午後）事務所内

野崎　「大谷、プラネット製薬との契約書は、もらえたか？」

▽大谷、隣の山下の顔を見る

▽山下、大谷向かって　首を縦に振る

大谷　「はい、バッチリです」

野崎　「契約書チェックしてやる。貸してみろ」

大谷　「はい」

▽大谷、山積みの書類から契約書を探す

しかし　見つからない様子

山下　「どうした」

大谷　「ない。ない。契約書がない。契約書が無いんです」

Copyright@2026 D³S

野崎　「契約書を無くしただと！　バカやろー探し出せ！」

▽大谷、必死で探している

▽山下、野崎の方を向く

山下　「私も確認しましたので、会社には持って帰ってるはずです」

山下　「カバンの中をもう一回みてみろ」

大谷　「はい、見ました。昼休み行く前に、机の上にあるの見たんです」

山下　「誰かが間違えて持って行くような書類じゃないしな。
本当に、プラネット製薬の契約書だったんだな」

大谷　「はい、間違いありません」

山下　「まさか、清掃員のおばちゃんに捨てられたとは思えないが、
課長、もう一度、契約書　もらい直しましょうか」

野崎　「ダメだダメだ！

Copyright@2026 D's

無くしたので、もう一度契約書にハンコ押して下さいなんて、恥さらしな事言えるか。なんとしても探せ！俺が、夕方に戻ってくるまでに探しておけよ」

▽野崎　席を立ちその場を出る

山下「大谷、ビルのゴミ捨て場に行ってみよう」

大谷「はい」

〇男子トイレの中

▽野崎　トイレに入り、そして、かばんからから、封筒のような物をを取り出し、トイレのゴミ箱に捨てる

〇事務所

▽大谷　山下、書類を探している

山下「本当に、ここにあったんだよな」

大谷「はい、昼飯前に、机の上に置いてあったのは確かなんです。」

Copyright@2026 D's

山下　「俺も、今朝、会社で見せてもらったもんな。他の書類に紛れたか」

大谷　「書類保管室には行ってないですけど、誰かが間違えるということもあるので見てきます。」

▽大谷、事務所から急ぎ足で出て行く

○エレベーターの前

▽大谷、エレベーターの前で待っている

古屋　「おい、大谷」

▽大谷、声のする方を向く

古屋の姿を見つける

古屋　「これ、お前の大切な書類じゃないのか」

▽古屋　封筒を渡す

大谷　「あった。それです。探していたの

Copyright@2026 D's

古屋　どうして、古屋さんが」

大谷　「トイレの洗面台に置いてあったぞ」

古屋　「そうなんですか?トイレに持っていた覚えはないんだけど」

大谷　「なんの書類」

古屋　「契約書です」

大谷　「そんな大切な書類、トイレに持って行ったらダメじゃないか」

古屋　「でも、持っていった覚えはないんですけど」

大谷　「じゃ、どこかで落としたのを拾った奴が、置いていてくれたのかな
そんなことはどうでもいいけど、早く持って行った方がいいんじゃないか」

古屋　「そうでした。ありがとうございます。」

▽大谷　事務所に戻り山下のところに行く

大谷　「山下さん、ありました。トイレの中に」

Copyright©2026 D³S

山下　「よかった。」

▽野崎　事務所に戻ってくる

▽大谷　野崎に契約書を渡す

大谷　「はい、課長、ありました。これです」

野崎　「ああ」

▽野崎　渋々　契約書を受け取る

（数日経過）＃野崎の難癖が続いている＃

〇（数日経過　ある日）事務所

▽野崎　難癖をつけては大谷を叱責している

▽大谷　そろそろ精神的にも限界で、顔の表情が暗い

野崎　「大谷、この案件の見積り、三光システムから、もらってきてくれ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「はい、わかりました」

▽大谷　メールで着た見積もりを印刷し野崎に渡す

野崎　「はぁ？　おまえ、あほか？　誰が、三光システムから見積もりをもらえって言ったんだよ？」

大谷　「え、でも、さっき課長が、」

野崎　「俺が言うわけないだろ？　この不景気に、三光システムみたいなところから、見積もり取るなよ」

大谷　「わかりました」

▽大谷　しょぼくれた顔で　トイレに向かう

○トイレの前

▽大谷　トイレから出ようとする

ちょうど、トイレに入ろうとしていた古屋にぶつかる

Copyright©2026 D³S

古屋　「おっと、ごめんごめん」

大谷　「・・・すいません」

古屋　「どうした？　顔色悪いな」

大谷　「いえ、別になんともないです」

古屋　「そうか？ならいいけど。」

大谷　「仕事に戻りますね」

古屋　「今日は、仕事定時で終わるのか？」

大谷　「はい、たぶん」

古屋　「じゃ、飯でも行こうぜ」

大谷　「本当に気にしないでください」

古屋　「このまま、ほって置く方が　気になってしかたないじゃないかいいから、いいから、じゃ、六時に」

Copyright@2026 D³S

古屋　○（夕方）会社ビルの玄関　大谷が待っている

大谷　「悪い悪い　誘った俺が遅れるとは」

古屋　「大丈夫です」

「じゃ、行こうか」

○（数分後）会社近くの繁華街

▽大谷、古屋　歩いている

大谷は　うつむき加減

古屋　「何がいい」

▽大谷　無言

古屋　「おれは、そうだな」

「そうだな。やっぱ、居酒屋だな」

Copyright@2026 D's

古屋　▽大谷　無言

大谷　「どうした?大谷、居酒屋は嫌か」

古屋　「僕、もっと静かなところがいいです」

「静かな所って言われてもな」

古屋　▽大谷　無言

「じゃ、俺の家で、家飲みにするか」

▽大谷　うなずく

「よし　決まり」

○古屋の家の近くのコンビニ

▽大谷　入口で古屋が出てくるのを待っている

▽古屋　買い物袋を持ってコンビニから出てくる

Copyright@2026 D³S

古屋　「おまたせ。いろいろ買ったぞ。さぁ　行こう」

▽大谷、古屋　道を歩きだす

〇（夜）古屋の家

▽古屋　家の鍵を開け、ドアを開ける
　　明かりが付いていないので暗い

▽大谷、古屋　暗い廊下を進んで、部屋に入る

古屋　「今、電気を付けるから」

▽古屋　壁のスイッチで灯りをつけようとする

▽大谷　古屋の背後から抱きつく

古屋　「どうした？」

大谷　（泣き出しそうな声）「会社　辞めたいです」

古屋　「そうか、わかった。じゃ、しばらく、こうしていたらういい」

Copyright@2026 D³S

▽古屋　前に回った大谷の手を握り締める

〇（深夜）古屋の部屋のベット

▽大谷　一人で寝ている

Copyright@2026 DFS

第二幕　野崎の転落

〇（夜）某ゲイバーの中
　野崎は客としてカウンターに座っている
　カウンターの中には、ボーイ（小村）が立っている

▽野崎、カウンターに座り、酒を飲んでいる

野崎　「ち、あいつめ、ちょっとかわいい顔してるからって、
　オレに逆らいやがって
　こうなりゃ、あいつが辞めるまで、とことんやってやる」

▽小村、野崎に声をかける

小村　「何かあったんですか」

野崎　「俺か？」

小村　「さっきから、ずっと独り言を言ってますよ」

野崎　「悪い悪い　うるさかったかな」

Copyright©2026 D³S

小村　「いえいえ、ここは、そういうことを吐き出すところなので大丈夫ですよかったら、俺が話を聞きましょうか」

野崎　「君は優しいな。世の中の男の子が　君のような子ばかりだといいんだがな」

小村　「そうですが。俺はぜんぜん優しくないですよ」

▽野崎、小村の顔をじっとみる
　なかなかのイケメンで、野崎の好みである

野崎　「じゃ、なにか欲しくて優しくしてくれてるのかな」

▽小村、笑う

小村　「バレてましたか。太客を捕まえないと、バイトクビになりますからね」

野崎　「ほんとうに　それだけか」

小村　「う～ん。でも金は欲しいですね」

▽野崎、小村に顔を近づける

Copyright@2026 D's

野崎
小村
野崎
小村

▽小村、野崎に顔を近づける
（小声）「じゃ、店が終わったら、どうだい」
（小声）「高くつきますよ」
（小声）「心配ない。俺は、アラブの石油王だ」
▽野崎、小村から顔を話す
▽小村、グラスを持ち
「じゃ、アラブの石油王に乾杯」
▽野崎　小村、グラスを交わし　酒を飲む
（数時間後）
〇（深夜）ラブホテルの建物から数メートル離れた電柱の影
▽古屋、電柱に隠れて立っている

Copyright@2026 D³S

小村　▽小村、ホテルの入り口から出てくる

古屋　▽小村、古屋の姿を見つける。

小村　▽小村、古屋の方にかけてくる

古屋　「どう?ちゃんと撮れた」

小村　「ああ、上出来。そっちは　大丈夫だったか」

古屋　「薬が効いて直ぐに寝てくれたから大丈夫。」

小村　「何もなくてよかったよ」

古屋　「心配してくれるんだ。ありがとう」

小村　「そりゃそうさ。お前は、俺にとって大事な人だからな」

古屋　「嬉しい」

小村　「あいつはには、今後、見つかるなよ」

Copyright©2026 D³S

小村　「わかってる。バイトも今日で辞めたし」

古屋　「そっか、バイト辞めたのか。悪いことしたな」

小村　「古屋さんのお願いだから」

▽古屋、スーツの内ポケットから、二つ折りのお金を取り出し、小村に差し出す。

▽小村、お金を受けとらない

小村　「いいの。古屋さんの役にたてれるなら、いらない」

古屋　「お金は　いくらあっても困らないだろ」

小村　「大丈夫。取りあえず　来月からは別の仕事が入っているんだ」

古屋　「そっか、おめでとう。じゃ、祝いだよ」

小村　「ありがとう。でも、御祝いなら、お金より食事がよかったな」

古屋　「わかった、考えておく」

Copyright@2026 D's

小村　「じゃ。また連絡してね」

▽小村、その場所から去って行く

＃　数分後　＃

○ラブホテルの入口

スーツ姿の野崎が慌てて出てくる

野崎　「あのやろう。今度見つけたら、ただじゃおかねぇ」

○（翌日の朝）Ｐ＆Ｈ商事株式会社の事務所

▽野崎、自席で仕事の準備をしている

▽女子社員、近づいてくる

女子社員　「野崎課長、渡辺部長が至急　来るようにと」

野崎　「ああ、わかった」

▽野崎、立ち上がる

Copyright@2026 D³S

（数分後）

○（同）部長室

渡辺が椅子に座っている

＃　ドアをノックする音　＃

野崎「野崎です」

渡辺「入れ」

▽野崎、ドアを開ける

野崎「失礼します」

▽野崎、部長室に入る

野崎「部長　お呼びですか？」

渡辺「ああ、そうだ。
野崎君。君は今日から総務課に異動してもらうことになった。

Copyright@2026 D³S

すぐに、今の机を片付けて、総務に行くように。いいな。今、すぐにだぞ」

▽野崎、笑う

「え？部長　なにかの冗談ですよね」

▽渡辺、真剣な顔

「冗談ではない」

▽野崎、真顔になる

「本当ですか」

「俺は、冗談は嫌いだ」

▽野崎、部長の正面に立つ

「なぜですか？　私は、あなたの忠実な部下ですよ」

「決まったことだ。二度と理由は聞くな」

野崎

渡辺

野崎

渡辺

野崎

渡辺

Copyright@2026 D³S

野崎　「いや、しかし、私が営業一課を離れるということは　会社にとって不利益になります」

渡辺　「ひつこいやつだな、このメールを見てみろ」

▽渡辺、パソコンのモニター画面を野崎の方へ向ける
　昨晩の野崎と小村がラブホテルの前でキスをしている写真、
　ラブホテルの中に肩を組んでに入ろうとしている画像が写ってる

野崎　「どうして？　こんな写真が・・・・」

渡辺　「そんな事はどうでもいい。これが、偽物かもしれないが、世間に出回ると我が社のイメージは大幅にダウンだ。直属のワシまで巻き添えを食う可能性もあるしかし、この写真を送ってきた人物が、君を営業から異動させれば、消去すると言っている。ウソかもしれないが、それで様子をみさせてくれ」

▽野崎、少し考える

渡辺　「おそらく、君　一人に恨みをもっている人物だと推測している。少しの間だ。我慢してくれるか」

Copyright@2006D3S

野崎　「わかりました。部長が　そこまでおっしゃるなら　長い間お世話になりました」

渡辺　「よろしく　たのむよ。きっと、また　営業の最前線に復帰させてやるからな」

▽野崎、部長室から出ていく

▽渡辺、パソコンを操作し、メールの画面を下方向にスクロール
　さらに、写真が出てくる
　渡辺と若い青年がベットで寝ている姿のが映る

（メールの文章）
”この写真をバラ撒かれたくなければ、営業課の課長を辞めさせろ　”

▽渡辺、椅子を回転させ、窓の方に向く

渡辺　「くっそ　一体、誰だ？」

〇（同）営業一課

▽亀山　林、座って仕事をしている

▽松本、走ってやってくる

Copyright@2026 D³S

松本　「大変大変、課長が変わっちゃうのよ」

林　「いつから？」

松本　「たった、今から」

林　「なんで？」

松本　「知らない」

Copyright@2026 D'S

「X接点」（第三話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「大谷の誕生日」

あらすじ

野崎が転属になり、平和がもどった営業第一課
五月は丁度大谷の誕生月。古屋と一緒にテーマパークへと出かけます
そんな幸せ絶頂期の大谷に、突然　別の問題が発生します

Copyright@2026 D³S

□第一幕　ある土曜日

〇（土曜の朝）古屋のマンション

▽古屋、ボクサーパンツだけの姿で腹にバスタオルを掛けてベット寝ている

〇スマートフォンの電話着信音が鳴り響く

▽古屋、目を開ける

▽古屋　上半身を起こし、電話出る

古屋　「はい」

大谷　「もしもし、古屋さんですか？　大谷です」

古屋　「大谷？　どうした？　こんなに朝早く。何かあった？」

大谷　「何もないんですけど、野崎課長が配属転換されたは
古屋さんのおかげなんですよね？」

古屋　「え？　なに言ってんだ、俺に　そんな人事権なんて無いつぅの」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そうですよね。でも、きっと古屋さんのおかげだと僕は思ってます」

古屋　「用事は、それだけ？」

大谷　「えっと、今日の休みは何か用事はありますか？」

古屋　「まだ昼間寝てるよ」

大谷　「朝ご飯は？」

古屋　「いや、だから　まだ寝てるって」

大谷　「じゃ、まだなんですか？」

古屋　「ああ」

大谷　「じゃ、今から朝ご飯作りに行きます」

古屋　「今からって。おい」

＃電話が切れる＃

Copyright@2026 D's

古屋

▽古屋、スマートフォンを持ったまま不思議そうな顔をする

「ン？　夢か？」

▽古屋、布団をかぶり、もう一度、寝ようとする

＃マンションの入口のチャイムが鳴る＃

（チャイム）

”ピ～ンポ～ン”

古屋

「誰だ？」

▽古屋、居留守をするこにする

（チャイム）

”ピ～ンポ～ン”

＃　再びチャイムが鳴る　＃

古屋

▽古屋、ハッとして、上半身を起こす

「まさか？」

Copyright@2026 D'S

▽古屋、ベッドから出て、インターフォンの画面を見る
　インターフォン越しに、大谷の顔が写る

大谷　「来ちゃいました」

古屋　「待ってろ、空けてやるから」

▽古屋、マンションのオートロックを解除

＃数分後＃

＃古屋の部屋のチャイムが鳴る＃

▽古屋、ドアを開ける
　大谷が立っている

大谷　「おはようございます」

古屋　「まぁいい、早く　はいれ」

大谷　「はい。おじゃまします」

Copyright@2026 D's

古屋　▽大谷、古屋の部屋に入り、リビングに座る

大谷　▽古屋、ベットに腰掛ける

古屋　「朝っぱらから、どうしたんだ？」

大谷　「だから、朝ご飯を作ってあげようと思って来たんですって」

古屋　「俺が留守だったら、どうするつもりだよ」

大谷　「帰ってくるまで、待ってるつもりです」

古屋　「おいおい。冗談じゃないぞ。マンションの前で、変な男が待ち伏せしてるなんて恥ずかしいじゃないか」

大谷　「古屋さんこそ、早く服を着てきてください。パンツ一枚ではこちらが恥ずかしいですよ」

古屋　▽古屋、自分の下半身を見る

「わかった。とりあえず、シャワー浴びてくるから」

Copyright@2026 D's

大谷　「はーい。じゃ、朝ご飯の準備しておきますから、ゆっくりシャワー浴びてきてください」

古屋　「いや、俺は　朝は食べないから　いいよ」

大谷　「ダメですよ。食べなきゃ。ほら、寝癖がひどいですよ。早く、シャワー行ってください」

▽大谷、古屋の背中を押し、バスルームの方へ向かわせる

▽古屋、バスルームの扉を開ける

▽大谷、台所に行く。棚を開け　調理器具を確認　フライパンを取り出し調理をはじめる

▽古屋、バスルームのドアから顔を出す

古屋　「おい、バスタオルと替えのパンツを忘れた。取ってくれ」

大谷　「どこですか」

Copyright@2026 D's

古屋　「一番下の引き出し入ってる。バスタオルは、上から二番目だ」

大谷　「あ、はい」

▽大谷、タンスからパンツとバスタオルを取り出し、バスルームに持っていく

▽大谷、バスルームのドアをノックし入る
　曇りガラス越しに、古屋がシャワーを浴びているのがわかる。

大谷　「持って来ました」

▽古屋、シャワーを止め、ドアを開ける
　全裸の古屋の姿が大谷の目に入る

古屋　「サンキュー　カゴに入れておいてくれ」

大谷　「え、え、はい」

▽古屋、ドアを閉め、シャワーの湯を出し浴び始める

▽大谷、カゴに　パンツとバスタオルを入れ出て行く

Copyright@2026 D³S

古屋
大谷

（数分後）

▽古屋、バスタオルで髪を乾かしながら出てくる

▽古屋、テーブルに並んだ料理を見る

「お、うまそうだな」

▽大谷、フライパンでウィンナーを炒めている

「もうすぐできますから、テレビでも見ていてください」

▽古屋、ソファーに座りテレビの電源を入れテレビを見る

＃　数分後　＃

○古屋の部屋

テーブルには、食べ終わった皿が載っていた。

▽古屋　大谷、テレビを見ている

古屋の格好は、まだシャワーを浴びて出てパンツを穿いたままの状態だ

Copyright©2026 D³S

大谷　「古屋さんて、いつ服着るんですか」

古屋　「え？　夏だし、自分の家だからいいんじゃないか？」

大谷　「僕が居ますよ」

古屋　「男が男に見られて気にするかよ。なんなら、パンツも脱いでもいいぜ」

大谷　「それは、止めてください」

古屋　「ははは、汚いもの見たくないよな」

大谷　「別に　汚いだなんて、思ってませんよ。さぁ食べましょう」

（一時間経過）

○（昼すぎ）古屋の家のリビング

▽古屋　大谷、ソファーでテレビを見ている

（一時間経過）

Copyright@2026 D³S

古屋　▽大谷、古屋にもたれて寝ていた

大谷　▽大谷、ハット目を覚ます

古屋　「どうした」

大谷　「すいません。テレビ見ながら寝てしまってました」

古屋　「いいよ。どうせ、早起きして　家に来たんだろ」

大谷　「はい」

古屋　「俺は、まだテレビ見てるから、もう少し寝ていろ」

▽古屋、大谷をゆっくりと倒し古屋の膝の上に大谷の頭を乗せた
大谷の後頭部に　古屋の陰茎の感触が、頬には太股の暖かさが伝わる

大谷　「恥ずかしいです」

古屋　「この方が、よく寝れる」

▽古屋、大谷の頭を撫でる

Copyright@2026 D³S

（数時間経過）

〇（夜）古屋の部屋のベッド

▽古屋、上半身裸で寝ている

▽大谷、上半身裸で寝ている

大谷「すいません。また泊めてもらってい」

古屋「どうせ、明日は日曜日　何もすることなかったし。明日の朝も、大谷が朝食作ってくれそうだしな」

大谷「はい、もちろん作りますよ」

古屋「そっか。それは　楽しみだ」

▽大谷、古屋の方に顔を向ける

大谷「古屋さん」

Copyright@2026 D³S

▽古屋、体を横にし、大谷の顔を見る

古屋　「どうした」

大谷　「古屋さんは、なんとも思わないんですか？」

古屋　「何が？」

大谷　「僕と、こうやって、裸でいっしょに寝たりして」

古屋　「そうだなぁ。世間から見れば、変なことかもしれないな。
でも、俺は、別に気にならない」

古屋　「大谷は、俺の事　どう思ってる。好きか，嫌いか」

大谷　「好きか、嫌いかで言われると、好きとしか言えないです」

古屋　「なら、俺も　大谷のことは好きだ。好意を持てくれてる人に好意で返す。
それが俺の考えなんだ。
でも、おまえの課長、あ、元課長だったけ？　あいつには、いくら好かれても
遠慮しちゃうけどな」

Copyright©2026 D³S

大谷　「古屋さんっておもしろい人ですね。会社では、すごくまじめで、かっこよくて、近づきがたいって評判なんですよ」

古屋　「それのどこが、評判なんだ」

大谷　「ははは、僕ら、新人の間での、評判なんですって」

大谷　「古屋さんは、女性との経験あるんですよね？」

古屋　「俺か？そりゃ無いと言えばウソだよな」

大谷　「ここだけの話にしておいてください。僕まだ　なんですよ。この歳で変でしょ」

古屋　「そうかな？　最近は多いみたいだし、別におかしくないと思うけどな
男だって、誰とでも寝る女は嫌なんだからさ、女だって、誰とでも寝る男嫌なんじゃないかな？」

大谷　「古屋さんが言っても、説得力無いです」

古屋　「そりゃ、もっともな意見だ」

大谷　「でも、やっぱり、この歳でまだだなんて、彼女に恥ずかしくて言えないですよ。

Copyright@2026 D's

古屋　結局、それがバレるのが怖くて、何もできなくて、いつまでたってもできない。
童貞の悪循環ってやつです」

大谷「童貞の悪循環か
誰だって、初めてがあるんだから、たまたまそれが、
その日だったってことで、いいんじゃないかな。
早いから、偉いってわけじゃないし」

古屋「そうですよね」

大谷「そろそろ寝ようぜ」

古屋「はい」

大谷「おやすみ」

古屋「あの」

大谷「どうした」

古屋「腕枕してくれませんか。どうしても、この前の古屋さんと寝た時のことが
忘れられないんです」

Copyright@2026 D³S

古屋

▽古屋、大谷の頭の下に腕を通す

▽大谷、古屋の胸に　顔をうずめ目をつぶる

▽古屋、片方の空いた手で、大谷の頭をなでる

「ここまでだ。これができれば、あとは自然にできるようになる」

Copyright@2026 D³S

古屋
大谷
古屋
大谷
古屋

□第二幕　（仮称）ユニバーサル・ランド

〇（土曜日の昼過ぎ）テーマパーク（（仮称）ユニバーサル・ランド）
　大谷の誕生日に、テーマパークを訪れた二人

▽大谷　古屋、テーマパークのゲートを潜る

「おいおい、誕生日に何か欲しいか？って聞いたら、遊園地に連れて行けだって」

「だって、古屋さん、何でもいいって言ってくれたじゃないですか」

「そりゃ、何でもいいぞって言ったけどさ」

「文句を言わないって。さぁて、何から乗りましょう」

「そうだな。ぜっかく来たから、乗りまくってやるか」

〇コースターの列
　かなりの待ち行列ができている

▽大谷　古屋、コースターの列に並ぶ
　大谷らの少し後ろには、女子大生　二人組が並んでいる

Copyright@2026

大谷
古屋
女子大生Ａ
女子大生Ｂ
女子大生Ａ
女子大生Ｂ
女子大生Ａ
女子大生Ｂ

「人多いですね」
「こりゃ、ずい分待つな」
▽女子大生、そひそと話をはじめる
「ねぇ、ねぇ、前の二人、怪しくない？」
「うんうん」
「でも、めっちゃいけてるよね」
「うんうん。もう一人も超カワイイし」
「他に連れがいるのかしら？」
「二人だけだったらどうする？」
▽大谷　古屋、会話を聞いている
▽古屋　大谷、互いに目を合わせて合図をおくる

Copyright@2026 D³S

女子大生Ａ
女子大生Ｂ
女子大生Ａ

▽大谷、古屋の腕に手を回し、胸に頭を付ける

「え、まじ」

「やば」

「もったいないよ」

▽古屋　大谷、薄笑い

（アトラクション楽しむ　二人）

〇テーマパーク内のアーケード

▽古屋　大谷、アーケードを歩いている

▽大谷、アイスクリームの看板を見つける

大谷

「あ、ソフトクリームがある　食べたい」

古屋

「はいはい、王子様　買ってくるから、そこのベンチに座ってお待ちください」

Copyright@2026 D's

古屋　▽古屋、ソフトクリームを買いに行く

▽古屋、しばらくして、アイスクリームを1つだけ買って、
大谷の座っている場所に戻ってくる

大谷　〇ベンチ座っている大谷

「買ってきたぞ」

▽古屋、ソフトクリームを大谷に渡す

「ありがとうございます」

▽大谷、ソフトクリームを受け取るが、古屋の分が無いことに気づく

大谷　「古屋さんは、食べないの」

古屋　「あ？　俺か？　いいよ」

大谷　「だめですよ。じゃ、これを一緒に食べましょう」

Copyright@2026 D's

古屋　「いいよ、いいよ」

大谷　「今日は僕の誕生日、何でも言うこと聞いてくれるんでしょ？
それとも、僕の食べかけはイヤですか？」

古屋　「そうじゃないけど、わかったよ」

▽大谷、古屋の口にソフトクリームを持っていく

▽古屋、大口でかなりの量を食べる

大谷　「ひどーい。僕の分が減ったじゃ無いですか」

古屋　「だから言ったじゃないか」

大谷　「そんなんだから、女の人にモテないんですよ」

古屋　「それ、一体どういう関係？」

＃二人が食べている前を、泣きながら歩いている男の子が前を通り過ぎる＃

大谷　「あれ？あの子」

Copyright@2026 D's

古屋　「どうした？」

大谷　「小さな子供が泣いてますよ】

古屋　「ほんとうだ。近くに親らしき人も見当たらないな」

大谷　「迷子かな」

古屋　「そうだな」

大谷　「ちょっと　持っててください」

▽大谷、ソフトクリームを古屋に渡す

▽大谷、泣いている男の子に近づく

大谷　「僕、どうしたの？　迷子？」

▽男の子、泣いたまま、うなずく

大谷　「そっか、離れ離れになったんだね。

Copyright@2026 D³S

大谷　じゃ、お兄ちゃんも　一緒に　探してあげるよ」

▽男の子、うなづく

大谷　「よし。じゃ、誰と来たの？」

男の子　「泣いていたら、探せないよ。名前は？」

大谷　「しょうへい」

男の子　「しょうへい君か。よし。誰と来たの？」

大谷　「ママとパパ」

「よし、じゃ、今から、ママとパパを探しす冒険に出発だ」

▽大谷、男の子の手を握る

▽大谷、古屋の方に行く

大谷　「古屋さん、この子、迷子になってパパとママとはぐれちゃったみたいです。ちょっと僕、一緒に探しに行ってくるから、ここで待っててもらえますか」

Copyright©2026 D³S

古屋　「おいおい、俺をそんな薄情な奴と思うなよ。俺も一緒に探すよ」

大谷　「ありがとうございます」

▽大谷。男の子の前にかがむ

大谷　「この、おじちゃんも一緒に探してくれるから、もう安心だよ」

▽男の子、うなずく

古屋　「この子は安心かもしれないけど、、俺をおじさん呼ばわりした君は、危険だということを忘れるなよ」

大谷　「はいはい、あとでちゃんと聞いてあげまちゅよ、おじいちゃん」

古屋　「さらに年齢が上がっとるやないか」

大谷　「うるさい、おじいちゃんは放っておいて、パパ、ママ探しの冒険に出発だ」

古屋　「むやみに歩いてもしょうがないから、まずは迷子センターに行きながら探そうぜ」

Copyright@2026 D's

大谷　「さすが、年の功ってやつですね。きっと、両親も探しに来てます。行きましょう」

古屋　「おっと、そうだ」

▽古屋、男の子を担ぎ上げ肩車にした。

古屋　「よし、しょうへい、そこからならよく見えるだろう、パパとママを見つけたら教えるんだぞ」

○遊園地の迷子センター

夫婦が、遊園地の係員を話をしている

▽男の子の父と母、男の子を見て、泣きながら近づき男の子を抱きしめる

▽大谷　古屋、迷子センターから出る

大谷　「パパ、ママが見つかってよかった」

古屋　「そうだな。母親、あんなに喜んで。必死で探してたんだろうな」

Copyright@2026 D'S

古屋

大谷

古屋

▽大谷、少し悲しい顔をする
※父親に捨てられた時を思い出す

「おまえって、世話好きなんだな」

「そうですか？　当たり前のことじゃないですか？
そういう古屋さんだって、肩車してあげてたじゃないですか？」

「子供の足だと時間がかかるからだよ」

Copyright@2026 D's

□第〇幕　大谷の部屋

〇遊園地の帰り　古屋の運転する車の中
助手席には大谷

大谷「今日はありがとうございました」

古屋「俺も、色々楽しかったよ」

大谷「なんか、遊園地なんて何年振りなんだろう」

古屋「そんなに好きなら、また連れて行ってやるぞ」

大谷「本当ですか」

古屋「ああ、本当。でも次は、おじいちゃんでなくて、お兄さんくらいにしといてくれよ」

大谷「はい、わかりました」

〇大谷のアパートの前
2階建ての、築年数がかなりたった古いアパート

Copyright@2026 D³S

古屋　「ここかい？」

大谷　「はい」

古屋　「なかなかくクラシックな外観だな」

大谷　「正直に、ボロいって言っていいですよ」

古屋　「そんなこと言ってないぞ」

大谷　「見た目は、こんなのだけど、中はちゃんと掃除してますから。部屋見ますか？」

古屋　「いいよ」

大谷　「せっかくなんで、コーヒーでも飲んで帰ってください」

古屋　「じゃ、せっかくなので」

▽大谷、家の鍵を開け、ドアを開く

Copyright@2026 D³S

大谷　「どうぞ」

〇大谷の部屋
部屋は、洋室とその奥に広めの和室、そして小さなキッチンがあり俗に言う１Ｋである。

▽大谷、キッチンでコーヒーを入れる準備をしている

▽古屋、立ったまま部屋を見回す

▽古屋、小さな収納ボックスの上に、若い女性の写真と、男の人の写真が飾ってあるのを見つける

古屋　「この写真の綺麗な女の人は？」

大谷　「あ、それは僕の母です」

古屋　「お母さん、ずいぶん若くて綺麗だな」

▽大谷、カップを乗せたお盆を運んできた。

大谷　「ずいぶん　昔の写真ですから

Copyright©2026 D³S

古屋

僕を産んですぐに死んでしまったので、僕は覚えてませんけど
母は生まれつき体が弱かったらしくて、
医者から子供を産んではいけないって言われていたんです。
でも、どうしても子供が欲しくて、
結局、無理して僕を産んであげく直後に亡くなりました。
お医者さんが、産まれたての僕を、
すぐに母に抱っこさせてあげたそうです。

母は、たった数分間、
僕を抱っこしたまま天国に行きました。
僕を産んでいなければ、母は生きていられたのに」

▽大谷、顔に涙が溢れる

「死ぬと判っていても、
数分間、自分の子供を抱くことが出来て、
姿を見ることができたんだ。
それが、お母さんの選んだ幸せなんだ。
確かに、おまえを産まなければ、
長生きできたかもしれない。
でも、おまえと出会えない人生よりも、
例え数分間にせよ、出会えたことが幸せだったに違いない。

Copyright©2026 D's

大谷　それに、たった数分じゃない。
おまえの命がお腹に宿ったときから、お母さんは、幸せいっぱいに生きたはずだ。
きっと一生分の幸せを感じていたはずだ。
人が本当にこの世から居なくなるのは、その人を思ってくれる人がいなくなるときだ。
こうして、おまえが時々お母さんの事を思い出してあげれば、お母さんは、ずっとお前の心の中で生きていくことができるんだ」

古屋　「そうですよね。僕には母の血が流れているし、僕の子供に話して、いつまでも母のことを忘れないようにしてあげないとね」

大谷　「そうだな」

「あ、コーヒー冷めちゃってますね」

Copyright©2026 D³S

□第三幕　会社で一番怖いのは○Ｌ

○（日曜日　夕方）　繁華街。

▽大谷　古屋、街を歩いている

大谷「ね、ね、今日は何にする？」

古屋「そうだな、最近、昼は肉ばっかだよなぁ」

大谷「じゃぁさ、イタメシにしない？」

古屋「イタメシ？」

大谷「そそ、僕、美味しい店見つけてきたんだ」

古屋「美味しいって行ったのか？」

大谷「う、う～ん。店の見た目だけど」

古屋「なぁんだ」

Copyright@2026 D³S

○古屋、大谷の反対側の歩道

▽松本、買い物帰りで　古屋と大谷が歩いている反対側の歩道あるいている

▽松本、古屋と大谷の姿を見つける

松本　「あれ？　あそこ歩いてるの古屋さんと大谷君じゃないかしら？」

▽大谷、古屋の左腕を掴み、前後に大きく振って歩いている

松本　「おいおい、ちょっと、いくら二人は仲良しだからって、あんなことするか？」

▽女子Ａ　松本の後ろを歩いているの二人組の女子の声が聞こえた。

女子Ａ　「ねぇあそこの二人見てみ」

女子Ｂ　「お、イケてる二人

女子Ａ　「めっちゃ怪しいよ」

女子Ｂ　「ほんと～。でもさ、二人ともイケテルから 有りかも」

Copyright©2026 D³S

女子Ａ　「うんうん。萌えだわ」

松本　「ちょっとマジ？」

▽松本、気になり、歩く向きを変え、反対側の歩道から、二人を尾行する

▽松本、尾行しながら、亀山に電話

松本　「もし、アネゴ。松本です。今、街に買い物に出てきているんですが、古屋さんを見つけました」

（亀山）　（そこに古屋さんがいるの？）

松本　「ええ」

（亀山）　（誰かと一緒なの）

松本　「誰だと思います」

（亀山）　（誰なの。私が知ってる人）

松本　「ええ、よく知ってる人ですよ」

Copyright@2026 D³S

（亀山）　（誰なの。早く教えてよ）

松本　「それが、大谷君なんです」

（亀山）　（へ、大谷君？　なら、安心ね。）

松本　「でも、安心では無いですよ」

（亀山）　（なんで。古屋さんと大谷君なら、二人でいてもおかしくないわ）

松本　「腕を組んでででもですか」

（亀山）　（腕を組んで？）

松本　「ほんと、恋人みたいな感じですよ」

（亀山）　（見間違いじゃないの）

松本　「今、写真を送ります」

▽松本、スマートフォンの画面を　古屋、大谷が歩いている方に向ける

Copyright@2026 D³S

亀山のスマートフォンに、二人が歩いている姿が映る
大谷が、古屋の腕を掴み笑顔で、古屋の顔を見ながら話している

亀山　（古屋さんは、どんな感じ？）

松本　「気にはなってないようです」

亀山　（そう）

「もう少し、様子を見てみますね。また、後で連絡します

▽松本、電話を切った

○（同）イタリアンレストラン

▽大谷　古屋、店に入っていく

▽松本、店に入り、二人から少し離れた場所に座る

○（同）古屋　大谷の席

Copyright@2026 D's

＃古屋、大谷の席に料理が運ばれてくる＃

古屋　「お！　きたきた」

古屋　「さぁ食べるぞ」

▽古屋、フォークを取り、スパゲティをくるくる巻きだす

大谷　「あ、駄目ですよ。そんな巻き方は」
　こうやって、スプーンを下に敷いて、巻いてください」

▽大谷、自分の皿のスパゲティをフォークに巻いてみせた

大谷　「ほら、こんなにコンパクトになるでしょ。はい、あーんして」

▽大谷、自分で巻いたスパゲティのフォークを古屋の口元に持っていく

▽古屋、そのまま口の中にいれ食べる

大谷　「どうですか。おいしいでしょう」

古屋　「そうか？　巻き方で味が変わるとは思えんな」

Copyr ight@2026 D3S

大谷

古屋

松本

▽ウェイター　食後のコーヒーをテーブルに置いた

▽大谷　古屋のコーヒーカップを自分の方にひきよせる
ミルクと砂糖を入れ、味見をする

「はい、古屋さん好みの味になりましたよ」

▽大谷　古屋にコーヒーカップを差し出す

「サンキュー」

〇（その後）繁華街

▽大谷　古屋の腕を掴み　歩いて去って行く

〇（その日の夜）松本の部屋

▽松本　スマーフォンで会話している

「と、以上が、今日の報告です」

Copyright@2026 D's

亀山　「ありがとう。明日、もう一度　詳しく聞くわ」

○（次の日の朝）Ｐ＆Ｈ商事株式会社の給湯室

▽亀山、林　が、お茶の準備をしている

▽松本　慌ててやってくる

松本　「ごめん、ごめん、遅くなっちゃた」

林　「遅い松本。待ちくたびれたよ」

亀山　「で、どういうことなの？」

松本　「大谷は古屋さんにべったりでさぁ、まるで恋人同士って感じで・・・」

林　「いやだぁ、男同士よ」

松本　「それがさぁ、二人ともイイ男じゃない。テレビドラマを見ているみたいで、こっちまで、次はどんなことするのか？　興味出てきちゃって」

松本　「大谷が古屋さんに、ご飯を食べさせてる所なんかぁ、興奮しちゃって・・・」

Copyright@2026 D's

亀山　「何バカな事言ってるの！　そんな事あるわけないわ。誰かと見間違えたのよ」

松本　「そうかなぁ、古屋さんも、嫌がっているようには見えなかったけど」

亀山　「いいわ、確認してみましょう」

〇（昼）事務所　大谷の席

▽大谷　昼食から戻ってくる

▽大谷　机の上に置いていた、スマートフォンが無くなっていることに気づく

大谷　「無いなぁ、どこに置いたんだろう？」

▽大谷　スマートフォンを探している

大谷　「どうしよう」

大谷　「そうだ、電話を掛けてみればいいんだ」

▽大谷　会社の電話から自分のスマートフォンへかけてみる

Copyright@2026 D's

松本
大谷
亀山
林

”トゥルルルル・トゥルルルル”

受話器から呼出し音が聞こえる。

”ぶるんぶるんぶるん・ぶるんぶるんぶるん”

バイブレーションの音が聞こえてきた。

その音は、なぜか大谷に近付いているように思えた。

「君が探しているのは、コレかな？」

▽松本　大谷のスマートフォンを見せる

「あ、それです。どこにありましたか？」

「悪いとは思ったけど、スマートフォンの中を見せてもらったわ。

そのことで　ちょっと聞きたいことがあるの？今晩、いいかしら？」

「断る理由はないわよね」

▽大谷　うなずく

Copyright@2026 D³S

〇（夕方）会社近くの喫茶店

▽亀山　林　松本　が座っている
　対面に大谷が一人座っている

▽亀山　大谷のスマートフォンを操作する

”今日も楽しかったです。古屋さんって、意外とシャイだったんですね。
カワイイかったですよ。”

”今日の朝ご飯はおいしかったですか？
古屋さんの好きなものはなんですか。”

”古屋さんの腕枕で寝るの最高です。今朝も、胸で寝てると安心します」

亀山　「何これ？」

亀山　「あなた、古屋さんと何してるの？」

大谷　「いえ、別に」

Copyright@2026 D³S

亀山　「そんなわけないでしょ。こんなツナーグを送るなんて」

松本　「ねぇねぇ、二人は付き合ってるの？」

大谷　「そんな関係じゃありません」

松本　「じゃ、一体どんな関係なの？」

大谷　「最初は、仕事教えてもらいに行ったりしてて、遅くなったりしたら、泊めてもらったり」

亀山　「そう、仕事を教えてもらってだけのね」

大谷　「そうです」

亀山　「幸い　古屋さんは、まったく相手にしてないうだけど」

林　「あなた、古屋さんの事、どう思ってるの？」

松本　「変態なの？」

Copyright@2026 D's

亀山　「どうなの？」

大谷　「僕は、古屋さんのこと　好きです。
とても、とても、好きです」

大谷　「最初は、課長から守ってくれたりして、すごくいい人だな、と思ってたんです。
何回か、食事をして、話をして、家に泊まらせてくれたりと、
僕は、古屋さんと　ずっとずっと、一緒に居たいんです」

亀山　「一緒にいたいだけなの。体の関係は　ないのね」

大谷　「はい。でも、古屋さんが許してくれるなら、僕は、そうなってもいいです
むしろ、そうなりたいです」

松本　「こいつ、とんでもない変態だ」

林　「大谷君、あなた自分のしていること判ってる？
あなたが好きって言ってるのは、
男の子が、サッカー選手を好きって言ってるのとは、違うのよ。
普通じゃありえないことなのよ。
古屋さんは、いい人だから、課長に、いじめられてたの見て、
可哀相になって、親切にしてくれたんだと思うわ。

Copyright@2026 D³S

大谷　きっと、古屋さん、すごく迷惑と思っているわ。
それに、あなたが、本当に好きなら、迷惑かけては駄目じゃないの？」

亀山　「わかっています。古屋さんは、僕が、可哀相な奴で、しつこく付きまとうから、しょうがなく　僕に合わせてくれてるんだと思います。
でも、僕は、それでもいい。ずっとずっと　一緒にいたい」

松本　「もういいわ。何を話しても無駄ね」

亀山　「え、アネゴ」

亀山　「引き上げましょう」

▽亀山　席を立つ

亀山　「いい、古屋さんに変な事したら、許さないからね」

▽亀山　席を離れる

松本　「あ、姉御　待って」

▽松本　立ち上がりテーブルに置いてあった伝票をピラつかせる

Copyright@2026 D's

松本　「ごちそうさま」

林　▽林　席を立つ

「悪いことは言わないわ。そんな思いは　早く捨てなさい」

○繁華街の道

▽亀山　松本　林が急足

▽松本　亀山に追いつき、顔をみる

松本　「アネゴぉ、いいですか？　放っておいて」

亀山　「あそこで騒いでも解決する問題でもないわ。
あの子には、会社を辞めてもらいましょ」

林　「おしいなぁ。大谷君、結構カワイイから、弟にしたかったのに」

Copyright@2020 D³S

松本　「林さん、あいつに興味あったんですか？」

林　「そうよ、悪かった？」

亀山　「もう、林ったら」

▽亀山　少し笑みが出る

Copyright@2026 D³S

「X接点」（第四話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「亀山と古屋」

あらすじ

会社のお局を敵に回してしまった大谷野上よりも陰湿なイジメが続きます

Copyright@2026 D³S

□第一幕　嫌がらせ

○（翌日の昼過ぎ）Ｐ＆Ｈ商事株式会社の事務所　大谷の席

▽大谷　外で昼食を済ませ自分の席に戻ってくる
　着席し机の引き出しを開ける
　引き出しに　雑誌が入ってる

大谷　「あれ？　なんで、こんなものが入ってるんだろう？」

大谷　不思議に思いながら雑誌を取り出す。

大谷　雑誌のページを開く

中を見て唖然

それは、男性向けの男性のポルノ雑誌だった。

▽大谷　慌てて、引き出しに戻そうとする

▽松本　大谷の後ろから手を出し，雑誌を取り上げる

Copyright@2026 D³S

松本　「やだぁ～大谷君、こんなの読んでるの？」

大谷　「違います。僕のじゃないです」

松本　「今、仕舞おうとしてたじゃない」

大谷　「違います。びっくりして」

松本　「大谷君って、こんな趣味があったんだぁ」

大谷　「違います、違います。僕のじゃありません」

▽松本　大谷の隣の中島に声をかける

松本　「ねぇ、中島君、大谷君って、男に興味あるみたいよ」

中島　「え？　大谷って、こっちの方だったのか？」

大谷　「違いますって、勝手に入ってたんですって」

中島　「いいよいいよ。最近の子にはついていけないからなぁ。

Copyright@2026 D's

大谷　お前だったら、別に驚かないよ」

「だから、違うんですって」

▽亀山　いつの間にか、大谷の席のそばにいる

亀山　「いいのよ。最近の子って私たちの理解を超えてるから。
それに、大谷君の様な中性的な感じの子って、こういった男性に憧れるのよね」

松本　「中島君、気をつけなくちゃぁね」

中島　「あ～、おれはガリガリだから、こいつの眼中にはないよ。
でもしかし、男にモテルのも悪くないかな？
大谷、始めのときは、優しく頼むぞ」

亀山　「もう、中島君たら」

▽川端　大谷の席をちらっとみる
※野崎の交代で来た、新任の課長野崎

川端　「おいおい、昼休みは終わったぞ。おしゃべりは止めて仕事、仕事」

Copyright@2006 D³S

▽亀山　松本　自分の席に戻っていく

川端「大谷君、人の趣味にまで意見する気はないが、そういう雑誌は、会社に持ち込まないほうがいいな」

大谷「いや、だから違うんです・・勝手に・・わかりました」

大谷は、いくら言っても信じてもらえそうもないので、あきらめて座った。

〇（翌日）会社　大谷の席

▽影山　大谷の席にくる
※大谷と入社同期　総務課に配属

影山「大谷君、封筒が届いたの」

大谷「ありがとう、影山さん」

影山「これも私の仕事だから」

「でもね、大谷君、同期のよしみで言うけど、どんな事情があるか知らないけど、こんなもの会社宛に発送しないほうがいいわよ」

Copyright@2026 D'S

大谷　「なんで？」

影山　「一応、会社の決まりなんで、中身をチェックしたけど、個人的な物はちょっとね」

大谷　「個人的な物？」

影山　「そうよ。とりあえず、渡したからね」

大谷　「うん。ありがとう」

▽影山　自分の部署に戻っていく

大谷　「誰からだろう？」

▽大谷　封筒の差出人を確認

「三平堂薬品・・・なんだ？　どこだ？　個人的な物って言ってたけど」

▽大谷　封を開けてみる

封筒の奥の方に、小さなチューブのようなものが入っている

大谷は封筒を逆さにし、チューブを取り出した。

チューブにはラベルが貼ってあり、

Copyright@2026 D³S

”塗る肛門様”と貼ってある。

▽大谷　同封の用紙を開く

”痔主用塗り薬”

”大谷様、この度は試供品のご請求ありがとうございます。・・・”

大谷　「痔の塗り薬だって・・・なんで??」

▽松本　大谷の後ろに立っている

松本　「あれ、大谷君、痔なの?」

大谷　「いえ、違います。間違いです」

松本　「まった、またぁ、変なことしてるから、痔になるのよ」

大谷　「違いますよ。こんなの頼んでませんって」

松本　「お尻に、何か変な物入れたんじゃないの?」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そんなこと、しませんって」

松本　「じゃ、どんなことなら、してるの？」

大谷　「いや、だから」

▽林　少し離れた次席から声をかける

林　「もう、松本さん、大谷君をいじめちゃダメよ。
人に知られたくないことなんだから、そっとしておいてあげましょうよ」

松本　「そうね。大谷君が、お尻に、何か入れて痔になった。なんて、
言っちゃだめですよね」

（さらに　数日経過）

会社中の女子社員に、大谷の噂が広まるには、大して時間がかからなかった。
そして、女子社員から男性社員へも伝わっていった。
噂が広まると、噂が噂で無くなる。

Copyright©2026 D³S

大谷　▽大谷　パソコンに、社内メールが届いたので開く

　”大谷君ひさしぶり、東京の榎木です。元気ですか？”

榎木　「榎木君か、入社式で会っただけだな」

　”噂は聞いたよ。実は、僕もなんだ。うれしいな。”

　”もし、まだ付き合ってる人がいないなら、僕と付き合わない？”

大谷　「なんだこれ？」誤解を解かなきゃ」

　▽大谷　メールの返信をしようと入力している

　▽亀山　大谷の後ろからみている

亀山　「大谷君、私用のメール禁止よ。

　あら、東京の男の子とお盛んなのね。邪魔してごめんなさい」

大谷　「僕は、違いますって」

亀山　「じゃ、榎木君は、本物ってこと」

Copyright@2026 D³S

大谷　「知らないですよ。今、はじめて知ったのだ」

亀山　「いいのよ　隠さなくても」

（数時間後）

▽大谷　社内の休憩コーナーでコーヒーを飲んでいる

▽片岡　大谷に声をかける
※同期入社で開発部所属

▽片岡　自販機で飲み物を買い、蓋を開ける

片岡　「よ！　大谷、久しぶり。元気にやってる？」

大谷　「元気に残業してるよ。そっちはどうだい？」

片岡　「俺も、元気に残業だ。来月には車を買い換えれそうだ」

片岡　「ところで社内はお前の噂でもちきりだぞ」

Copyright@2026 D's

大谷　「そっか」

片岡　「噂は本当なのか？」

片岡　「新人研修の時から、彼女いない、いないって言ってたけど、まさか、そっち方面だったとはな」

大谷　「いや、。そんなわけないよ」

片岡　「そうか」

片岡　「噂の出所は、お前のところのお局だろうけど、うちの部署のお局が、あの人に逆らうと、この会社でやっていけないって言ってるもんなまぁ女ってのは、結婚したら、会社辞めてどこかに行ってしまうんだ。それまでの我慢さ」

大谷　「そうだね。がんばってみるよ」

片岡　「そしたら、仕事に戻るよ」

大谷　「うん。また」

Copyright@2026 D³S

（大谷）

メールＡ

メールＢ

メールＣ

メールＤ

〇（ある日の朝）会社　大谷の席

▽大谷　メールソフトを立ち上げる
　次々にメールが受信されていく

（すごいメールの量だ）

▽大谷　メールを一件開いてみる

「僕でよければ、サポートします」

「かわいいね。付き合って」

「マジで、やりたい」

「いくら？」

▽大谷　添付ファイルがあったので開いて見る
　中年男性の裸画像が表示される

▽大谷　慌てて、画像を閉じる

Copyright@2026 D³S

（大谷）

杉本　（なに、どうなってるの）

古屋　〇事務所　古屋の席

杉本　▽古屋　自席で仕事をしている

▽杉本　古屋の席にくる

※システム課　課長　古屋の上司

「古屋　ちょっと」

「どうしました」

「急に会社のネットワークが重くなってるんだよ」

▽古屋　自分のパソコンで操作してみる

古屋　「確かに　重くなってますね。調べてみます」

杉本　「そうしてくれ」

▽古屋　サーバールームへ移動し

Copyright@2026 D³S

古屋

古屋

古屋ｓ

古屋

古屋

○サーバールーム

▽古屋　パソコンを操作している

「不特定多数から、画像付きメールが大量に届いているようだぞ」

▽古屋　パソコンの画面を見ている

「誰宛だ」

「これだな。
これは・・・
大谷か・・・・」

「あいつ、なにやったんだ」

▽古屋　大谷宛のメールを開く
　男性同士が性行為を行っている動画が添付されていた。

「なんだ　これは」

Copyright@2026 D³S

古屋　▽古屋　他のメールも開いてみる

「これもか。どうしてだ？」

古屋　▽古屋　パソコンを操作する

「おいおい、マジかよ」

古屋　▽古屋　さらにパソコンを操作

パソコン画面に〝Ａｌｌ Ｄｅｌｅｔｅ〟の文字が表示された

「これでよし。ちょっくら事情聴衆でもしてくるか」

〇（数分後）事務所　杉本の席

▽古屋　事務所に戻り、杉本の席に行く

杉本　「お、古屋。さすがだな。いつも間にか解決してるじゃないか。

原因は　なんだった」

古屋　「どうやら、パソコンのＯＳのアップデートがあったようです」

Copyright@2026 D³S

杉本　「また、いつものやつか」

古屋　「そうですね。迷惑極まりないです」

杉本　「ありがとうな」

古屋　「いえ、どうって事ないです」

▽古屋　杉本の場所から離れる

古屋　「さて、俺は事情聴取でもするか」

○（数日経過後の昼休み）　会社近くの道

▽古屋　同僚と昼食を済ませ、事務所に戻るところ
　公園の木下にしゃがんでいる大谷を見つける

▽古屋　近づき大谷に声をかける

古屋　「大谷、こんなところで、何してるんだ？」

大谷　「あ、古屋さん。この子を巣に戻してあげたいんですけど、

Copyright@2026 D³S

古屋　　どうしたらいいのか」

▽大谷　手のひらの中で鳴いている小鳥を見せる

古屋　「鳥の雛じゃないか。どうしたんだ」

▽大谷　　顔を木の上に向け巣のあるほうを見る

古屋　「巣から落ちたのか？」

大谷　「あそこの巣から落ちたんだと思います」

古屋　「かわいそうだな。親鳥は気がついているんだろうか」

大谷　「このまま置いておくと猫に捕まっちゃうんじゃないかと」

古屋　「そうだな。ここは自転車も通るし、よし、俺が戻してきてやるよ」

▽古屋　大谷から小鳥を預かり、木に登り雛を巣に戻す

、

▽古屋　木から下りてくる

Copyright©2026 D³S

大谷　「古屋さん、ありがとう」

古屋　「おまえが、礼を言うことはないよ。昼食ってないんだろ。早く行ってこいよ」

大谷　「はい。　バイバイ、小鳥さん。もう落ちるんじゃないよ」

▽大谷　小鳥に手を振り、急いで食事を取りに向かう

▽古屋　待たせてた同僚のところに戻る

古屋　「わりぃわりぃ。待たせたな」

同僚　「あいつだろ、お前に言い寄ってるって奴」

古屋　「噂になってるやつか」

同僚　「あぁ、古屋はいいよなぁ。異性だけでなく、同性からモテルんだもんなうらやましいよ」

古屋　「そうだろ。じゃ、紹介してやろうか」

Copyright@2026 D³S

同僚　「無理だ、俺は、ビックサイズが好みなんだから」

古屋　「からかうなって」

同僚　「古屋は入社当時から、俺は常に、弱い者の見方でいたい。って言ってたからな」

古屋　「俺、そんなこと言ってたかな」

同僚　「ああ、入社の面接の時に言ってた言ってた」

同僚　「でさ、本当は、どうなんだい。やったのか。俺には教えてくれよ」

古屋　「するわけないだろ」

同僚　「ちっ　面白くないな」

古屋　「面白くするなよな」

同僚　「冗談、冗談。結局、古屋を狙ってる女の　ひがみからのでまかせだろうな」

古屋　「俺も　そんなとこだろうと思ってるよ」

Copyright@2026 D³S

Copyright@2026 D³S

□第二幕　マグカップの想い出

○（翌日の朝）事務所　大谷の席

席に着くと、女子社員がお茶を配っている姿が目に入った。
亀山？　松本？　どっちが持ってくるんだろうか？
いや、お茶はいらない。挨拶をしたくない。そんな気持ちだった。

亀山「はい、お茶」

▽亀山、大谷の席に、大谷のマグカップを置く

大谷「ありがとうございます」

亀山「いいえ、どういたしまして」

▽大谷、置かれたマグカップを見る、
びっしりと、油性マジックで落書きがしてあったのだ。

〝ヘンタイ〟

〝ホモ〟

Copyright©2026 D³S

亀山

”キモイ”

”ヤメロ”

「おはよ。変態さん」

▽亀山、その場を離れる

▽大谷、落書きされたマグカップを見つめている
目が熱くなり、涙がこぼれそうになる

▽大谷、席を立ち、個室トイレに向かった
その際、椅子と机がぶつかり、大きな音がした

▽古屋、音がした方を見る
大谷が急いで、事務所から出て行くところ目撃

（古屋）

（大谷　どうしたんだろう）

▽古屋、大谷の席のところへ行く
落書きされたマグカップがおいてある

Copyright@2026 D³S

山下

亀山

松本

林

▽古屋、マグカップを手にとり、落書きを見つめる

「彼女らも、酷いことしますよね」

▽古屋、マグカップを掴み取り給湯室へ向かう

○男子トイレの個室の中

▽大谷、便器に座っている

▽大谷、上を向くと、目から涙が零れる

○（同）給湯室

▽亀山　松本　林、話をしている

「もう、お茶を置いた時の顔ったら、最高だったわ」

「あいつ、泣きそうな顔して出て行きましたよ」

「これで、辞めちゃうかもしれませんね」

Copyright@2026 D³S

亀山　「辞めてもらうのよ」

▽古屋、給湯室に入る

▽亀山、古屋に気付く

亀山　「あ、古屋さん、コーヒーですか？　すぐ入れますね」

古屋　「いや、それより話がある。これのことで」

▽古屋、手に持っていた大谷のマグカップを亀山に差し出す

古屋　「どうして、こんなことをした」

亀山　「どうしてって、あいつは・・・
あいつは、ヘンタイなんです。
男なのに、古屋さんの事を好きっていうから・・・・
それで、ちょっと懲らしめてやろうと思って」

古屋　「それだけか」

亀山　「えっと、その・・・」

Copyright©2026 D³S

古屋　「男だと、男を好きになっちゃいけないのか？　誰が決めた？」

松本　「男が、男を好きだなんて、変です。絶対変です」

古屋　「そうか。でも、俺も大谷の事が好きだ。だとしたら、俺もヘンタイだな。明日から、俺のコップにも、書いてくれるかい」

亀山　「そんなことはできません」

古屋　「なぜ」

松本　「古屋さんも変です。
だって、アネゴ・・・
亀山さんは、古屋さんのこと、ずっと思ってたんです。
それなのに、あんなやつとデートなんかして、」

亀山　「もういいわ。松本さん、ありがとう。あとは、私が」
私だって、古屋さんのこと、好きなんです。
大谷君が、会社に来る、もっともっと前から古屋さんのこと好きなんです。
でも、古屋さんは、会社では仕事ばかりで、
全然、私を気にもしてくれない。

Copyright@2020 D's

だから、今は、恋愛よりも、仕事が大事な人なんだな。
と思ってあきらめてたけど、

でも、大谷君がやって来て、古屋さんは大谷君とは仲良くしてて、
相手は男だから、絶対大丈夫！　って思ってた。
そしたら大谷君が、古屋さんのことを、
私だって、古屋さんの事、好きなんです
好きで、好きでたまらないんです」

「ごめん、俺が大切にしているを、傷つける奴を好きにはなれない
君は、大谷のことを勘違いしている。
俺と、大谷が、どんな関係なのかも知らないで。
あいつは、俺のことを好きと言ったかもしれないが、
それだけじゃない。あいつは、全ての人が好きなんだ。
大谷は、過去に病気で母親を亡くした。
大谷の成長を見ることもなく、この世を去った。
きっと、大谷の成長を見たかったに違いない。生きたかったと思う。
大谷だって、母親に甘えたかっただろう。
そんな辛い経験をしているからこそ、人を嫌いになることができないんだ。
しかし、会社に入って、裏切りや嘘を知り、心が揺らいできた。
亀山さん、君ならわかると思ってたけど。
社会人になり、裏切られ、見切られた時の気持ち」。

Copyright©2026 D³S

亀山

古屋

林

「だからって、男の人が男の人を
好きになるなんて　変よ！！！」

「男同士だから、女同士だから駄目っていうのは、
好きと言う言葉の意味を狭めていないか？
好きって、どういう意味だい。男女の関係になることか？
ＳＥＸをすることか？
父親が息子を見守るのは？
弟を助けるのは？
好きって言葉は、たくさんの意味がある。
大谷が、俺の事を好きって言うなら、それでいいじゃないか？
少しは大谷の事を、わかってあげてほしいな」
それから、心配しているような体の関係は一切ないから。
俺だって、大切な大谷に傷をつけるような事はしたくないからな」

▽古屋、給湯室から出ていく

▽亀山　林　松本、給湯室にいる

「私たち、ちょっとやり過ぎたかもね。
私だって、亀山さんのこと好きだもの。

Copyright©2026 D³S

松本　新人の頃の私の失敗を、新人の失敗は私のせいだからって、野崎から　いつもかばってくれて。

亀山　私も、いつかは、亀山さんみたいに、新人をかばえるような〇Ｌになるんだ。っていつも思った。
セクハラ紛いのことをされてた時、トイレで泣いていた時に、亀山さんに抱きついて、本当にほっとしたわ」

「私だって、アネゴの事大好きよ」

「そうよね。私だって、林や、松本のこと大好きだもん。
私がムキなったときに、冷静に止めてくれる林。
出来の悪い妹だけど、それが可愛い松本。私達も変態なのよね」

松本「そうそう、変態、変態」

亀山「大好きな古屋さんのファンが一人増えただけですもの　喜んであげなくちゃな」

林「まぁ、亀山さんより、大谷君の方が女らしいってのは、間違いないけどぉ～」

亀山「こらぁ、はやし～」

▽亀山　林　松本、笑い出す

Copyright©2026 D³S

□第三幕　古屋と亀山の出会い

○（十五時のお茶の時間が終わった）給湯室
　亀山　林　松本が、湯飲みを洗っている
　亀山　大谷の落書きされたマグカップを手に、布巾で必死に磨いている
　林　松本　それを見ている

松本「あねご　そんなの無理ですよ。油性マジックなんて落ちませんよ」

亀山「このままじゃ、私の気が治まらないの」

▽亀山、ひたすら磨いている

林「ところで、アネゴは、どうして古屋さんに、ゾッコンなんですか？
大谷といちゃつくなんて、私だったら、無理ですと」

松本「私も知りたいわ」

▽亀山、カップを磨いている手を停めて語り出す

亀山「私ってさぁ、会社に入りたての頃って、まだワープロもろく打てなくて、
ある日、野崎に、挨拶回りのスケジュールを作って言われて、

Copyright@2026 D'S

はい　って言ったものの、困ってたの。
明日の朝までに全員にの机の上に配っておくようにって言われたのよ」

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　数年前　亀山　入社当時）

〇（定時後）事務所　亀山の席

▽亀山、パソコンで文章を作成している

▽野崎、帰宅準備を済ませた野崎が亀山の席にくる

「おい、今日中に作っておけよ。パソコン得意・な・ん・だ・ろ？」

「はい」

▽野崎、事務所から出て行く

「あぁ～面接の時に、見栄を張って、パソコン得意なんです。って言わなければよかった。
でも、そんなこと言ってもしかたないわ。よし！　がんばろう」

野崎
亀山
亀山

Copyright@2026 D's

▽亀山、パソコンを操作を続ける。

（数時間経過）

○（夜二十一時ぎ）事務所

▽亀山、時計を見る
　二十一時を指している

「新人の私が勝手にこんなスケジュール組んで、怒られないかしら？」

「でも、しかたないわね。課長命令だもん」

「よっし、だいぶん出来たわ。あとは線を引けばオッケーね。
ちょっとコーヒータイムにしましょ」

▽亀山、席を立つ
　手が、キーボードに当たる

＃パソコンの画面に＃

亀山

亀山

亀山

Copyright©2026 D³S

ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR
ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR
ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR
ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR

亀山

▽亀山、慌てる

「え、え、どうなったの？　なんで？」

▽亀山、慌てているので、パソコンの電源スイッチを押してしまう
パソコンの電源が切れてしまう

▽亀山、パソコンの電源を入れるが、保存していないのでデータははい

亀山

「どうしよう・・・・」

▽亀山、呆然とする

（一時間経過）

〇（二十二時）会社　亀山以外誰もいない
亀山の席の周辺のみ明かりがついる

Copyright@2026 D's

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

▽亀山、資料を作り直している

「あぁもうだめ、終電までには出来そうにないわ
今日は、初めての泊まりになるのかしら」

○事務所内の明かりが着く。

▽亀山、事務所全体のあかりが着いたので驚く

▽古屋、事務所に入ってきて、亀山のそばにくる

「あれ、まだ会社に居たの？」

「ちょっと　仕事が残ってしまって」

「そう。俺も、今　出張から帰ってきたところなんだ」

「こんなに遅くまで、お疲れ様です」

「ほんと、新幹線が大雨で遅れてこんな時間になってしまったよ。
で、何してるの？」

Copyright©2026 D³S

古屋　▽古屋、亀山の作りかけたワープロ文書をのぞき見る

「あぁ、これか。毎年やってるやつだな。ちょっと、貸してごらん」

▽亀山、席を立ち、古屋に席を譲る

▽古屋、席に座る

▽古屋、すごい勢いでキーボードをうち、みるみるうちに資料ができあがる

▽亀山、少し心配になる

亀山　「あのぉ、みんなの予定も聞かずに、スケジュールを作っていいんでしょうか？」

古屋　「なぁに、誰がスケジュール作った？　って聞かれたら、俺だって言えばいいよ」

亀山　「そんなぁ」

古屋　「大丈夫、大丈夫。そのうち、亀山さんも、私の作ったスケジュールに文句あるの？って言えるくらいになるよ」

Copyright@2026 D's

亀山　「私、そんな事いいませんよ」

古屋　「こりゃ、失礼しました。でも、君なら、優秀な営業アシスタントになると思うよ。」

亀山　「私がですか」

古屋　「ああ、俺なら　わかるね」

▽古屋、キーボードを打つ

古屋　「よし、出来た」

▽古屋、パソコンの印刷ボタンを押すと、プリンタから資料が次々に印刷される

古屋　「早く、みんなの席のおいて、帰ろうぜ。終電なくなってしまうよ」

亀山　「はい」

（＃フラッシュバック＃）

Copyright@2026 D³S

→＃　現在に戻る　＃→

〇（現在）会社の給湯室

林　「へぇ～　そんな事がいが有ったんですね」

松本　「そういう、私も、何度か古屋さんに助けてもらったことあるわ」

林　「古屋さんって、不思議な魅力がありますよね」

亀山　「それに、ほらっ」

▽亀山、両手に、古屋と亀山の赤と黒の柄がおそろいのマグカップを持つ

松本　「それって、アネゴのマグカップ。二つありましたっけ」

林　「亀山さんのは、赤色じゃありませんでしたっけ」

亀山　「こっちが、私ので、こっちは古屋さんのよ」

林　「本当だ、いままで気がつかなかったけど、お揃いなんですね」

Copyright@2026 D³S

松本　「え、どうして、アネゴと古屋さんのマグカップが同じなんですか？」

亀山　「ひ・み・つ」

▽亀山、再びマグカップを磨く

亀山　「なかなか落ちないわね」

林　「あ、歯磨き粉使ってみます」

亀山　「それ良いアイデア」

林　「ちょっとロッカー行ってとってきますね」

▽林、給湯室を出る

○（就業時間後）古屋の席

▽古屋、自席で仕事をしている

▽亀山、古屋のそばにやってくる

Copyright@2026 D³S

亀山　「古屋さん」

古屋　「どうしたんだい？」

亀山　「あの、これ・・・・」

▽亀山、取っての取れたマグカップを見せる

亀山　「ちょっと力が入りすぎてしまって・・・・」

▽古屋、腕時計を見る

古屋　「亀山さん。今から時間ある」

亀山　「はい、大丈夫ですけど」

古屋　「じゃ、今から買いに行こう」

Copyright@2026 D³S

□第四幕　　デパートにて

〇（夕方）百貨店の食器売り場
　古屋　亀山、マグカップの場所をを探しながら歩いている

亀山　「どこに売ってるのかしら」

古屋　「俺も、コップなんて買ったことないからわかんないな。店員に聞いてみようか」

▽古屋、店員を見つけたので　側にいく

店員　「お客様、何かお困り事ですか」

亀山　「はい。マグカップの場所を探しているんですけど」

店員　「それでしたら、こちらへ」

▽店員、歩き出す

▽古屋　亀山、店員の後ろを着いていく

店員　「こちらで　ございます

Copyright@2026 D's

亀山　「ありがとうございます」

▽亀山　マグカップを手に取り見ている

店員　「いかがですか」

亀山　「そうね。大きいのがいいわね」。

店員　「新婚さんでしたら、こちらのペアカップなどお勧めしておりますよ」

▽亀山　古屋の顔を見る

亀山　「いえ、違うんです。友達のです」

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　亀山　古屋とのもう一つのできごと

○（前回の出来事から　さらに数ヶ月後）事務所

▽亀山　自席でパソコンで仕事をしている。

Copyright@2026 D³S

先輩女性社員　▽先輩女性社員　亀山の横に立つ

「ちょっと、暇だったら、みんなのコップ、漂白剤に付けておいてくれる」

亀山　「はい。わかりました」

▽亀山　立ち上がり給湯室へ行く

○給湯室

▽亀山　棚の扉を開けて、漂白剤を探す

亀山　「漂白剤、漂白剤と・・・」

▽亀山　二つの容器を両手に持つ

亀山　「あら？　これも漂白剤って書いてるわ」

亀山　「どしたらいいのかしら？」

亀山　「まぁ、いいわ、二つとも混ぜちゃいましょ」

Copyright@2026 D³S

亀山

▽亀山　流しの洗面器に両表の液体を入れる

▽亀山　洗面器にカップを浸けていく

「なんか、目がしみるわね。あら、なんか、頭がぼぉっと・・・・・・・・」

▽亀山　コップを床に落としてし、取っ手が取れてしまう

▽亀山　その場に倒れる意識を失う

（数時間後）

○ビルの医務室

亀山がベッドで寝ている

古屋　亀山の横に座っている

亀山　「あれ？　ここはどこ？」

古屋　「気がついた。医務室だよ」

▽亀山　上半身を起こす

Copyright@2026 D's

亀山

古家

亀山

古屋

亀山

古屋

「あら、私、どうして・・・」

▽亀山　状況が飲み込めない

「だめだよ、酸とアルカリを混ぜたら。
塩素ガスが発生して、中毒になるんだから。
俺が、もう少し行くの遅れてたら、危なかったんだぜ」

「え？　私、みんなのコップを漂白剤に付けようとして」

「そうだよ、漂白剤を種類混ぜると危険なんだぜ。知らなかったかい？」

「えぇ」

「まぁ、しょうがないか。なにより、無事で良かった。
もう少し休んでから、今日は家に帰りなよ。
課長には俺が言っといてやるからさ」

▽古屋　医務室から出ていく

Copyright@2006 D³S

亀山
古屋
亀山
古屋
亀山
女子社員
古屋

〇（翌日）会社　古屋の席

▽古屋　自席で仕事している

▽亀山　古屋のところにくる

「昨日は、ありがとうございました」

「あぁ、元気でよかった」

「何かお礼でも」

「お礼なんていいよ」

「でも・・・」

▽女子社員　古屋のお茶を持ってくる

「はい、古屋さん」

「ありがとう」

Copyright@2026 D³S

女子社員　「このコップ、取っ手がとれてしまったんですね」

古屋　「あぁ、また別の持ってくるよ」

▽女子社員　次の社員のお茶を配りに去っていく

亀山　「あのぉ、もしかして、そのコップの取っ手」

古屋　「あぁ、気にするなって」

亀山　「そんな、私のせいですから、弁償します。今日の帰り、付き合ってください」

○（就業時間後）どこかの百貨店

▽亀山　古屋　百貨店の中を歩いている

古屋　「いいよ、新しいのなんて買わなくても」

亀山　「いいえ、悪いのは私なんですから。それに助けていただいたお礼もしたいし」

▽店員　古屋と亀山のそばにくる

Copyright©2026 D3S

店員　「いらっしゃいませ。コーヒーカップですか？」

亀山　「はい。そうです」

店員　「新婚様でしたら、こちらのペアカップなんかが、お勧めですよ」

▽店員　ペアのカップに手をかざす

▽亀山　顔を赤らめる

古屋　「お、それいいんじゃない。シンプルで好みのデザインだな」

亀山　「じゃ、黒い方を　一つで・・・」

店員　「一つで　よろしいんですか」

亀山　「はい。黒い方を」

古屋　「じゃ、俺が、赤い方を買います」

店員　「こちらの方が、黒で、こちらの方が、赤ですね」

Copyright©2026 D³S

古屋　「はい。そうです」

亀山　「古屋さん」

古屋　「いいって」

○（夜）道

▽古屋　亀山　が歩いている
　それぞれの手には、デパートの紙袋が

亀山　「すいません。古屋さんのを買う　つもりが」

古屋　「いいんだよ」

亀山　「私、これから毎日、このカップに古屋さんのお茶入れて持っていきますね」

（＃フラッシュバック＃）

→＃　現在に戻る　＃→

Copyright@2026 D³S

店員　「どういたしましたか？」

亀山　「あ、ごめんなさい。これ下さい」

〇（夜）道

▽古屋　亀山　二人は食事を済ませ歩いている

古屋　「遅くなったね。家の人は心配してないかい」

亀山　「えぇ。ツナーグを送ったから大丈夫」

古屋　「なら、いいんだ」

亀山　「今日は、ごめんなさい」

古屋　「それは、俺に言う言葉じゃないだろう」

亀山　「よくよく考えると、私って、バカバカしいことしてたのね。何をムキになってたのかしら

〇（現在）デパート

Copyright©2026 D³S

亀山　意気地無しで、見ているだけしかできない私に比べて、積極的で、思ったことを言える大谷君が、羨ましかったのね。それで、あんな酷いことをしてしまって、反省してるわ」

古屋

○公園の前

大きな階段がある（幅、段数もある）

亀山　▽亀山　立ち止まる

「私、こっちなんで」

古屋

「じゃ。気をつけて」

亀山

「さようなら」

古屋

「さようなら」

▽亀山　階段を駆け上がっていく

▽古屋　亀山を見ている

▽亀山　最上段まで登り、振り返る

Copyright@2026 DBS

亀山
古屋

「私、男になんか、負けませんから」
あいつより、優しくなってみせろ」
▽亀山　手を振りながら　階段の向こうへ消えていく

Copyright@2026 D'S

「X接点」（第五話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「大谷　ピンチ　再び」

あらすじ

亀山との誤解も解け、平和な生活と思いきや、新たな刺客がまっていた

Copyright@2026 D³S

□第一幕　仲直り

○（翌日の朝）会社
　社員が忙しそうに仕事の準備をしている

▽大谷、自席で仕事の準備をしている

▽亀山、大谷にお茶を運んでくる

亀山　「大谷君。おはよう」

▽大谷、ビックなる

▽大谷、ゆっくりと振り向き亀山の顔をみる

大谷　「お、おはようございます」

▽亀山、大谷に頭を下げる

亀山　「大谷君、今までのこと、ごめんなさい」

▽亀山、頭を上げる

Copyright@2026 D³S

亀山　「本当に、ごめんなさい」

▽大谷、黙って亀山を見ている

亀山　▽亀山、昨日デパートで買ってきた真新しいコップを大谷の机の上に置く

「あのぉ、コップの落書き消そうとしてたら、力入れすぎて割れてしまったの代わりのコップを買ってきたんだけど、どうかな？」

▽大谷、黙っている

亀山　「気に入らなければ、代えてくるわ」

▽古屋、大谷と亀山のところに来る

古屋　「どうだ大谷、気に入らないか？俺と亀山さんで選んだだけどな？」

昨日、時間かけて、厳選に厳選して選んだんだぞ」

亀山　「私がしたこと、こんなもので許してもらえると思ってないけど」

▽大谷、古屋の顔を見る

Copyright@2026 D³S

▽古屋、うなずく

▽大谷、笑顔になる

大谷　「はい。ありがとうございます。使わせていただきます。」

亀山　「今までのこと、本当に謝るわ。ごめんなさい」

大谷　「もういいんです。僕も、ちょっと調子に乗ってたんです。」

古屋　「おいおい、調子に乗ってたのか？　俺は、本気だったんだぜ」

大谷　「そんなこと、思ってないでしょ」

亀山　「そうよ、そうよ」

古屋　「じゃ、これで仲直りだ。そうだ、今度の土曜日、三人で遊園地にでも行くか？」

▽亀山、古屋の顔を見る

亀山　「え？　古屋さんって遊園地に行くの。似合わないわよ」

Copyright©2026 D³S

古屋　「そうかな？　似合わないか？　最近、はまってるんだけどな。」

亀山　「うそうそ、そんな以外性がいいのよ」

▽古屋、大谷の顔を見る

古屋　「大谷、場所と時間、セッティングしておいてくれよな」

大谷　「はい。わかりました」

古屋　「じゃ、そういうことで、無断欠席は許さないから、よろしく」

▽古屋、場所を離れ、自分の席に戻る

Copyright©2026 D³S

□第二幕　仲直りの遊園地

○（週末の土曜日の朝）ユニバーサル・ランド
大谷、古屋、亀山は、ユニバーサル・ランドに訪れていた
大谷がいるにも関わらず、古屋との仕事以外での初めての外出で
亀山は浮かれていた

▽亀山、ユニバーサル・ランドに来て、はしゃいでいる

亀山「古屋さん、大谷君　早く～」

▽亀山　古屋　大谷、テーマパークの中を歩いている

古屋「今日は、何からいくか」

大谷「えっと、まずは、海賊クルーズに乗って・・・」

亀山「ははは、大谷君って、ユニバーサル・ランドの主みたいね」

▽亀山　古屋　大谷、ジェットコースターに乗る

Copyright@2026 D³S

亀山
大谷
古屋
大谷
亀山
古屋
大谷
亀山
大谷

○コースターから出たところ
古屋、大谷、亀山が歩いている

「怖かった～。大谷君って全然平気なのね」

「はい。全然、平気です」

「ようし、大谷　今日こそは、入ってもらうぞ」

「まさか、嫌ですよ」

「え？　大谷君って、お化け苦手なのぉ～。おもしろい～」

「そうそう、お化け苦手なんだよな。俺の家のトイレ使うときも、ドア開けっ放しで入るんだもんな」

「そんなことしませんよ」

「大丈夫、私だって、怖いんだから」

「怖いから大丈夫って日本語、おかしいです」

Copyright@2026 D's

亀山　「ホント、そうね」

古屋　「もう、いいから入ろうぜ」

▽古屋　亀山　大谷　お化け屋敷に入る

▽大谷　古屋の腕を掴み、怖い場所で古屋の胸に顔をうずめる

▽亀山　同様に悲鳴を上げて古屋にしがみついていた

〇（夜）帰りの電車の中

▽亀山　古屋　大谷　の順番で横に座っている

大谷は、古屋にもたれ寝ている

亀山　「大谷君、よく寝てますね」

古屋　「昼間はあんなに元気だったけどな、よっぽど疲れたんだな」

亀山　「ほんと、大谷君って、子供みたいで、かわいいわ」

古屋　「あぁ、年の離れた弟みたいだな」

Copyright@2026 D³S

亀山　「今日は、すごく楽しかったわ。遊園地が、こんなに楽しかった所に思えるなんて、小学生以来かも」

古屋　「そうだよな。俺たちの小さかったころは、遊園地ってすごく楽しい所だったけど、大人になると、そんな気持ちが薄れていくんだよな」

亀山　「大谷君って、まだ少年の心を持ってるのよね。私たちって、大人に成りすぎてしまって、楽しむより前に、何か他のことを考えてしまって、結局、心から楽しむことが出来なくなっているのね」

古屋　「そうだな。俺たちって、好き嫌いの決めるのに、損か得を考えてしまうよな。こいつと付き合えば得だから好きとかって、おかしな判断基準を持ってしまったと思うよ」

亀山　「私、次の駅で乗り換えなんですけど、お二人はどうしますか？」

古屋　「明日も休みだし、このまま俺のマンションに連れて帰るよ。どうせ、起こして帰しても明日も来るつもりだろうから」

亀山　「そうね。兄なんですもの、弟の面倒、ちゃんと見てくださいね」

Copyright©2026 D's

亀山
古屋

○電車　停車し扉が開く

「今日は、とっても楽しかったわ」

「俺も」

▽亀山、電車を降りる

Copyright@2026 D³S

□第三幕　女王様の宴　もう一人のお局（大谷　ピンチ！）

〇（数日後）会社

この会社には、お局様と呼ばれる人物が人いる。
営業の亀山と、もう一人は経理の鈴木である

〇会社　経理課前の廊下
大谷と鈴木が廊下で話をしている

▽鈴木、大谷の前で腕を組んで話をしている

「鈴木さん、何かありましたか」

大谷

「大谷君、この前の交通費の精算は承認できないわ」

鈴木

▽鈴木、大谷に交通費の精算の内容を印刷したものを見せる

大谷

「どうしてですか」

鈴木

「うちの会社の決まりを知ってる」

Copyright©2026 D³S

大谷　「はい」

鈴木　「あのね、うちの会社は基本、飛行機はダメなの、東京に行くには新幹線なの。伝票、書き換えてくれる？」

大谷　「新幹線だと、朝、一番での約束に間に合わなかったんです。ちゃんと課長の許可も取ってます」

鈴木　「そんなの関係ないわ。私は、会社の決まりに従ってるだけ。」

大谷　「そんなぁ、僕、困ります」

鈴木　「それに、朝一番なら、なぜ、前の日から行って、泊まらなかったの？それが正解よ」

大谷　「ちょっと用事があったんです」

鈴木　「どうせ、男の家にでも泊まってたんでしょ？」

大谷　「そんなことはしていません」

鈴木　「どうだか？

Copyright@2026 D's

大谷　とりあえず、会社のルールでやってもらわないと、私が困るの

鈴木　「飛行機と新幹線だと一万円以上も違うんです。僕にとっては大金なんです」

大谷　「大体、あなたが、男とイチャイチャしてるからでしょ。ちゃんと前の日に出発をしてたら問題ならないのよ」

　　「そんなぁ」

　　▽大谷、下を向く

鈴木　「いいわ、今回は大目に見てあげる」
　　その代わり、私のお願い聞いてくれない」

大谷　「え？」

鈴木　「別に、取って食おうってわけじゃないのよ。
　　今度の土曜日、私の家でパーティするの。その時に、お手伝いしてくれない」

大谷　「手伝いって」

鈴木　「料理を運んだり、飲み物をついだりしてほしいの」

Copyright@2026 D³S

鈴木　▽大谷、黙っている

大谷　「大丈夫よ。女子が主役のパーティなのよ。主役が飲み物を注いでたら主役じゃなくなるでしょ。それだけよ」

鈴木　「それだけですか」

大谷　「そうよ」

鈴木　「わかりました。次の土曜日ですね」

大谷　「そう。ちゃんとできたら、交通費のことは考えてあげる　それに、私の友だちって、みんな羽振りがいいから、お小遣いもらえるかもね」

鈴木　▽鈴木、去って行く

〇（その週末の土曜日の昼）　鈴木のマンションのドア

▽大谷、呼び鈴を鳴らす

（チャイムの音）

Copyright@2026 D³S

”ぴぃんぽぉん”

▽鈴木、ドアを開ける
　開けると大谷が立っている

鈴木　「いらっしゃい。みんな待ってたわよ。さぁ入って」

大谷　「おじゃまします」

▽大谷、鈴木の部屋に入っていく

○鈴木のマンションの部屋

▽大谷、リビングに入る
　ソファーには、鈴木以外に二人の女性と、ガラステーブルを挟んで
　反対側のソファーに若い男性が床に座っている

▽女Ａ、大谷を見るなり

女Ａ　「わぁ、かわいい。いい子見つけたじゃん」

鈴木　「でしょ。今年入った新人なの。ムチャしないでよ」

Copyright@2026 D³S

女Ａ　「わかってるわよ」

鈴木　「えっと、紹介するわね。会社の後輩の大谷君、
あっちが、友達の、ハルカに、トモエ　ね。
それから、ハルカが連れてきてくれた、大学生の昭博君。
結構イケメンでしょ」

大谷　「大谷です。よろしくお願いします」

鈴木　「大谷君は、昭博くんの横に座って」

▽大谷、昭博の横に座る

▽昭博、大谷に軽く会釈

▽大谷、昭博に会釈

鈴木　「なに、二人で遠慮してるの」

鈴木　「じゃ、みんなでカンパーイ」

Copyright@2026 D³S

（一同）

女Ｂ　「乾杯」

▽宴会がはじまる

昭博　「男の子たち、テーブルの食べ物とか飲み物なくなってきたら、キッチンにから持ってきてね。飲み物は冷蔵庫にあるから」

鈴木　「わかりました」

大谷　「大谷君、ビールついくれる」

昭博　「はい」

▽大谷　鈴木のグラスにビールをつぐ

＃宴会を続けている＃

（数時間後）

女Ａ　「君たちも飲みなよ」

昭博　「はい、いただきます」

Copyright@2026 D³S

▽女Ａ、昭博のグラスにビールをつぐ

▽女Ｂ、酔った感じで、大谷の横に座る

▽女Ｂ、大谷に声をかける

女Ｂ　「君も飲んでる」

大谷　「僕は、お酒に弱いので」

女Ｂ　「いいから、いいから飲んで」

▽女Ｂ、テーブルの上にあったグラスを大谷に渡す

▽大谷、グラスを受けとる

大谷　「では、少しだけ」

▽女Ｂ、大谷のグラスにビールをつごうとするふりをして、
ビールを大谷のズボンの上にかけてしまう

Copyright@2026 D's

大谷　「あ」

女Ｂ　「ごめん、ごめん」

鈴木　「もう、トモエ　何やってるの」

▽女Ｂ、ビール瓶を机に置き、布きんで大谷の濡れた股間の辺りを拭きだす

大谷　「もう、大丈夫ですから」

▽大谷、自分の股間の上を拭いている女Ｂの手をどけようとする

▽女Ｂ、手をどけず、大谷の股間あたりを拭いている

大谷　「じゃ、僕がしますから」

▽女Ａ、大谷と女Ｂのやりとりを見ている

女Ａ　「だめよ。ビールは早く洗濯しないと匂いが取れないわよ」

▽女Ｂ、手をどける

Copyright©2026 D³S

女Ｂ　「そりゃ大変だ。じゃズボンを洗濯しなきゃ」

鈴木　「大谷君、直ぐに洗濯してあげるから、ズボン脱いで」

大谷　「いや、本当に大丈夫ですから」

女Ａ　「ダメよ、それとも、こんなおばさん達の前では、脱げないって言うのかしら」

大谷　「いえ、そんなことでは」

女Ｂ　「もう、しょうがないわね」

▽女Ｂ、グラスに入ったビールを大谷の服にぶちまける

大谷　「何をするんですか」

女Ｂ　「悪い悪い。手が滑った。これなら、洗濯するしかないでしょ」

▽女Ａ、ビールを昭博の服の上からかける

▽昭博、驚く

Copyright@2026 D³S

昭博　「え」

女Ａ　「あら、昭博君もだわ。これで仲間ができたから、いいでしょ。
さぁ、二人とも服を脱いで」

女Ｂ　「脱げ、脱げ」

▽女Ｂ、手を叩く

鈴木　「今から洗濯すれば、帰る前に乾くわよ」

▽大谷、まだ　ためらっている

女Ａ　「ほら、君から脱いであげなよ」

▽女Ａ、昭博を急かす

▽昭博、立ち上がり、シャツを脱ぎ、上半身裸になる
スリムで色白の身体をさらけだす。

▽女Ｂ、昭博の身体を見る

Copyright@2026 D³S

女Ｂ　「昭博君て、良い身体してるのね」

女Ａ　「でしょ、でしょ」

昭博　「そんなことないですよ」

女Ｂ　「早くズボンも脱いで

▽昭博、ずぼんを脱ぐ

黒のボクサーブリーフで、もっこりしている

女Ｂ　「あそこも、大きそう」

女Ａ　「まぁね」

鈴木　「大谷君も早く。昭博君だけ、かっこいいとこ見せちゃだめよ」

▽大谷、あきらめて　その場に立ち上がる

▽大谷、シャツを脱ぐ

無駄な贅肉のない、筋肉質な身体を披露してしまう

Copyright@2026 D³S

鈴木
女Ｂ
女Ａ
鈴木
女Ａ
女Ｂ
大谷
鈴木
女Ａ

▽鈴木　女Ａ、女Ｂ、大谷の身体に目が点状態

「大谷君て、脱ぐとすごいのね。知らなかったわ」

「こんなカワイイ顔して、腹筋がすごい」

「ギャップ萌えよ」

「さぁ、ズボンも早く」

「下は、どんなのかしら」

「ほら、脱いで脱いで」

「ズボンは、いいです」

「何言ってるの、もう、そこまで脱いだら一緒よ一緒」

▽大谷、ベルトを緩め　ズボンを脱ぎボクサーパンツ一枚の姿となる

「おおきいわ」

Copyright@2026 D³S

女Ｂ　「大谷君の勝ちね」

鈴木　「足の筋肉がすごいわ。学生の時なにかしてたの」

大谷　「はい。短距離をしてましたので」

女Ｂ　「ちょっと、ここに座って、よく見せてよ」

▽大谷、ズボンを鈴木に渡す

▽鈴木、大谷からズボンを受け取る

鈴木　「すぐに、洗濯するわね」

▽鈴木、洗濯機の置いてある、バスルームの方へ行く

▽大谷　ソファーに座っている女Ｂの横に座る

▽女Ｂ、大谷の上半身をじっくり見ている

女Ｂ　「すごい腹筋ね。触ってもいい」

Copyright@2026 D³S

大谷　「はい」

▽女Ｂ、大谷の腹筋を撫でる

女Ｂ　「すごい、私の旦那と大違いだわ」

▽女Ａ、昭博の身体を見る

女Ａ　「昭博君だって、かっこいいわよね。私の横に座って」

▽昭博、女Ａの横に座る

▽女Ａ、昭博の胸を撫でる

女Ａ　「昭博君も素敵よ」

昭博　「ありがとうございます」

▽女Ｂ、大谷の腹筋、胸のあたりさすっている。

▽女Ｂ、大谷の乳首を触る

Copyright@2026 D³S

大谷　「あん」

▽大谷、女Ｂの手を退ける

女Ｂ　「照れなくていいじゃない」

大谷　「ここはダメです」

女Ｂ　「じゃ、太股も触っていい」

大谷　「はい」

▽女Ｂ、大谷の太股をさわりだす。

▽鈴木、洗濯機を回し、リビングに戻ってくる

鈴木　「ちょっと　トモエ　さっきから　大谷君を触ってばかりじゃない。大谷君が欲情でもしたら大変よ」

大谷　「いえ、そんなことはないです」

女Ｂ　「そんなことはって何？私には魅力がないの」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そうじゃないですけど」

女Ｂ　「いいわよ。それじゃ」

▽女Ｂ、大谷のボクサーパンツの上から、股間を揉み出す

大谷　「や、やめてください」

鈴木　「こら、トモエ、大谷君が困ってるわよ」

女Ａ　「もう、トモエったら。じゃ、私もしないとだめじゃない」

▽女Ａ、昭博のボクサーパンツの上から股間を揉み出す

昭博　「ちょっと、困ります」

女Ａ　「おとなしく　してなさい」

女Ｂ　「本当?さっきより大きくなってるわよ」

大谷　「そんなことないです。

Copyright@2026 D³S

女Ｂ　「強がり言っちゃって」

女Ａ　「昭博君は、どう？」

昭博　「き、気持ちいいです」

女Ｂ　「ほら、あれが正常な男の子の反応よ」

大谷　「そんなことはないです」

女Ｂ　「ちょっと、強がりも　いい加減にしないと　お姉さん怒るわよ
　こうしてやるんだから」

▽女Ｂ、大谷のパンツの中に手を入れ、直に大谷の股間を握り揉む

大谷　「わ、や、やめてください」

女Ｂ　「だめ」

▽女Ｂ、大谷の陰茎を握った手を離そうとしない

Copyright@2026 D³S

女Ｂ　▽大谷、女Ｂの腕を掴むが　引き離せない

「ほら、絶対　固くなってるって」

▽大谷、なんとかパンツの中の女Ｂの手を出す

女Ｂ　「ケチね。減るもんじゃないでしょ」

女Ａ　「あら、出したら減るわよ」

鈴木　「もう、何言ってるの。でも、若いから、いくらでも作れるわよ」

女Ｂ　「じゃ、出しちゃおうか」

▽女Ｂ、もう一度、大谷の股間パンツの上から握る

大谷　「出ないですよ」

▽大谷、再度、女Ｂの手をどける

鈴木　「そうよ。大谷君は、ゲイですもの。トモエなんかでは、射精しないわよ
そうよね。大谷君」

Copyright@2026 D³S

女Ｂ「え、そうなの。もったいない」

大谷「違います。違います」

女Ｂ「怪しいな」

▽女Ａ、昭博の股間を揉んでいる

女Ａ「ほら、こっちは、大きくなってるわよ」

昭博「すいません。気持ち良くてつい」

女Ａ「ねね。ゲイだと女の人に触られても、射精しないの」

鈴木「そりゃそうでしょ」

女Ｂ「ショックだな」

大谷「だから、違いますって」

女Ａ「いいこと思いついた。ねね、昭博君　触ってあげてみて」

Copyright@2026 D³S

昭博　「え、僕がですか」

女Ａ　「そうよ」

昭博　「それはちょっと」

女Ａ　「残念。お姉さんの言うこと聞いてくれたら、お小遣いあげるのにな」

▽女Ａ、財布から一万円と取り出し、ひらひらさせる

鈴木　「よし、私も　その話にのった」

女Ｂ　「じゃ、私も一万円」

女Ａ　「どうする。昭博君」

鈴木　「でも、触るだけで三万円って、安すぎない」

女Ｂ　「それもそうね。じゃ、大谷君をいかせるってのはどう」

女Ａ　「いい。それいい」

Copyright@2026 D³S

鈴木　「それじゃ。決まりね」

大谷　「ちょ、ちょっと待ってください。僕は、嫌ですよ」

女Ａ　「えええ、あんな事言ってるけど、どうする。昭博くん」

昭博　「本当に、大谷さんをいかせると、三万円くれるんですね」

鈴木　「ええ、ウソは言わないわ」

▽鈴木、机の上に一万円札を置く

▽女Ａ、同じく、一万円を置く

女Ｂ　「はい、一万円」

▽女Ｂ、一万円を重ねて置く

▽昭博、大谷の顔を見る

昭博　「わかりました」

Copyright@2026 D³S

大谷　▽昭博　大谷の顔を見る

昭博　「何、言ってるの　本気」

大谷　「大谷さん、すいません。俺、どうしても金が必要なんです」

「いや、でも」

昭博　▽昭博　真剣な目で大谷の顔を見る

「ちょっとバイクで事故をしてしまって」

大谷　「え、そうなの」

昭博　「こんなこと、親には言えないし。どうしても、どうしても必要なんです」

大谷　▽昭博　大谷の顔を見つめる

「わかった。僕が　いけば　いいんだよね」

鈴木　「決まったようね。男同士の友情ってすてきね」

Copyright@2026 D³S

女Ａ　「でも、昭博君、三万円で足りるの？」

昭博　「いえ、もう少し必要なんです」

大谷　「そうなのかい」

昭博　「はい。十万円くらいは必要なんです」

大谷　「そっか。でも　僕にはどうすることもできないよ。ごめん」

昭博　「大谷さんが謝ることないですよ。今日だって、割のいいバイトってことで、割り切って参加してるんですから」

大谷　「そっか。まぁ、僕も似たようなもんだけど」

女Ｂ　「男同士のしんみりした話は、後でしれくれない」

女Ａ　「ほんと。ほんと」

鈴木　「そんなにお金が必要なら、お姉さんたち、もっと協力してあげてもいいわよ」

Copyright@2026 D's

昭博　「本当ですか」

鈴木　「ええ、本当。それには二人の協力が必要ね」

昭博　「いったい　どうすればいいんですか」

鈴木　「大谷君が一回出す毎に、追加で一万円寄付するわ」

女Ｂ　「いい。それいい」

女Ａ　「私も、大賛成よ」

女Ｂ　「昭博君、どう。これなら、あっという間に稼げるわよ」

昭博　「えっと、僕は、構いませんけど。大谷さんが」

▽昭博、大谷の方を向く

大谷　「いいよ。昭博君が困ってるんだから」

昭博　「ありがとうございます」

Copyright@2026 D³S

女Ａ　「じゃ。昭博君、大谷君がからっぽになるまで　がんばってね」

鈴木　「もう、そんな　やらしい言い方はやめて。私たちは善意でするのよ」

女Ａ　「そうね。クラファンよ」

女Ｂ　「クラファン　って良い言い方ね」

鈴木　「それじゃ、はじめてちょうだい」

▽女Ａ、女Ｂ　大谷、昭博から離れる

昭博　「大谷さん、すいません」

▽昭博、立ち上がり、大谷の座っているソファーの前に行く

▽昭博、しゃがみ　大谷の胸を舐めはじめる

大谷　「あぅ」

女Ａ　「大谷君　乳首敏感」

Copyright@2026 D³S

女Ｂ

「しずかに」

▽女Ａ、舌を出して照れ笑い

▽昭博、大谷のボクサーブリーフの上から股間も揉む

▽大谷、目をつぶる

▽昭博、大谷のパンツの中に手を入れ、大谷の陰茎を掴む

▽昭博、体を倒しながら、大谷をソファーに寝かせる

▽大谷、ソファーに横になる

▽昭博、大谷の膝の上にまたがる

▽昭博、大谷のパンツに手をかける。

▽昭博、大谷のパンツを脱がし、ソファーの下に置く

女三人は、大谷の股間に注目

女Ｂ

「わぁ、結構大きいのね」

Copyright©2026 D³S

女Ａ　「毛が無いわ」

鈴木　「そりゃ、ゲイだもの。身だしなみをちゃんとしてるのよ」

女Ｂ　「私、パイパンってはじめて見たわ」

女Ａ　「私も。これも有りよね」

大谷　▽昭博、大谷の固くなったペニスを扱く

（あ、あ、あ、あっ）

▽昭博、大谷の目をつぶり、我慢している顔をみている

大谷　「やばい、いく」

大谷　「うっ」

女Ａ　「いった。いったわ」

▽大谷、目の上に手をのせ、深呼吸をしている

Copyright@2026 D³S

鈴木

「さぁ、時間がないわ。次よ」

Copyright@2026 D³S

□第四幕　翌日の会社で

○（月曜日の朝）会社　古屋の席
　古屋が仕事準備をしている
　亀山が、お茶を運んでくる

▽亀山、古屋のところにお茶を置く

亀山「おはようございます」

▽古屋、見上げて亀山の顔を見る

古屋「おはよう」

亀山「あら？なんだか元気がないみたいです。心配事ですか」

古屋「う～ん、めずらしく　今週は、大谷が来なかったんだよな。ツナーグも無かったし」

亀山「えぇ？　大谷君が？　めずらしいわね」

古屋「今までは、こんなこと無かったからな」

Copyright@2026 D³S

亀山　「心配しすぎですよ。大谷君だって大人なんですから、彼女くらい出来たんじゃないかしら？」

古屋　「そうだと　いいんだけど」

亀山　▽亀山、空席の大谷の席を見る
大谷の席は空
「大谷君まだ来てないのかしら。いつもなら、もう来てる時間なんだけど」

▽亀山、近くでお茶を配っている松本に声をかける

亀山　「ねぇ、松本、大谷君みなかった？」

▽松本、亀山の声に気づく

松本　「大谷君なら、さっき　経理課の方へ行きましたよ。鈴木さんに呼ばれたみたいですね」

亀山　「鈴木に？」

Copyright@2026 D's

▽亀山、ちょっと考える

▽亀山、もっていたお盆を、近くの机におく

亀山「松本、ちょっと、これもお願い」

松本「はい。いいですよ。どうしたんですか」

亀山「ちょっと、鈴木のところに行ってくる」

松本「わかりました」

古屋「どうしたんだい」

亀山「鈴木って聞いて気になることがあったの。古屋さんは心配しないで。女の私の方か、話やすいから」

古屋「わかった。お願いするよ」

▽亀山、部屋から出て行く

Copyright@2026 D³S

○（同）総務課の前の廊下
大谷と鈴木がいる

大谷　「えええ、どういうことですか？　交通費が出ないって」

鈴木　「だから、先週、伝票を処理するの忘れちゃったのよ」

大谷　「僕の交通費は、どうなるんです」

鈴木　「諦めてもらうしかないわね」

大谷　「そんな」

鈴木　「しょうがないわよ」

大谷　「なんとか　ならないんですか」

鈴木　「まぁ　私が、総務課長に頼めば　なんとかなるかもね」

大谷　「お願いします」

鈴木　「そう言ってもね。

Copyright@2026 D³S

大谷　じゃ、もう一回私の言うこと聞いてくれる？
そしたら、総務課長に頼んであげる」

鈴木　「そんなぁ。もう嫌です」

大谷　「いいじゃないの。あなただって、いい思いしたんじゃないの」

「違います。あれは」

▽亀山、大谷、鈴木が話をしているところにくる

▽亀山、大谷に声をかける

亀山　「大谷君、何やってるの？」

▽鈴木、亀山を見る

（鈴木）　（ゲ！　亀山。）
※鈴木の一年先輩にあたる亀山が苦手である

大谷　「亀山さん　おはようございます」

Copyright@2026 D's

鈴木　「あら、亀山さん。お久しぶり　お元気かしら」

亀山　「ええ元気よ。ところで、うちの、大谷が何かしたの」

鈴木　「そうそう、大谷君が、出張の時に会社で禁止している飛行機を使ったから、書き換えてって言ってたのよ」

▽亀山、大谷の方を向く

亀山　「大谷君、そうなの？」

大谷　「はい。そうです。出張でどうしても飛行機を使う必要があったんですけど飛行機は禁止されてるから、新幹線を使ったことにして書き直してと言われてるんです」

亀山　「そう。ねぇ大谷君、どうして飛行機を使ったの？課長に許可は取ってるの」

大谷　「はい。事前に課長には了解をもらってます。お客様と九時に約束をしていて、飛行機じゃないと間に合わなかったんです」

亀山　「それじゃ、仕方ないわね」

Copyright@2026 D³S

大谷　「それで、鈴木さんに説明したら、飛行機の伝票を通したかったら、言うことを聞けと・・・」

亀山　「言うこと？」

鈴木　「ちょっと、大谷君　何を言い出すの」

亀山　「あなたは黙ってて」

大谷　「鈴木さんの家に来てくれと」

鈴木　「冗談じゃないわ、こんなガキんちょ相手にするわけないでしょ」

亀山　「それで」

大谷　「それで」

▽大谷、少し間を置く

大谷　「鈴木さんのホームパーティで料理を出すのを手伝ってって」

亀山　「他には」

Copyright@2026 D³S

大谷　「それだけです」

亀山　「わかったわ」

▽亀山、鈴木の方を向く

亀山　「そういう事よ。これ以上、詮索されたくなければ、後は、あなたの方でやってちょうだい」

鈴木　「でも・・・」

亀山　「あなたが、友達と家でパーティと称して、若い男の子を家に呼んで、変な遊びをしてるって、噂になってるわよ。
今度、この子に変なことしようとしたら、私が許さないから」

▽亀山、大谷の方を向く

亀山　「さぁ、戻りましょう」

▽亀山、去って行く

Copyright@2026 D³S

▽大谷、亀山について行く

○エレベーターの中

▽亀山　大谷、エレベーターに乗っている

大谷　「ありがとうございます」

亀山　「本当に何もなかったの？」

大谷　「はい。何も」

亀山　「言いたく無ければ、それ以上聞かないわ。でも、次　あったら、正直に話してね」

大谷　「はい。でも、僕が鈴木さんのところに行ったの、どうして分かったんですか」

亀山　「うちには松本という情報通がいるのよ。
それに、鈴木が大谷君をマークしてる。なんて言ってたし」

大谷　「松本さんにも、お礼言っとかなくちゃ」

Copyright@2026 D³S

亀山

「お礼？　あの子にしたら、おしゃべりは趣味だけど」

Copyright@2026 D3S

「X接点」（第六話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル　「プール」

あらすじ

大谷、古屋、亀山は、プールに遊びに行きます
そこで、迷子を見つけ親探しを
古屋、亀山は、どうして迷子に敏感なのかを大谷に尋ね、
大谷の幼少期にあった出来事を知ります

Copyright@2020 D³S

□第一幕　プールにて

〇（夏の暑い日）屋外プール
　大谷、古屋、亀山は、プールに遊びにきている
　サマーベットを三台並べている

▽古屋　亀山、プールサイドのサマーベットに寝転んでいる

▽大谷、古屋の背中にオイルを塗っている

＃周りの客が、大谷と古屋を見ている＃

▽亀山、それを見ている

「大谷君って、ぜんぜん周りの目が気にならないのね」

「なんで気になるんですか？」

▽古屋、亀山を見る

「いいじゃないか。俺も気にならないし」

亀山
大谷
古屋

Copyright@2026 D³S

亀山　「ふふ、そうよね。気にならないわよね」

古屋　「そんなに気になるなら、君が塗ってくれてもいいんだよ」

亀山　「結構です。人の彼氏になんかに塗ってもらいたくありませんから」

古屋　「あちゃ～、会社より厳しいな」

亀山　「大谷君、その、むさ苦しいオジサンを塗り終わったら、私にも、塗ってくれない」

▽大谷、亀山を見る

大谷　「はい」

亀山　「大谷君は、誰かさんと違って優しいわね」

大谷　「そんなことないですよ」

▽大谷、古屋にオイルを塗りながら、プールサイドの遠くの方をみる

大谷　「あ！」

Copyright@2026 D³S

古屋　「どうした？」

大谷　「ちょっと、待っててください」

▽大谷、オイルを床に置く

▽大谷、走って行く
　走っていった先に、男の子が泣いている

▽古屋、上半身を起こす

▽古屋　亀山、大谷を見ている

亀山　「なにかしら」

古屋　「迷子じゃないかな」

亀山　「迷子」

古屋　「大谷、迷子みつけるの上手いからな」

Copyright@2026 D³S

亀山　「大丈夫かしら」

▽大谷、子供と話しをしている

＃大谷と子供に走って近づく女性

▽女性、大谷と話をしている

▽女性、大谷に頭を下げている

▽子供、大谷に手を振っている

▽大谷、子供に手を振る

亀山　「お母さんかしら」

古屋　「どうやらそうみたいだな」

亀山　「良かった。お母さんが見つかって」

▽大谷、古屋の元にもどってくる

Copyright@2026 D³S

大谷
亀山
大谷
亀山
大谷
大谷
亀山
大谷
古屋
大谷

▽大谷、サマーベットに座る
「お母さんが来てくれたよかったです」
「迷子だったの」
「はい、はぐれたみたいですね」
「見つかってよかったわ」
「はい、よかったです」
「大谷君って優しいのね」
「優しいっていうか、親とはぐれた、あの子の気持ちを考えると、居ても立ってもいられなかったんです」
「大谷って、どうして　そう迷子に敏感なんだ」
「急に、親が居なくなるって、どんなに悲しいか。経験してないとわからないです」

Copyright@2026 D³S

大谷

▽大谷は、サマーベットに腰掛け、自分の過去の出来事を話しだした

「母が死んで後、父がひとりで、僕の面倒見てくれてたんです。
父は、昼間はずっと仕事で、僕はいつも一人で遊んでいました。
そんな時、父が、プールに行こうって言ったんです。
学校のプールしか知らなくて、父親から流れるプールや、
波のできるプールの話を聞いて、わくわくしてました」

（＃　フラッシュバック　＃）

←＃　回想　＃←　大谷　父とプールでの想い出

○プールサイド

少年時代の大谷と、大谷の父がプールに来ている

▽大谷　父、プールサイドの椅子に座っている

目の前にはテーブルがあり、焼きそば、ジュースのカップがおいてある

大谷　父

▽大谷、焼きそばを食べている

「どうだ　うまいか」

Copyright©2020 D³S

大谷　「うん。おいしいよ。父ちゃんも食べてみなよ」

大谷父　「ああ、博紀が残してからでいいよ」

大谷　「僕、こんなに食べれないよ」

大谷父　「そうか。学校は楽しいか？」

大谷　「うん。楽しいよ」

大谷父　「そっか。よかった。勉強がんばって、将来はう～んと稼がなきゃな」

大谷　「うん。いっぱい稼いで、父ちゃんを楽にしてあげるね」

▽大谷、テーブルの上の、レンズ付きフィルム（使い捨てカメラ）を見つける

大谷　「あ、カメラだ。買ったの？　。何撮るの？」

大谷父　「そりゃ、父ちゃんの一番の宝物に決まってるだろ」

▽大谷父、大谷に向かってシャッターを切る

Copyright©2026 D³S

大谷　「うちは、貧乏なんだから、無理しなくていいのに」

大谷　父　「子供が、心配するなって。せっかく来たんだし、博紀の泳ぐところを母さんにも見せてやりたいからな」

▽大谷　父、さらに数回　シャッターを切る

大谷　「父ちゃんも撮ってあげるよ」

大谷　父　「父ちゃんは　いいよ」

大谷　「お母さんだって、父ちゃんの写真を見たいはずだよ」

▽大谷、手を出す

大谷　「ほら、早く」

▽大谷　父、大谷にカメラを渡す

大谷　「父ちゃん、いい？」

大谷　父　「いいぞ」

Copyright@2026 D'S

▽大谷、父に向けてシャッターを切る

○流れるプールの中

▽二人はプールの中にいる

大谷　父　「父ちゃんと、潜りの競争しよっか？」

大谷　「うん」

大谷　父　「よし、いち、にの、さん」

▽大谷の父、先にプールに潜る

▽大谷、続けて大谷も潜る
　流れるプールなので視界が悪い

▽大谷、プールから顔を出す
　父が顔を出すのを待っている

▽大谷、しばらく待っているが、一向に父が上がってくる様子がない

Copyright@2026 D'S

大谷

「父ちゃん、まだ？　もう、いいよ」

▽大谷、プールサイドにあがり、座って父を待つ

〇（夕方）プール

▽監視員Ａ、プールサイドにずっと座ってこる大谷を見つける

監視員Ａ

▽監視員Ａ、大谷に声をかける

「おぉ～い、僕、もう閉まる時間だよ」

〇プールの事務所

さっきの監視員を含め、二人いる

▽大谷、バスタオルを巻いて椅子に座っている

▽監視員Ｃ、大谷の荷物を持ってやってくる

監視員Ｃ

「この子の言ったロッカーに、荷物が残ってました」

Copyright@2026 D's

監視員Ｂ

監視員Ａ

警察官

大谷

▽監視員Ａ、荷物のひとつ　かばんを　大谷に見せる

「僕、このカバンは、僕のかい」

▽大谷、うなずく

▽監視員Ａ　監視員Ｂ　監視員Ｃ、顔を見合わせる

「取りあえず、警察に電話だ」

〇大谷の住んでいるアパート
　前に車が到着
　中から、警察官と大谷が降りてくる

「僕の家はここかい」

「はい。ありがとうございます。」

▽大谷、アパートの階段を急いでかけあがる

▽警察官、大谷の後ろを着いていく

Copyright@2026 D³S

▽大谷、部屋のドアをあける
　部屋の明かりは点いていない

大谷　「ただいま！　父ちゃん！」

〇真っ暗な部屋
　シーンとしている

▽警察官　大谷の肩に手を置く

→＃　現在に戻る　＃→

〇大谷の部屋

大谷　「すいません。こんな話をしてしまって」

亀山　「私達の方こそ、思い出したくない話をさせて　ごめんなさいね」

大谷　「いえ、いいんです。事実なんですから」

（数時間後）

Copyright@2026 D³S

大谷　○（夕方）大谷のアパートの玄関
　　大谷、古屋、亀山　がいる
亀山　▽古屋　亀山、大谷の部屋を訪れていた
▽大谷、玄関の扉を開ける
大谷　「さぁ、狭いけど入ってください」
亀山　「お邪魔します」
▽三人、大谷の居間の場所に入る
大谷　「お茶入れますから、座っててくださいね」
亀山　「突然、押しかけてきたのよ。気を遣わないでね」
▽大谷、湯を沸かしに台所へいく
亀山　「私、男の人の部屋に入るって、初めてだわ」
古屋　「え？　そうなのかい？以外だなぁ」

Copyright@2026 D³S

亀山　「それって、どういう意味かしら？私が不純な女だとでも」

古屋　「う～ん、深くはないけどね」

▽大谷、お茶を持ってくる

大谷　「はい、どうぞ」.

▽亀山、収納ボックスの上の上に飾られた、大谷の母親の写真を見つける

亀山　「あら、これがお母さんね。本当に、美人ね。大谷君は、お母さん似だったのね」

大谷　「そうですか？」

▽大谷、母似と言われ照れる

○母の写真の横には、幼い大谷がプールで取ったと思われる写真が飾ってある
横には同日撮影した父の写真も

亀山　「あら？　こっちがお父さんね」

Copyright@2026 D's

大谷　「はい、そうです」

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　大谷　高校二年生

○小村の家、小村の部屋

・大谷　高校二年生

・小村　高校三年生

▽大谷、小村のベットの上に寝そべって漫画本を読んでいる

▽小村、パソコンを操作している

小村　「よっし」

▽小村、大谷の方を向く

小村　「おい！　大谷　父さん見つけたぞ！」

大谷　「え？」

Copyright©2026 D³S

小村　「ちょっ見てみろよ」

▽大谷、起き上がり、小村に近づきパソコンの画面を見る

小村　「ほら、これ」

画面　“大谷　直人　※大谷の父の名前　の現在住んでいる場所について
　　書かれてあった“

小村　「父さんの居場所がわかったんだよ。よかったな」

大谷　「父さん居場所が・・・」

小村　「前、孤児院に一度だけ、お前宛に無名の荷物が届いたって言ってたろ」

大谷　「高校に入学する時に、送り主が不明で制服が送られてきた時ですね」

小村　「俺、孤児院に行って、その伝票を探してもらったのさ。
伝票の番号から、どこから送られてきたのかが判ったんで、
その地域のネットの掲示板に人捜しのことを書いてたら、見つかったんだよ」

小村　「うん。案外近いな。今から行こう」

Copyright@2026 D³S

大谷　▽小村　大谷の手を引く

小村　▽大谷　動かない

大谷　「いえ、会いたくありません」

小村　「なんで、親父だぞ」

大谷　「僕は、捨てられたんです。だから、会いに行っても会ってくれるかどうか」

小村　「何言ってんだよ。子供に会いたくない、親なんて、居るもんか。
大谷を手放したのは、何か訳があるに違いない。その訳を聞いてからでも
遅くないだろ」

大谷　「いいんです。もう、父の事は忘れたんです」

小村　「いい加減にしろよ。会うのが怖いのか？
何しに来た。って言われるのが怖いのか？
もし、おやじさんが、お前にそんな事言ったら、俺が、ぶっ飛ばしてやる。
だから、来い」

Copyright@2026 D³S

▽小村、大谷の手を引っ張る

○小村の家の駐車場

▽小村、バイクに跨る　吉賀にヘルメットを渡す

小村　「早く乗れ」

▽大谷、小村の後ろに座る

小村　「すぐ付くからな、しっかり、握っていろ」

▽小村　大谷、バイクに乗り　父の住んでいるというアパートへ向かう

○（一時間後）あるアパートの前にバイクを停める

○アパートの玄関の前

▽小村、ドアの表札を確認

小村　「ここだ」

Copyright©2026 D³S

中年男性

中年男性

小村

中年男性

▽小村、呼び鈴を押す

＃部屋の中から声がする＃

「はい。待ってろ　今　開ける」

▽中年男性、ドアを少し開ける

「どなた」

「あのぉ、大谷直人さんのことで」

▽中年男性、小村の後ろにいる大谷の顔見る

▽中年男性、ドアを全開にあける

「あぁ、直人さんのことだね。上がって上がって」

〇中年男性の部屋

　大谷、小村　部屋で座っている

▽中年男性、大谷の顔を見る

Copyright@2026 D³S

中年男性　「あんたが、直人さんの息子さんだね」

大谷　「はい」

中年男性　「すぐにわかったよ。本当に似ている」

中年男性　「直人さんとは仕事仲間でね。いい人だったよ。いつも、子供の事ばっかり話してた。俺には、かわいい子供がいて、今は離れて住んでるけど、いつかは一緒に住むんだって」

大谷　「あのぉ、父は・・・
それで父は、どこにいるんですか？」

▽中年男性、立ち上がる

▽中年男性、押し入れを空けおおきな缶の箱を取りだす

▽中年男性、缶を大谷の前に置く

▽大谷、置かれた缶を見る

Copyright@2026 D's

中年男性　「この中に居るよ」

▽大谷、時間が一瞬止まる

中年男性　「直人さんが、もし、息子が訪ねてきたら、渡してくれって、俺に預けたものさ」

▽大谷、缶の蓋を開ける
　位牌が入っている
　一つは、父、もう一つは母のもの

中年男性　「直人さんの位牌は、俺が入れたんだけどな」

▽大谷、位牌を取り出し、さらに中の物を出す

▽大谷、薄汚れた巾着袋には通帳と印鑑が入っている

中年男性　「直人さんが、俺の息子は賢いから、絶対に息子を大学に行かせるんだって、貯めた金だ」

▽大谷、通帳と印鑑を床の上に置く

▽大谷、缶から古い使い捨てカメラを取り出す

Copyright©2026 D³S

中年男性　「そのカメラ、よっぽど大事な物みたいでさ、
世界で一番大切な物が入っているんだって、
いよいよ最後って時に、
布団で寝ている直人さんが、そのカメラを取ってくれっていうから、
渡したら、すごく笑顔になって、そのまま逝っちゃってしまったよ。
ほんとに、いい人だったのにな。なんでだろうな」

大谷　「でも、僕は、僕は、父に捨てられたんですよ」

中年男性　「おい、坊主、それは違うぞ」

中年男性　「直人さん、知り合いの借金の保証人になっちまってよ
それでそのサラ金の取り立てが、尋常じゃなくて、
このまま一緒にいたら、子供に何されるかわからん。そう思って手放したんだ」

大谷　「そんな、そんな事で、僕は捨てられたんですか」

中年男性　「違う、親ってのはな、我が子を一番守りたいものなんだ。
我が子を危険にさらすくらいなら、自分はどうなってもいいと思ってる。
直人さん、借金を返すままではとがんばって、やっと返し終わった時に、
そのときは、すでに遅く体をこわしてしまってよ」

Copyright@2026 D's

▽大谷　小村、中年男性の家から出る

（数時間経過）

○（夕方）カメラ屋の前

▽小村、カメラ屋の前にバイクを止め、大谷を待っている

▽大谷、カメラ屋から現像されプリントされた写真の入った袋を持ってる

▽大谷、袋から写真を取り出し、一枚一枚見る
　大谷が父と最後に過ごしたプールで撮影したものだ

▽大谷、父の写真を見つける
　大谷がプールで撮影した父の唯一の写真

▽大谷、目に涙が溢れてくる

○（その夜）大谷の入っている施設　大谷の部屋

▽大谷、母の写真の横に父の写真、大谷の写真を飾る

Copyright@2026 D's

大谷　「父さん、母さんに僕の写真見せたいって、言ってたよね。ほら、家族が揃ったよ」

→＃　現在に戻る　＃→

○大谷の部屋

亀山、古屋が、大谷の話を聞いている

▽亀山、目が赤くなっている

大谷　「僕は、父のおかげで大学に行くことができました」

亀山　「お父さん、大谷君のこと、心から愛していたのね」

Copyright@2026 D's

古屋
亀山
古屋
亀山
亀山

第二幕　大谷が発熱

〇（プールへ行った翌日の月曜日）事務所

▽古屋、大谷の机に大谷がいないことに気づき亀山の席にくる

「今日は、大谷　出張でも行ってるのか」

「違うわ、体調が悪いから休みますって、連絡があったわ
熱が度あるんですって。昨日、ちょっと、はしゃぎすぎたのかしら？」

「あぁ。そうかもな。ちょっと帰りに寄ってみるよ」

「そうしてくれる。私も心配だし」

〇（夜）大谷の家

古屋は、会社の帰りに、大谷のアパートに来ていた。
古屋の片手には、コンビニ弁当が入った、袋が下げられていた。

▽古屋、チャイムを押す

「はーい。今　開けます」

Copyright@2026 D³S

亀山　▽亀山、ドアを開ける

「古屋さん、いらっしゃい」

古屋　「君も来てくれてたんだ」

亀山　「何か栄養のあるもの食べさせてあげようと思って」

▽亀山、古屋の手に下がっているコンビニの袋を見る

「やっぱり、古屋さんじゃ、コンビニ弁当が精一杯なのね。さ、入って、って私の家でないんだけど」

▽古屋、玄関で靴を脱ぎ、奥の大谷が寝ている部屋に入る

大谷は、布団の上で上半身を起こし、古屋を出迎えた。

古屋　「大谷、大丈夫か」

▽大谷、上半身を起こす

大谷　「古屋さん、来てくれたんだ」

Copyright@2026 D³S

古屋　「当たり前だ。熱だって？　大丈夫か？」

大谷　「はい、もう大丈夫です。熱はすっかり下がりましたかた、明日は出社できそうです。病院で見てもらったら、プール熱って言われました」

古屋　「プール熱？　そっか、相変わらず子供なんだから～」

亀山　「病人に、そんなこと言わないの」

▽古屋、大谷の頭を思いっきりなでる

古屋　「よしよし、いい子だ」

大谷　「古屋さん、まだ、頭がいたんですよ」

古屋　「悪い悪い、どうせなら、明日も、休んでもいいんじゃないのか？」

大谷　「でも、仕事が溜まると嫌だし」

亀山　「大丈夫、大丈夫。こんな時しか休めないって」

Copyright@2026 D's

亀山　▽亀山、台所から小さな土鍋を載せたお盆を持ってきた。

「はい、これ食べて元気になってね。
私、雑炊には自信あるんだから」

▽亀山、土鍋から小さな茶わんに雑炊をよそう

大谷　▽亀山、大谷に雑炊の入った茶碗を渡す

「ありがとうございます」

▽大谷、茶わんを受けとる

亀山　「沢山作ったから、いっぱい食べてね」

▽亀山、古屋を見る

亀山　「そうそう、古屋さんは、晩ご飯は、食べた?」

古屋　「まだだけど、こいつの無事確認したら、腹減ってきな」

亀山　「じゃ、一緒に雑炊食べる?」

Copyright@2026 D³S

古屋　「そうだな。コンビニ弁当は、明日の俺の朝飯にして、自慢の雑炊を頂くよ」

亀山　「じゃ、私も一緒に戴くわ」

▽亀山、台所に行く

▽亀山、雑炊を入れた茶碗を二つ持って戻ってくる

▽亀山、テーブルの上に茶碗を置く

亀山　「どうぞ」

古屋　「ありがとう」

▽古屋、茶碗の中の雑炊を見る

古屋　「こりゃ　うまそうだ」

亀山　「体調が戻ってない大谷君に合わせてあるから、味は薄めにしてるわよ」

古屋　「減塩してる俺には、丁度いいや」

Copyright@2026 D's

亀山

古屋

亀山

大谷

古屋

亀山

大谷

大谷

「じゃ、召しあがれ」

▽古屋　亀山、雑炊を食べ始める

「大谷が病気で休むなんて初めてだから、ビックリしたよ」

「ほんと、週末はあんなに元気だったのに。私もビックリしたわ」

「すいません。ちょっとはしゃぎ過ぎたのかもしれません」

「謝ること無いって」

「とりあえず今は、熱を下げるのが先よ」

「はい」

▽大谷、古屋、亀山が雑炊を食べているのを見ている

「会社の人、みんな親切です。
施設にいた頃って、こんなことしてもらったことがなくて。
あの野崎課長だって、根は良い人なんですよブきっと」

Copyright@2026 D³S

亀山　「何言ってるの、あいつは君にひどいことしたのよ」

大谷　「入社試験の面接の時です」

▽大谷、入社試験を受けた時のことを話しだす

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　大谷の入社試験

〇会社の会議室

▽大谷、椅子に座っている

反対側に　役員Ａ、役員Ｂ、役員Ｃ、渡辺、野崎　が座っている

役員Ａ　「この会社を受けた理由は？」

大谷　「はい、この会社の将来性と、僕が生涯かけて勤める価値のある商品開発を行っていると感じたからです」

役員Ｂ　「えっと、君には両親がいないようだが？」

Copyright@2026 D's

大谷　「母は、僕が産まれてすぐに亡くなりました、父は・・」

役員Ｂ　「お父さんの方は、どうしました？」

大谷　「父は、僕が高校の時に亡くなりました」

役員Ｃ　「施設で育ったようですが、親類などは、居なかったのですか？」

大谷　「はい。父も、母も親類とは絶縁状態でしたので、
僕を引き取ってくれる人はいませんでした」

役員Ｃ　「うちの会社は、君も知っての通り、世間に名の知れた会社だ。
身元保証人が、はっきりしないとはねぇ」

▽大谷、下を向き黙っている

▽野崎、他の面接官の方に向く

野崎　「親のことなんか関係ないじゃないですか？
この会社は、親の善し悪しで採用を決めるんですか？
偉ければ採用ですか？

Copyright©2026 D's

野崎　本人の努力は認めないなんて、バカげた採用基準だと思いますけどね。
そんなこと大企業と言われる、我が社がすることですか？」

▽野崎、大谷を見る

大谷「君は、入社試験も上位におり、学生時代にの成績も申し分ない、
どうだろう、我が社に貢献してくれないか」

「はい。もちろんです」

→＃　現在に戻る　＃→

〇大谷の部屋

大谷「その面接官が、野崎課長だったんです」

亀山「そうなの」

大谷「はい、僕、野崎課長のおかげで、こうして、この会社に入れて、
古屋さんや亀山さんに出会えたことに、感謝しています」

古屋「突っ込み所としては、〝会社の為〟じゃなく、〝俺の為〟だったことだな。

Copyright@2026 D's

亀山　その頃から、狙ってたんだな」

古屋「古屋さん！　せっかく、大谷君が、いい話してるのに、変な方向にもっていかいないでよ」

大谷「ごめん、ごめん。俺は、あいつが大谷にした行動は、未だに許せないな」

古屋「もう、いいんですよ。こうして人が、ここに入れるのは、あの人のおかげなんですって」

古屋「相変わらず、いい方向に解釈するのね」

古屋「まぁ、それで男に手を出すってことは、うちの会社には、お前より魅力的な女の子が居ないってことかな？」

亀山「もう、古屋さんたら。女の子全員敵に回す気？」

大谷「少し、眠くなってきました」

亀山「ごめんなさい。うるさくして」

古屋「もう少し、居てやるから、少し寝ていろよ」

Copyright@2026 D³S

亀山　▽大谷、布団をかぶって眠りにつく

〇（数十分経過）大谷の部屋

▽大谷、ぐっすり寝ている

古屋　▽古屋　亀山、迎え合わせに大谷を見ている

「大谷君の寝顔、かわいいわね」

亀山　「あぁそうだな。それに、ほら」

▽古屋、布団の中に入れてあった手を出す

大谷が古屋の手を握っていた。

「あら」

亀山　▽亀山、クスッと笑う

「私、はじめ大谷君が古屋さんの事、好きって言った時、単なる変態だと思ってたけど違うのね。

Copyright@2026 D³S

古屋　きっと、幼い頃にお父さんと離れて、大谷君の中では、父親に対する愛情が止まったままになってたのよね。そして、お父さんの様な存在の古屋さんに出会って、その時間を取り戻そうとしているだけなんだわ」

亀山　「そうかも知れないな。こうして手を繋いでいても、ちっとも嫌な気にはならない。むしろ、俺も昔、こうして親父の手を繋いでいたんだなと思うと、ほっとするよ」

古屋　「私、今は、大谷君のお母さんの分を取り戻して、あげたい気持ちでいっぱいだわ」私、そろそろ帰るわね」

亀山　「おっと、もう、こんな時間だ」

古屋　「こう見えても、年頃の女なんですから、遅く帰ると怒られちゃうわ」

亀山　「俺は、もう少しここに居てやるよ。起きていなかったら寂しがるだろうし」

古屋　「えぇ、お願いするわね」

亀山　「駅まで送っていくよ」

古屋　「大丈夫よ」

Copyright@2020

古屋　「年頃の女なんだろ？」

▽古屋、大谷の手を解き立ち上がる

〇大谷のアパートのドア

▽古屋、ドアをそっと閉める

〇夜道

古屋、亀山が歩いている

古屋　「今日は、ありがとう。雑炊おいしかったよ」

亀山　「よかった。どうせ家に帰ってもすることなかったし」

古屋　「来てくれて助かったよ」

亀山　「大谷君が、熱出して休んだって聞いたとき、すぐに、寄って帰ろうって気持ちになったの。不思議ね。こうして、古屋さんと親しくなれたのは、大谷君のおかげね。大谷君がいなければ、こうして二人で、歩いてなかったと思うわ」

Copyright@2026 D³S

古屋「案外　大谷がいなくても、君とはこうなってたかもしれないよ」

亀山「また、またぁ。
大谷君が居なかったら、私たんなる意地悪ババァでいたかもね」

古屋「そうかもな」

亀山「ちょっと、そこは、否定しなくちゃいけないところでしょ」

古屋「悪い悪い」

亀山「こんなに古屋さんと、冗談が言える仲になれたんですもの。
半年前では考えられなかったことだわ。やっぱり大谷君に感謝しなきゃね」

〇駅の改札
古屋と亀山が話をしている、

古屋「今度、食事でもどうかい？
もちろん、二人だけで、だけど」

亀山「いいわ。楽しみにしてる」

Copyright@2026 D'S

亀山

▽亀山、改札を通りホームへ行く

○亀山家の玄関

▽亀山、玄関のドアを開けて家に入ってくる

「ただいま」

亀山　母

▽亀山　母、玄関にやってくる

「お帰り。遅かったわね。晩御飯は大丈夫なの」

亀山

▽亀山、玄関で靴を脱ぐ

「ええ、食べてきちゃったわ」

亀山　母

「会社の人と？」

亀山

「そうよ」

Copyright@2026 D³S

亀山
亀山　母
亀山
亀山　母
亀山
亀山　母
亀山
亀山　母
亀山　妹

○亀山家、リビング
「ごめんなさい。急だったから」
▽亀山、ソファに腰掛ける
「最近　帰りが遅いけど、もしかして、いい人でもいるの？」
「そんなのじゃないわ。今年入った新人の面倒をみているのよ」
「ちょっと、新人で男じゃないでしょうね」
「男の子よ。今年　大学出たばっかりよ」
「ちょっと、そんな若い子とは止めてよね」
「大丈夫よ。本当に仕事教えてるだけだから」
「お母さん、あなたを信じるけわ」
「なになに、お姉ちゃん、彼氏できたの？」

Copyright©2026 D³S

亀山　「だから、ちがうって」

○（翌日の朝）会社の給湯室

▽亀山　林　松本、井戸端会議中

松本　「亀山さん、なんかうれしそうですよ」

亀山　「え？　そう」

松本　「ほんと、ほんと、なんか、良いことありました？　林さんも、そう見えるでしょう」

林　「そうね。楽しそうですね」

亀山　「そんなの、無い無い」

松本　「そうそう、大谷君、今日も休んでますね」

亀山　「そうね、早く元気になってくれるといいんだけど。そうそう、今日、一緒にお見舞い行かない？」

Copyright©2026 D³S

松本
亀山
松本
林
亀山
松本
亀山

▽林　松本、不思議そうに顔を見合わす

「大谷君のところですか？」

「そうよ」

「いやぁ。その男の人のアパートに行くってのは、抵抗が」

「私も、ちょっと、止めておきます」

「しょうがないわね。私一人で行くとするか」

「亀山さん、一人で行くんですか？」

「そうよ。昨日も行ってきたんだから」

○その日の帰りも、亀山は夕食を作りに、大谷のアパートに向かった。

Copyright©2026 D³S

「X接点」（第七話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル　～大谷の恋人候補～

あらすじ

大谷に彼女をつくろうと、古屋　亀山は相談します。
そして、彼女候補に挙がったのは、なんと　大学生の亀山の妹でした

Copyright@2026 D³S

□第一幕　大谷に恋人をつくろう

〇（夕方）会社のビルの前

大谷の熱はすっかり下がり、会社に出勤していた。

▽大谷　出張先から帰り

「就業時間とっくに過ぎちゃった
古屋さん　もう帰ちゃったかな」

〇会社の1階ロビー

▽古屋　会社のロビーの柱に立っている

▽大谷　古屋を遠くでみつける

大谷　「古屋さんだ！」

▽大谷　古屋に近づこうとする

▽亀山　古屋の前に現れる

Copyright@2026 D³S

亀山　「待たせてごめんなさい」

古屋　「俺も今来たところだから。いこうか」

亀山　「はい」

▽古屋、亀山　歩き出す

▽古屋　亀山　大谷に気づく

亀山　「あら、大谷君、今出張からの帰り。おつかれさま」

古屋　「よ、おつかれ」

大谷　「お疲れ様です」

古屋　「じゃ、また明日な」

▽古屋　亀山、会社から出て行く

▽大谷、出て行くところをみてる。

Copyright@2026 D³S

亀山
古屋
亀山
古屋
亀山
古屋
亀山
古屋
亀山
古屋

○レストランの中
古屋、亀山がテーブルについて食事をしている
「古屋さんから、食事に誘ってくれるなんて嬉しいわ」
「この前の約束だからね」
「別にいいのよ。大谷君は、私たちの子供みたいなものものだもの」
「おいおい、いつから、俺にあんな大きな子供ができたんだい？」
「古屋さんって、今、気になる人ってるの？」
「実は、正直に言うと、いるよ」
「そうよね」
「おいおい、君もよく知ってる子だよ」
「私の知っている子？」
「そう。毎週、毎週押しかけてくる子さ」

Copyright@2026 D's

亀山　「なぁんだ。大谷君じゃない」

古屋　「最近は、小姑気取りだからな」

亀山　「それは大変だわ。私にとっても強敵ね」

古屋　「しかし、このままじゃ、いけないと思うんだよな」

亀山　「そうよね。いつまでも、古屋さんべったりじゃ困るわよね。なんとかしてあげないと」

古屋　「さすがに、このまま年を取ってしまうい、爺同士でキモイお付き合いてのは、想像　できないもんな」

亀山　「あら？　いいじゃない。きっと、いいカップルになるわよ」

古屋　「おいおい」

亀山　「ふふふ。大谷君って、女性に恋したことないのかしら？」

Copyright©2026 D³S

古屋「本人は、無いって言ってるけど、本当っぽいな」

亀山「今のご時世、大谷君のような子って、需要高そうなんだけどな」

古屋「草食系って意味かい？」

亀山「そう」

古屋「草食系って・・・それって、本当に恋してるのかな？って時々思うよ。単に、女の子にとって、都合のいい男ってことじゃないのかな？」

亀山「そうね。私たちの息子を、そんな女の子と付き合わせるなんて、やっぱ駄目ね」

古屋「誰かいい人知らないかい？」

亀山「う～ん？　うちの課には、松本と林がいるけど」

古屋「そうだな、できたら、会社の人じゃないほうがいいな」

亀山「ちょっと、当たってみるわ」

古屋「頼むよ。俺のためにも」

Copyright@2026 D³S

古屋

「いいわよ。でも高くつくわよ。こんなところの食事ですまさないから」

Copyright@2026 D'S

□第二幕　妹　登場

○（その日の夜）亀山家のビング

▽亀山、風呂上がりにソファーで髪を乾かしていた。
　目の前では、妹の千里（ちさと）が座って、テレビを見ている

亀山「ちょっと、あんたの友達で、彼氏募集してる子いない？」

千里「アネキ、何よ？　突然」

亀山「うちの会社に、良い子いるんだけどなぁ～紹介しようかと思って？」
　以前から〝会社には、ろくな男がない〟が口癖の姉だったので、

千里「姉貴の会社の人って、ロクなの居ないっじゃなかったけ？」。

亀山「それが、そうでも、ないのよね。今年の新人は」

千里「え？　どんな子？　写真ある？」

亀山「ちょっと待ってね」

Copyright@2026 D³S

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

▽亀山、スマートフォンを取り出し、画像を妹に見せる

「ほら、この子よ」

▽千里、亀山のスマートフォンを取り画像を見つめる

「え！　カワイイ～。いくつ？　いくつ？」

「確か、今年入社だから二十二ってとこね。あんたの一つ上よ」

「へぇ　ちょっと頼りないかも？　でも、この顔だと、許せるかな？」

「何、言ってるの？　あんた意見なんて聞いてないわよ」

「なんで？　私じゃだめ？」

「え？　あんたが？そんなことより、卒業できるの。就職先だって、まだなんでしょ」

「卒業は余裕よ。姉貴はいいよな。大企業のＯＬになれて求人みてるけど、ぜんぜんいいとこないのよね」

Copyright©2026 D³S

亀山　「選り好みし過ぎよ」

千里　「今は、売り手市場なの。妥協はできないわよ
それに、この子、姉貴の会社ってことは、将来安定だし
そのまま、御世話になるってのもありね」

亀山　「なに言ってる。一回は、社会に出て世間をしっておくべきよ」

千里　「はいはい。じゃ、私で決まね」

亀山　「いや、あんたが、よくても、こっちがね」

▽千里、亀山のスマートフォンを操作している、

千里　「ねぇ、この人誰？」

▽千里、スマーフォンにあった、古屋の画像を亀山にみせる

亀山　「え？　それは・・・」

千里　「この人の画像、結構あるよ。さては・・・」

Copyright©2026 D³S

亀山　「いいから、返しなさい」

▽千里、亀山にスマートフォンを取られないとうにかわす

千里　「ね、ね、お母さんには秘密にするから、この子、紹介して」

亀山　「わかったわ、だから返して」

千里　「よっし」

▽千里　スマートフォンを亀山に返す

亀山　「まぁ。いいわ。失敗しても、あんたには責任感じなくて済むし」

千里　「なによ。責任って。私だって大丈夫よ」

〇（翌週の日曜日の朝）駅前　待ち合わせ場所

▽古屋、大谷　待っている

大谷　「今日は、どこに行くんですか？」

Copyright@2026 D³S

古屋　「いつもの遊園地でいいんじゃないか？」

大谷　「遊園地じゃないですって、テーマパークですよ」

古屋　「どうっちでも　いいじゃないか」

大谷　「いえ、遊園地は、子供がいくところです」

古屋　「子供だろ」

大谷　「亀山さん、遅いですね」

古屋　「あぁ、女ってのは、出かけに時間かかるからな」

亀山　「ごめん、ごめん、遅くなって。
この子が、なかなか服決めないから」

亀山の後ろに見たことのない女の子

千里　「お姉ちゃんが、厚化粧してるからじゃん」

亀山　「私のせいっていうの、もう、何いってんのよ」

Copyright@2026 D³S

古屋　「あのぉ～もしもし」

▽古屋　割って入る

亀山　「ごめんなさい。紹介するわ、妹の千里（ちさと）です」

千里　「こんにちは。千里です。今日は、よろしくお願いします」

亀山　「こちらは、会社の先輩の古屋さんで、こっちは、大谷君ね」

古屋　「古屋です。よろしく」

大谷　「大谷です」

古屋　「亀山さんの妹なのに、ぜんぜんカワイイじゃん」

亀山　「ちょっと古屋さん、今のはどういう意味？
あとで、じっくり説明を聞くわね」

古屋　「冗談冗談。そしたら、行こうか」

Copyright@2026 D³S

大谷
古屋
大谷
亀山
古屋
千里

〇電車の中
　ロングシートで　古屋と大谷、向かい側に　亀山と千里が座る

大谷　古屋の耳元に顔を近づける

「亀山さん、どうして妹を連れてきたんですかね」

「単なる、人数合わせだろ？　いつも、男人に女人だとな」。

「そうなんですか」

「なに？　人で話してるの？」

「こいつが、千里さんカワイイですね。って」

「ありがとう。大谷君も、カッコイイよ」

大谷　照れてうつむく

〇ユニバーサル・ランド

　それでも、遊園地に入ってしまうと千里の事も気にならず、

Copyright@2026 D's

むしろ、年齢が近い分、アトラクションなどの意見も合い、意気投合しつつあった

○テーマパーク内の休憩所

▽三人はパラソル付きテーブルの下で休憩していた。

千里「大谷君って、遊園地大好きなんだ」

大谷「うん。そうだね。ここだけ日常の生活と違うからね。会社のことを唯一忘れることができる場所かな」

千里「ははは、すごく大切な場所なんだ」

大谷「うん」

千里「ねぇねぇ。大谷君、次は何乗ろうか？」

亀山「え～っ、私は疲れたから、あんたたちだけで乗ってきてちょうだい」

大谷「古屋さんはどうしますか？」

Copyright©2026 D³S

古屋　「そうだな、このご老体の介護でしなくちゃいけないから、俺も遠慮しとくよ」

千里　「もう、年寄りはほっておいて、私たちだけで行きましょう」

千里　立ち上げり、大谷に手を出す
女の子と手をつなぐなんて、小学校の運動会でフォークダンス以来の
大谷。少し、戸惑いながらも手を出し繋ぐ

千里　「私、もう一回　あれに乗りたい」

大谷　「じゃ、もう一回、あれ乗りに行きますか？」

亀山と古屋　２人の後ろ姿を見る

亀山　「二人、うまくいくと良いわね」

Copyright©2020 D³S

□第三幕　昭博との再開

〇（ある日の土曜日）街のどこかの待ち合わせ場所

▽大谷と千里が　誰かを待っている

大谷　「今日は、千里さんの友達と会うんだったよね」

千里　「そうよ、私の親友なの。最近、かっこいい彼氏ができたから、お互い見せっこしようってことになったの」

大谷　「え？　僕、彼氏になったの」

千里　「まぁ、そういうことかな」

（大谷）（千里さんの友達って、どんなんだろう・・・）

香　「ごめん、ごめん、待ったぁ～」

▽駆け寄ってくるカップル

千里　「香、待ったわよぉ」

Copyright@2026 D³S

香　「ごめん、彼と寝坊しちゃっ・・・」

千里　「彼と？　ってもしかして、もう？」

香　「あたりまえじゃん、付き合ってるんだから」

Copyright@2026 D's

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　鈴木の部屋での出来事

○鈴木のマンションの部屋

▽大谷　丸尾に陰茎を扱かれている

大谷　「どうして、こんなことをするんだい？」

昭博　「すいません。バイクで事故って、女の人ケガさせて、手術にお金がいるんです」

大谷　「でも、どうして？」

昭博　「すぐに大金が欲しかったんです。
すきまバイトを探していたら、
オークションで、アレを、一ＣＣ　一万円で買いますって」

大谷　「でも、よりによって、そんなバイトを・・」

昭博　「入院に、お金が必要なんです。しかたないんです。

Copyright@2026 D³S

大谷　すいません。許してください」。

丸尾　「わかった。協力するよ」

大谷　「はい」

（＃フラッシュバック＃）

→＃　現在に戻る　＃→

千里　「二人ともどうしたの？」

香　「もしかして、イケメンネットの知り合いだったとか？」

千里　「香、そんなのあるの？」

香　「言ってみただけ～」

昭博　「え？　初めて。ちょっと似た人と知ってるから」

大谷　「僕も、偶然ですよね」

Copyright@2026 D³S

香

千里

香

香

香

千里

香

千里

▽大谷　丸尾　顔を見合わせる

「あれれ？　二人ともいつの間にか、仲良しじゃん」

「ねぇ、そんなことより、彼を紹介してよね」

「丸尾昭博（まるお　昭博）君。まだ、大学生の歳よ」

「大学生なの？　しかも年下だしぃ」

「若いっていいわよぉ。いろんな意味でね」

「私？　大谷博紀（おおたに　ひろき）君、姉と同じ会社に勤めてるの」

「お姉さんって、たしか？　P＆H商事でしょ。すっごい、一流企業じゃん」

「ま、ね」

▽四人　食事をする

▽香　席を立つ

Copyright©2026 D³S

香　「私、化粧なおしてくるね」

千里　「じゃ、私も」

▽千里、香　女性　パウダールームへ向かう

▽大谷　丸尾　顔を見合わせる

大谷　「驚いた、こんなところで会うなんて」

丸尾　「そうですね。僕もびっくりしましたよ。でも彼女らに気づかれずにすんでよかったですよ」

大谷　「そうだね。ところで、事故の方はどうなったの？」

昭博　「おかげさまで、示談済んで事故の件は無事に解決しました」

大谷　「よかった。もう会うこともないと思っていたけど、気になってたんだよ」

昭博　「本当にあの時はありがとうございました。男として、最低のことをして、すいませんでした」

Copyright@2026 D³S

大谷　「いや、いいんだ。それで、誰かが助かるなら」
このまま、彼女たちには初対面ってことにしておこうか？」

昭博　「そうですよね。僕もそれがいいと思います」

▽千郷　香　席にもどってくる

香　「そうそう、昭博たら、少し前、、バイクで事故して大変だったんだから」

千里　「バイクで？　ケガは無かったの？」

香　「昭博は大丈夫だったんだけど、相手にケガをさせて、
お金が要るようになったのよ。
私もそんなに貯金があるわけでないし、どうしようかと思ってたら、
昭博、なんとかバイトして稼いできてなんとかなったのよ」

千里　「今時、そんな割のいいバイトってあったの？」

香　「そうなの。いくら聞いても教えてくれないのよね。昭博」

昭博　「え？　だって、バイトの話なんてつまらないよ」

Copyright@2026 D's

香　「ほらぁ、言えない」

千里　「香ったら、昭博君、男前だから、ホストでもしたんでしょ？」

昭博　「千里さんまで、そんなバイトじゃありませんよ」

大谷　「少しくらい秘密があってもいいじゃん。それに昭博君は、
そんな人に見えないよ」

香　「あぁ～男同士だと、かばうんだから。まぁ、終わったことだしいいわ」

〇レストランからの帰り道

▽大谷　千里　駅に向かって歩いている

千里　「今日は、楽しかったわ」

大谷　「そうだね。香さん、よくしゃべってくれるし、話がおもしろかったよ」

千里　「香ったら、昔から、あぁなのよ。昭博君もいい子でよかったわ」

大谷　「そうだね。ずっと続くといいね」

Copyright@2026 D³S

千里　「でもね、私、昭博君のこと、少し気になった」

大谷　「どうして？」

千里　「ずっと、大谷君のこと見てたもん」

大谷　「僕を？」

千里　「そうよ。会ったときから、ずっと、見てたわ」

大谷　「なんでだろう？」

千里　「ふたりとも男前だから、危険だわ」

大谷　「危険って・・・」

千里　「冗談よ、冗談。だって、二人ともカワイイんだもん。焼いちゃうわよ」

大谷　「ははは、そうだね、昭博くんに、誘われたら、断れないかも」

千里　「もう、冗談でも止めてよ。絶対、誘われてもだめよ」

Copyright@2026 D's

大谷

「はい。誓います」

Copyright@2026 D³S

□第四幕　昭博に誘われて

〇（翌日の日曜日　昼）古屋の家

▽大谷、ソファーに座りテレビを見ている

▽古屋、シャワー浴びて上半身裸でボクサーブリーフ姿でタオルで頭を乾かしている

▽大谷、テレビを見ている振りをしながらも古屋の身体を見ている

▽古屋、大谷に話しかける

古屋　「今日は千里ちゃんとデートはしないのか？」

大谷　「昨日、ちゃんとデートしましたよ」

古屋　「昨日したから、いいってもんじゃないぞ」

大谷　「今日は、亀山さんと買い物だそうですよ」

古屋　「そっか。それならいいか」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そういう古屋さんこそ、亀山さんとどうなんですか」

古屋　「何を言ってんだ、俺と彼女は、そんな関係じゃないぜ」

大谷　「へぇ　どうだか」

古屋　「おいおい、疑ってるのか」

▽大谷、スマートフォンが鳴ったので画面を見る

昭博からの着信

大谷　「ちょっと、電話出ます」

▽古屋、手で合図し、洗面台の方へ行く

▽大谷、スマートフォンで着信ボタンを押す

昭博　「大谷さんですか？」

大谷　「うん、そうだよ」

Copyright@2026 D's

昭博　「丸尾です。昭博です」

大谷　「うん、電話帳に登録してたから、わかってるよ。どうしたんだい？」

昭博　「今、電話だいじょうぶですか？」

大谷　「うん、大丈夫」

▽大谷、会話している

▽古屋、リビングに戻ってくる

▽大谷、電話を終わる

古屋　「誰から？」

▽大谷、古屋の顔を見る

大谷　「千里さんの友達の彼氏です。
今度の土曜日、また四人で晩ご飯どうですか？　って」

古屋　「いいじゃないか。若者もの同士で。行ってこいよ」

Copyright@2026 D³S

大谷

「はい、そうします」

Copyright@2026 D³S

□第五幕　四人でデート？？？

○（土曜日の夜）繁華街の居酒屋
　大谷、千里、香、昭博　居酒屋で座敷に座っている
　大谷と千里、昭博と香が、並んで座っている

▽四人、おしぼりで手を拭いている

▽香、横の昭博の顔を見る

香「ね、ね、昭博　今日はなんの集まりなの」

▽昭博、みんなの顔を見る

昭博「せっかく知り合えただから、もっと親睦を深めようと思ったんだよ」

香「みんな、ごめんね。忙しいのに呼び出しちゃって」

千里「いいわよ。私たちも大勢の方が楽しいんだから」

▽店員、ジョッキを運んで来る

Copyright©2026 D³S

（一同）

香　▽四人、ジョッキを持ち上げる

千里　「乾杯！」

（食事を楽しむ）

▽香、千里の顔を見る

「ねね、千里と大谷君は、どこまで行ったの？」

「どこまでと言ってもねぇ。大谷君」

▽千里、大谷の顔を見る

大谷　「香さん。僕たちは、真面目なんです」

香　「いやだ、大谷君　まじめって」

昭博　「こら、香、そんな事　聞く方がおかしいぞ」

香　「ごめん」

Copyright@2026 D³S

千里　▽香、千里にウィンクをする

大谷　「ははは、いいの　いいの　私たちは、真面目だから　まだなのよね、大谷君」

「はい　そうです」

（数時間後）

〇（深夜）カラオケ店の前

大谷、千里、香、昭博が立って話をしている

▽昭博、スマートフォンの時計を見る

香　「結局　終電行っちゃったね。どうする」

千里　「どうしようっか」

昭博　「もう一回、入って　朝まで、ここで歌っちゃう」

香　「だめよ。昨日も言ったでしょ。明日、お母さんが家にくるの。掃除しとかなくちゃ。」

Copyright©2026 D³S

昭博　「別に、ゴミくらいいいじゃないか」

香　「今朝、あんたの出したものが、ゴミ箱に入ってるの。
そんなの見られたら大変だもの」

昭博　「それを出してくれたのは、香じゃないか」

千里　「もう、内輪もめはやめて。ちょっと姉貴に連絡してみるから」

▽千里、亀山に電話をかける

千里　「もしもし・・・・・」

＃亀山、電話で話をしている＃

▽千里、電話を終わる

千里　「香、私の家までタクシーで行きましょう。そこから姉貴が、
香のマンションまで車で送ってくれるって」

香　「ラッキー」

Copyright@2026 D's

香　▽香、昭博の顔を見る

昭博　「でも　昭博達はどうする？」

「そっか、じゃ、僕もタクシーで帰るよ。ここからだと、僕の家が一番近そうだし」

▽昭博、大谷の顔を見る

昭博　「大谷さんは、俺の家に泊まっていけばいいじゃないですか」

大谷　「え？　僕かい？いいよ。僕も家までタクシーで帰るよ」

昭博　「ここから大谷さんの家だと、結構　高くなりますよ」

大谷　「そうだけど」

昭博　「誰もいないし、ゆっくり寝て、帰った方がいいですよ」

香　「そうよ。大谷さん、昭博のところ泊めてもらいなよ」

大谷　「どうしようかな」

Copyright@2026 D³S

昭博　「明日は、なにか用事でもあったんですか」

大谷　「別に　何もないんだけど」

昭博　「じゃ、決まり」

大谷　「じゃ、そうしようかな」

▽昭博、道に出て手を上げる

＃タクシーが一台止まる＃

昭博　「ほら、女性陣は乗った乗った」

▽千里　香、タクシーに乗り込む

香　「じゃ、またね」

昭博　「ちゃゃんと家に着いたら、メール遅れよ」

香　「うん」

Copyright@2026 D's

千里　「大谷君またね」

大谷　「うん。気をつけて。亀山さんにもよろしく」

▽千里　香、載せたタクシーが出発

昭博　「僕らも帰りましょう」

大谷　「そうだね」

▽昭博、手を上げて、タクシーを停める

▽昭博　大谷、タクシーに乗る

＃タクシー　出発する＃

Copyright@2026 D³S

昭博
大谷

□第六幕　昭博のマンションにて

○（三十分後）昭博の住んでいるマンションのドアの前

▽昭博、扉を開ける

▽昭博、明かりを点ける
　廊下が明かりに照らされる

「さぁ、入ってください」

「おじゃまします」

▽大谷、玄関で靴を脱ぐ

▽大谷、廊下を歩く

▽昭博、扉を閉め廊下を歩く

▽大谷、少し奥にすすみ部屋に入る
　昭博の部屋
　ワンルームマンションで、部屋は広くないが、新築のため綺麗だ

Copyright@2026 D³S

部屋の真ん中に、小さな一人用のローテーブル
奥に　広めのベッドが置いてある

大谷　「綺麗な部屋だね」

昭博　「狭くて　すいませｎ」

大谷　「そんなことないよ。僕の部屋だって同じだよ」

昭博　「楽にしてくださいね。今、飲み物入れますから」

▽大谷、ガラステーブルの前に座る

大谷　「結構　飲んじゃったから　構わないでよ」

昭博　「じゃ、水にしますね」

大谷　「うんうん。それでいいよ」

（二人　しばらく会話）

（数時間後）

Copyright@2026 D's

昭博　「そろそろ寝ますか？」

大谷　「そうだね」

昭博　「寝る前にシャワー浴びてください」

大谷　「僕は　後でいいから、昭博くん、先にどうぞ」

昭博　「いえ、お客様が先ですって」

大谷　「そうかい。じゃ、先にシャワーを借りるよ」

▽大谷、立ち上がる

▽昭博、立ち上がりタンスからバスタオルとタオルを大谷に渡す

昭博　「シャワーは、玄関の横です」

大谷　「ありがとう」

昭博　「うち、ユニットバスなんで、ここで服を脱いでいった方がいいですよ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そうなの」

昭博　「中では服脱げないですから」

▽大谷、上着を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、パンツ姿になる

▽昭博、大谷の身体を見る

昭博　「大谷さんって、いつみてもカッコいいです」

大谷　「ありがとう。でも僕は、昭博君のように、もう少し身長が欲しかったな。」

昭博　「こんな綺麗な体の人に抱かれるなんて、千里さんが羨ましい」

大谷　「そんなことないって」

▽大谷、廊下を通り玄関横のユニットバスの扉を開ける

○昭博のマンションの浴槽は、ユニットバスになっており　トイレと浴槽が一体となっているタイプ

Copyright@2026 D³S

大谷　▽大谷、バスルームの扉の前で昭博に声をかける

「じゃ」

昭博　「どうそ。ごっゆくり」

▽大谷、ユニットバスの扉を閉める

▽大谷、パンツを脱ぎ、トイレの蓋の上におく

▽大谷、浴槽に入り、シャワーカーテンを引く

▽大谷、シャワーの湯を出し、体に浴びせる

▽大谷、石鹸で体を洗い出す

○ユニットバスの扉が開く

▽大谷、シャワーと停める

＃カーテン越しから、昭博の声＃

Copyright©2026 D³S

昭博　「すいません。お湯がもったいないので、一緒にいいですか」

大谷　「そうだね。どうぞ」

▽大谷　シャワーカーテンを開ける
　　全裸の昭博がたっている

昭博　「すいません」

▽大谷、少し動いて、昭博の場所をつくる

▽昭博、浴槽に入る

昭博　「さずがに、二人は狭いですね」

大谷　「大丈夫、大丈夫。僕は小さいから」

▽昭博、大谷の下から上にかけて見る

大谷　「どうしたの？」

Copyright©2026 D'S

昭博「大谷さんて、ずるいですよね」

大谷「なにが」

昭博「顔もいいし、体もいい」

大谷「そんなことないって。昭博君の方が、ずっとかっこいいよ」

昭博「大谷さんに　そういってもらえるとうれしいな」

▽昭博、シャワーヘッドを取り、湯を出す。
　手で、温度を確認し、シャワーの湯を大谷の股間にあてる

昭博「前の時も気になったんですが、大谷さんって、どうして　下の毛を剃ってるんですか」

大谷「中学から陸上やってたから、その時からずっとかな」

昭博「そうなんですね」

大谷「陸上のパンツって、短いでしょ。さすがに毛が見えるのはまずいからね」

Copyright©2026 D³S

昭博　「なるほど。納得しました」

大谷　「そんなことで納得してもらえるなんて思ってもなかったよ」

昭博　「僕も、剃ってみようかな」

大谷　「剃る必要はないと思うけどな」

昭博　「結構、友だちでも剃ってるって人、多いんですよね」

大谷　「そうなんだ」

昭博　「剃ってる方が清潔って言う女子が多いらしいですよ」

大谷　「そうなんだ」

昭博　「ちょっと触っていいですか」

大谷　「いいけど」

▽昭博、片手で大谷の陰茎を持ち上げ、もう片方の手で、睾丸をさわる

Copyright@2026 D³S

昭博　「ツルツルだ」

大谷　「もともと体毛が薄いからね」

▽昭博、を離す

大谷　「シャワー貸してくれる」

昭博　「あ、俺が洗います」

大谷　「悪いよ」

昭博　「遠慮しないでください。後ろ向いて」

▽大谷、昭博を背に後ろに向く

▽昭博、ボディソープを手に出し、大谷の背中をこする

昭博　「はい、次は、前を向いてください」

▽大谷、前を向く

Copyright@2026 D³S

▽昭博、ボディーソープを手に出す

▽昭博、大谷の胸、腹を洗い出す

昭博　「大谷さんの腹筋で、めっちゃかっこいいですよね。俺なんか腹筋ないし」

大谷　「陸上部って、体脂肪が無い分、腹筋が目立つだけだよ」

昭博　「そうなんですか」

▽昭博、ボディソープを手に出す

昭博　「ここも綺麗にしますね」

▽昭博、大谷の陰茎を両手でつつみ、洗う

大谷　「そこは　いいよ」

昭博　「だめですよ。ここはちゃんと洗わないと」

▽昭博、時々指先を大谷の肛門まで届かせる

Copyright@2026 D³S

大谷　「いや、そこは」

昭博　「大丈夫ですって。それとも、ここもですか」

▽昭博、片手で大谷の乳首を刺激する

大谷　「本当に　止めてくれない」

昭博　「あれ、大谷さん、大きくなってる」

大谷　「そりゃ、昭博君がそんなことするから」

昭博　「ねね。このまま扱いたら、また出ますかね」

大谷　「そりゃ」

昭博　「じゃ、出してください」

大谷　「いや、無理でしょ」

昭博　「そうですが」

Copyright©2026 D³S

▽昭博、立ち上がり　大谷の体を反対に向ける

▽昭博、大谷の後ろから抱きつき、大谷の頬にキスをする

大谷「だ・だ・だめだよ。こんなことをしちゃ」

昭博「だめって言っても、ほら、こんなになってきてる」

▽昭博、片手で大谷の陰茎を扱いている

大谷「なんで、こんなことするの」

昭博「俺、実は、あの時の大谷さんのことが忘れられない。あの時の切ない顔、もう一度見せてくださいよ」

大谷「だめだったら、あっ」

▽大谷、足がガックとなる

昭博「いつまで、我慢できますか」

大谷「あっ、あ、あ、い」

Copyright@2026 D³S

昭博　「感じてきてますやん」

大谷　「あ、だめ、もう、い、いく」

▽大谷、足が　がくつく

大谷　「あ、あ、あ、あ、あ、い、い、いくう」

▽大谷、膝が曲がり、腰を引く

（数秒後）

＃浴槽に大谷の精液が落ちる＃

▽昭博、大谷の陰茎を絞る

昭博　「ほら、出た」

▽大谷、腹が大きくうごいている

昭博　「かっこよかったですよ」

Copyright@2026 D³S

大谷　▽昭博、大谷を強く抱きしめる

「これで、満足したかい」

▽大谷、シャワーを浴び、バスルームから出ていく

▽大谷、服に着替える

昭博　「大谷さん　どうしたんですか」

大谷　「僕、やっぱり帰るよ」

▽大谷、昭博のマンションの扉を開けて出て行く

〇（深夜）タクシーの中

▽大谷、タクシーに乗っている

（大谷）　（昭博はどうしてあんなことをするんだろう。僕も、古屋さんに、同じことしてる。古屋さん　どう思ってるんだろう）

Copyright@2026 D³S

□第七幕　～微妙な距離の人～

○（ある日の夜）レストラン

▽古屋　亀山　食事をしている

古屋　「千里ちゃんと大谷は上手くやってるのかな？」

亀山　「さぁ？　あんまり話は聞かない事にしているけど、休みの日は会って食事したりはしてるみたいよ」

古屋　「そっか。ならいいんだ」

亀山　「どうかしたの？」

古屋　「最近、大谷がオレのこと避けてるようなんだよな」

亀山　「うそぉ？　大谷君が？　古屋さんを？」

古屋　「俺が話しかけても、そっけないんだよな。休みの日も来なくなったし」

亀山　「へぇ～いいことじゃない」

Copyright@2026 D³S

古屋　「そうだよな」

亀山　「なんか大谷君よりも、古屋さんの方が心配だわ」

古屋　「え？　俺かい？」

亀山　「そうよ。まるで大谷君が離れていくことを、淋しがってるわよ」

古屋　「そんなんじゃないけど、やっぱり様子が変なんだよな」

亀山　「ねぇ、古屋さんも、大谷くんのことばかり考えてなくて、
少しは私のことも考えてよね」

古屋　「え？」

○（その日の夜）亀山家　千里の部屋
千里はベットに寝転び、スマートフォンをいじっている

▽亀山、千里の部屋のドアを叩く

亀山　「千里、私　入るわよ」

Copyright@2026 D³S

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

○千里の部屋

▽亀山、千里の部屋に入る

「お姉ちゃん、どうしたの」

▽亀山、ベッドに座る

「最近、大谷君とはどうなのかな って思って」

「順調にやってるわよ」

「順調ならいいんだけど」

「でもね。彼って草食系なのかしら、まだなのよね」

「まだって？」

「あれよ、あれ。鈍いなぁ。
もう、付き合って何ヶ月も経つんだし、そろそろなんだけどな」

Copyright@2026 D³S

亀山　「そうなの。でも、大谷君らしいわ。とっても真面目でいい子なのよ」

千里　「ところで、彼がどうかしたの？」

亀山　「最近ちょっと会社で元気なさそうだから・・・」

千里　「あぁ、それね。なんか、最近オンラインゲームに沼って寝てないんだって。だから、昼間はずっと眠いらしいよ。まだまだ、ガキだよね」

亀山　「ゲーム？」

千里　「そう。遅くまで、オンラインゲームをしてるんだって」

亀山　「ゲームか」

千里　「せめてデートの前の日くらいは、ゲームを止めてほしいわよね」

亀山　「そうね。会社でも眠そうなんだし、今度言っておくわ。じゃ、おやすみ」

▽亀山、千里の部屋から出て行く

Copyright@2026 D³S

（大谷）

〇（夜）大谷の部屋

▽大谷　部屋で座り込んでいる
　部屋の明かりは点けてない、
　頭にはヘッドホンをし、大きな音がそこから、漏れている

（古屋さん・・・
僕は、なんてことをしてたんだろう・・・
きっと、気持ち悪かったんだろうな・・・
　僕が、可哀想だから、我慢してたんだろうな・・・
いや、違う、古屋さんの優しさは本当だから・・・
でも、やっぱり、僕が古屋さんにしてたことは、変だよな・・・
僕は、昭博君と同罪なんだ・・・）

〇大谷のスマートフォンが光る

▽大谷、スマートフォンを取り上げ　画面を見る

＃千里からの連絡＃
　〝明日、会える？〟

▽大谷、〝いいよ。〟と　返信をする

Copyright©2026 D³S

大谷
千里
大谷
千里
大谷
千里
大谷
千里

□第八幕　千里とのデート

〇（翌日の昼）街中
　大谷　千里　歩いている

「今日は何しょうか？」

「そうねぇ、プールが行きたいわ」

「プールって？　もう秋だよ」

「大丈夫、ホテルの温水プールならやってるよ」

「でも水着も持ってないし」

「貸してくれるわよ。
それとも、姉貴らとはプール行って私とじゃ嫌なの？」

「そんなことないけど」

「じゃ、行こうよ」

Copyright@2026 D³S

フロント係
千里
フロント係
千里
大谷
千里

○ホテルのプールのフロント
結局、大谷は千里に言い切られ、ホテルの温水プールに行くことにした。
フロントで受付を済ませ、プールのある階にやってきた。

「お二人様ですね」

「はいそうです。水着もレンタルね」

「かしこまりました」

○プールのフロント　レンタル水着を飾ってある場所

▽大谷　千里、水着を探している

「さすが一流ホテル。水着もブランド物を揃えてるわ」

「僕は、これにするよ」

▽大谷、裾の長めのオーソドックスなサーフパンツを選んだ

「そんなの　ダメよ！　私が選んであげるから」

Copyright©2026 D's

▽千里、男性物の水着のかかったハンガーをめくりだす

千里　「これがいいわ」

▽千里、競泳用の水着を選ぶ

大谷　「それは、ちょっとまずくない？」

千里　「なんで？　これがいいって。これにして」

▽千里、大谷に選んだ水着を渡すまたもや、千里に言い切られてしまった。

千里　「私は、これ」

○更衣室の入口

男性用、女性用に分かれている

千里　「じゃ、出たところで待っててね」

大谷　「うん」

▽大谷、男子用更衣室に入る

Copyright©2026 D³S

▽千里、女子用更衣室に入る

（数分後）

○ホテルのプールサイド
　さすがに秋の昼間　誰もいない

▽大谷、バスタオルを羽織り、女子更衣室の出口で待っている

（数分後）

▽千里、出てくる

千里　「おまたせ。どう？」
　紺色のタイトな

▽千里、大谷を見て、ドッキとする
　大谷の裸を初めて見た千里は、バスタオルを羽織っているが、隙間から
　胸の厚さ、腹筋が割れ具合が分かる

大谷　「千里さん、すごく似合ってるよ」

Copyright@2026 D³S

千里　「ありがとう。大谷君もよく見せて」

▽千里、大谷のバスタオルを取る

大谷の均整の取れた、肉体が疲労される

千里　「大谷君、めっちゃカッコイイ。姉から　カッコイイよとは聞いていただけど、想像以上だわ。その水着も　とっても似合ってる」

大谷　「ありがとう。ちょっと恥ずかしいな」

千里　「ぜんぜん大丈夫。すごく似合ってよ。速入ろうよ」

大谷　「ダメダメ、準備運動してからだよ」

千里　「はいはい。そんな所はキッチリしてるんだから」

▽大谷　千里、プールに入る

千里　「ね。競争しよっか」

大谷　「いいよ」

Copyright@2026 D's

千里　「ここから端までよ。負けたら、勝った方の言うことを聞くのよ」

大谷　「じゃ、本気だしちゃうね」

千里　「いいわよ。じゃ、スタート」

▽千里、先に　泳ぎ出す

大谷　「ずるいよ」

▽大谷、泳ぎはじめる

（数秒後）

▽大谷、顔を上げた時　千里がいないことに気づく

▽大谷、泳ぐのを止めて　立ち上がる

大谷　「え？　千里さん、どこ？」

▽大谷、周りを見る

Copyright@2026 D's

大谷　▽大谷、焦り出す

大谷　「千里さん」

　　「千里さん」

千里　▽千里、潜ったまま大谷の背後に近づき、大谷の腰を持ち　水面から出てくる

大谷　「大谷君、捕まえた」

千里　「千里さん」

大谷　「びっくりした」

千里　「心配したよ」

大谷　「さぁ　ゴールまで行って行って」

千里　▽大谷、千里に腰をもたれたまま　プールの端に向かって歩き出す

　　▽千里、足を浮かせ、バタ足をする

Copyright@2026 D³S

千里　「がんばれ」

▽大谷　歩いている

（半分くらいを過ぎたとき）

▽千里、大谷の腰を掴んでいた手を　徐々に大谷の股間の方に動かしていく
　いつの間にか、大谷の股間の上に両手を置いている

大谷　「千里さん・・・」

千里　「え、何」

大谷　「そこは、だめだよ」

千里　「何が」

▽千里、大谷の股間をモミモミする

大谷　「千里さん、ダメだって」

Copyright@2026 D³S

千里　「照れない　照れない　ゴールまで早く早く」

▽大谷、取りあえず、プールの端に向かって歩く

▽千里、大谷の股間を揉み続けている

千里　「大谷君　なんか大きくなってるよ」

大谷　「千里さんが　触るからでしょ」

千里　「このままずっとしていたら、どうなるかな」

大谷　「だめですって」

千里　「何が起こるか知りたいの。それとも、ここじゃない　どこかで　教えてくれる」

大谷　「だから・・・」

（ゴール手前）

▽千里、大谷の穿いている競泳パンツをずらす

大谷の陰茎が飛び出てくる

Copyright©2026 D³S

大谷　「あっ」

▽大谷、飛び出た陰茎を競泳パンツの中にしまう

▽千里、大谷が止まったあいだにプールの端に到着

千里　「やった。私の勝ちね」

大谷　「千里さん　ずるいよ」

千里　「勝ちは勝ちよ」

〇（夜）ホテルを出た道

▽千里、大谷に腕を通し歩いている

千里　「プール楽しかったね」

大谷　「そうだね」

千里　「お腹すいたね。ごはん、どうしようっか」

Copyright@2026 D³S

大谷　「そうだね。近くで何か、食べようか」

千里　「ね。大谷君家で食べない」

大谷　「え」

千里　「コンビニで何か買って、大谷君ちに行くの」

大谷　「ダ、ダメだよ。僕の家なんか」

千里　「家を見てみたいの。ダメ」

大谷　「いや、でも、ダメだって」

千里　「なんで、そんなにダメなの？」

大谷　「僕たち、まだ恋人でもないし、」

千里　「もし、私を一人で帰して、強姦にでも襲われたらどうする？
年頃の妹を一人で帰すなんて、それこそ、姉貴に言い訳できないわよ」

Copyright@2026 D's

大谷　「わかったよ。でも、絶対、なんにも無いからね」

千里　「わかってるって、それに、それって、普通、女が男に言うセリフよ」

千里　「じゃ、行こう行こう」

▽大谷　千里　歩き出した

○コンビニの中

▽千里、買い物もカゴを持ち、食べるものを入れている

○コンビニの生理用品コーナー

千里　「ね。大谷君て、ＸＬサイズでいいよね

▽千里、コンドームの箱を買い物カゴに入れる

大谷　「何買ったの」

千里　「だって、必要じゃん。さぁ、会計して、大谷君ちに行こう」

Copyright©2026 D³S

「X接点」（第八話）

みちたけ

Copyright©2026 D³S

サブタイトル「いつかの河原にて」

あらすじ

千里の関係を維持できなかった大谷
大谷は　古屋に自分の気持ちを正直伝えます
そして、古屋の答えは

Copyright@2026 D³S

□第一幕　許しあった夜

○（夜）飛行場近くの土手
※この土手は、伊丹空港近辺にある、土手を想定しています
古屋　大谷、堤防で座っている

▽古屋、堤防に座り、空を見ている

▽大谷、古屋の横に座り、空を見ている

＃頭上を飛行機が轟音とともに通り過ぎる＃

古屋　「すげぇなぁ、飛行機がこんなに近くに見えるなんて」

▽大谷、古屋の顔を見る

大谷　「今、飛んで行った飛行機、わかりますか？」

▽古屋、大谷の顔を見る

古屋　「え？　飛行機は飛行機だろ」

Copyright©2026 D³S

大谷　「違いますよ。飛行機でも、いろんな種類があるんです」

古屋　「そんなの、わかるわけないよ」

大谷　「ボーイング７８７」

古屋　「お、そういうことか。それなら、ジャンボジェットは知ってるぞ」

大谷　「それは、ボーイング７４７っていうんです」

古屋　「お、聞いたことあるよ」

大谷　「ジャンボジェットにもにも、短距離用のと、国内線用とがあって、種類も沢山あるんです。残念ですけど、この空港では見れなくなりましたけどね」

＃轟音が聞こえてくる＃

▽古屋、空を見上げる

＃再び、飛行機が頭上を横切った＃二

▽古屋、大谷の顔を見る

Copyright@2026 D3S

古屋　「迫力あるなぁ。あ、おれ、今の知ってるぞ。ボーイング７８７だ」

大谷　「ブ・ブー　エアバスＡ３１０です」

古屋　「なんだよ、さっきのと同じじゃないのか？」

大谷　「コックピットがスマートだったでしょ」

古屋　「そんな所見てないよ。だいたい、おまえ、飛行機に詳しいすぎるぞ」

大谷　「小さい頃、よく父に連れられてここに来てたんです。
ずっとずっと、休みの日は一日中。
父がおにぎりを作ってくれて、一日中ここで飛行機を見て、
父にいろいろ教えてもらいました」

古屋　「へぇ～いい親父さんだな」

大谷　「今、思えば単にお金が無かっただけなんですよね。
遊園地とかデパートに買い物なんか行かずに、ここ来れば、
お金なんか使わずに済みましたから」

Copyright@2026 D's

古屋　「そうだな、お金が無くったって、子供にいろいろ教えてあげれて、一日中楽しめさせてくれんなんて、すごい親父さんだよな」

大谷　「そうですね。僕も、そう思います」

＃飛行機が頭上を飛び、辺りが轟音となる＃

▽大谷、大声で叫ぶ

大谷　「千里さんとは、ダメでした。やっぱり、僕、女性とそういうことになると怖くて」

古屋　「そうか」

大谷　「やっぱり僕、古屋さんの事が好きなんだと思います」

古屋　「そうか」

大谷　「古屋さん、僕のこと、なんとも思わないんですか？」

古屋　「どうして？」

Copyright©2026 D's

大谷　「だって、こんな歳にもなって、まだ女性と経験なくて、それどころか、避けようとしているんですよ」

古屋　「別に。地球上には億って人がいるんだぜ。みんなが、同じ考えでだとどうなるんだ。きっと　つまらない世界だよな一人一人違っているから楽しいんじゃないか。別に女性を好きにならないからって変か」

大谷　「じゃ、もし僕が古屋さんにキスしたら？」

古屋　「おまえが、したいっていうなら、すればいいんじゃないか？それも　お前の自由だ。でも、キスをした瞬間、俺が、殴るのも自由だ」

▽大谷、ゆっくりと古屋の顔に近づける

▽古屋、目を閉じる

▽大谷、目を閉じ古屋にキスをする

▽二人、しばらく静止している

Copyright©2020 D³S

▽大谷、目を開け古屋から顔を離す

▽古屋、目を開ける

▽古屋、大谷の顔を見る

古屋　「2回目だな」

大谷　「え」

古屋　「最初、出会った時、俺の部屋でしただろ」

大谷　「知ってたんですか」

古屋　「ああ」

大谷　「どうして、寝たふりしてたんですか」

古屋　「俺も、おまえとこうなることを望んでいたからかも」

Copyright©2026 D³S

古屋　〇（その夜）古屋の部屋

大谷　▽古屋　大谷、パンツ一枚で並んでベッドで寝転んでいる
大谷は古屋の腕枕にされ、腕は古屋の胸の上に置かれている

古屋　「どうした」

大谷　「しあわせだなって」

古屋　「そっか」

▽古屋　腕枕している腕を曲げ　大谷の頭を自分の胸につける

〇（翌朝）会社の事務所　入口

▽古屋　大谷　一緒に入ってくる

亀山　「おはよぉ、お二人さん」

古屋　「おはよう」

大谷　「おはようございます。亀山さん」

Copyright@2026 D³S

亀山　「二人一緒ということは、まだ　古屋さんちに泊まってたんでしょ」

古屋　「ばれたか。夜の空港を見てたら、遅くなって　そのまま」

亀山　「空港なんか行ったの」

古屋　「夜の空港って、すごくライトが綺麗で幻想的なんだぜ」

亀山　「そうなの。私も行ってみたいわ」

古屋　「じゃ、次回は是非」

亀山　「期待しないで待ってるわ」

〇（一週間経過した夜）飛行場の見える土手

▽亀山、飛行場の滑走路のライトを見ている

亀山　「ほんと、すごく綺麗」

〇飛行機が轟音を共に着陸してくる

Copyright@2026 D's

亀山

「すっごい　迫力」

▽古屋　亀山の方に手を添える

〇（翌日の朝）古屋のマンション

▽古屋、パンツ一枚で、ベッドに座っている

▽亀山、ベッドに寝ている

亀山　「なに？　ニヤニヤして」

古屋　「いや、なんでもない」

亀山　「うそぉ。今、笑ってたよ」

古屋　「あ、あ、実は、昼の大谷のことを思い出してさ」

亀山　「もう、二人だけの時には、大谷、大谷って言うの止めてくれない？
あんまり言うと、タンスの中にでも隠れているんじゃないかって、
思っちゃうわよ」

Copyright@2026 D³S

古屋　「ごめん、ごめん。気をつけるよ。
しかし、タンスの中かぁ。あいつなら隠れてても
おかしくないな」

亀山　「ほら、また、出た」

（亀山）　まだ、古屋から〝付き合う〟という言葉を、聞いたことがなかった亀山は、
ときたま不安になる。

（古屋さんは、私のこと、どう思ってるのかしら？
ただの遊び？　ストレス解消？
そんなはずないわ。古屋さんですもの
遊びで、抱いたりはしないはず。
でも、でも、時々、どこを見ているかわからない時がある）

▽亀山、リモコンを使ってテレビを点ける
　クリスマスケーキの予約をＣＭが映る

亀山　「もうすぐクリスマスなんだわ」

古屋　「そっか、クリスマスか？イブの日は、ちょっと豪華に食事でも

Copyright©2026 D³S

亀山　行かないかい？」

古屋　「え？」

亀山　「ごめんごめん。亀山さんなら、すでに先約があるよね」

古屋　「そんなの有るわけ無いじゃない。喜んで行くわ」

亀山　「超豪華ってわけには、いかないけどね」

古屋　「えぇ、人間が食べれるものなら大丈夫」

Copyright©2026 D³S

□第二幕　～寒い季節がやってきた～

〇（夜）新幹線の中　古屋　大谷が座っている席

夜遅く、車両は　古屋、大谷の他は　離れたところにまばらである
大谷と古屋は、新しいプロジェクトの打ち合わせで出張し、
その帰りの新幹線の中の出来事

▽大谷、窓際の席に座り　流れる街の明かりを見ている

▽古屋、スマートフォンをいじっている

大谷　「古屋さんと出張なんて、はじめてですね」

古屋　「そうだな」

大谷　「今度は、泊まりで行きたいな」

古屋　「仕事とプライベートを混同しちゃだめだぞ」

大谷　「はーい」

Copyright@2026 D³S

大谷

古屋

大谷

大谷

▽大谷、立ち上がり車両の中を見る
　大谷　古屋　以外　誰も乗っていない

「僕たち以外、誰も座ってませんよ」

「あぁ、時間も時間だからな。ちょっと眠いわ。着く前に起こしてくれ」

「はぁい。おやすみなさい」

▽古屋、リクライニングを倒し腕を組み目をつぶる

▽大谷、しばらく、窓側に座っている古屋の顔を見ていた

（数分経過）

「退屈だな」

▽大谷、古屋を見る
　古屋　リクライニングを倒し、足を開いた状態なので、
　股間部分がよくわかる

▽大谷、座席の肘掛けを上げる

Copyright@2026 D's

▽大谷、体を倒し、古屋の膝に頭を乗せる

大谷　▽大谷、頬を古屋の股間あたりにつける

「なんか、幸せ」

大谷　▽大谷、体を起こす

「ちょっとだけ」

▽大谷、立ち上がる

▽大谷、車両に誰もいないことを確認する

▽大谷、古屋のズボンの上から、股間を揉む

大谷　「ふふふ。まだ、柔らかい。でも、いつまで　もつかな」

▽大谷、古屋の股間を揉み続ける

古屋　「うっ」

Copyright@2026 D's

大谷　▽古屋、腰が浮く

「古屋さん、かわいい」

古屋　「こら」

大谷　「起きちゃった　残念」

古屋　「そんなに気持ちいいことしたかったのか？」

〇（その日の夜）　古屋の部屋

▽古屋、上半身裸でベットに寝転びテレビを見ている

▽大谷、シャワールームから腰にタオルを巻いて出てくる

大谷　「あ～さっぱりした」

▽大谷、古屋のいるベッドに入る

大谷　「ねぇ、クリスマスは何するの？」

Copyright@2026 D³S

古屋　「何するって？　普通に仕事だけど」

大谷　「クリスマスイブだよね。でもクリスマスは土曜日だよ」

古屋　「そっか、クリスマスは土曜日か」

大谷　「ね、僕ケーキ食べたいな」

古屋　「よし、じゃ、クリスマスは、特別大きなクリスマスケーキを二人で食べよう」

大谷　「やった」

〇（翌日）会社の事務所

古屋　「おはよう」

大谷　「おはようございます。亀山さん」

亀山　「あら？　お二人さん、相変わらず同伴出勤ね」

古屋　「昨日の出張、帰りが遅くなったから、俺の家にそのまま泊めてやったのさ」

Copyright@2026 D's

亀山　「九州ね。遅くまで、ごくろうさまでした」

古屋　「これ、おみやげ」

亀山　「ありがとう。今度、私も何か買ってくるわね」

古屋　「いいよ、気を使わなくても」

（大谷）▽大谷　古屋と亀山の会話を聞いている

（二人、仲がいいな。古屋さんは、僕のことが一番だって言ってくれてるし

〇（退社時刻を過ぎた）会社

▽大谷、帰り支度をしている

（大谷）（今日は、古屋さんと一緒に帰れるか）

〇古屋の席

▽古屋、スマートフォンをいじっている

Copyright@2026 D's

亀山　▽亀山、古屋の席にくる

古屋　「お待たせ」

亀山　「遅いよ。今日の晩飯は、おごりだぜ」

古屋　「いいわよ。付き合ってくれるんですもの」

▽古屋　亀山、大谷の席にそばを通る

古屋　「大谷、おさき」

亀山　「大谷君、お疲れ様」

大谷　「お疲れさまでした」

〇（その日の夜）大谷の部屋

▽大谷、古屋にツナーグをする

大谷　“今日、亀山さんと、どこ行ったの”

Copyright@2026 D³S

古屋　「亀山さんと買い物」

大谷　「何の買い物」

古屋　「お父さんの、クリスマスプレゼントを買うから、選ぶのを手伝ってって」

大谷　「ほんとうに？」

古屋　「本当」

大谷　「わかった」

大谷　「あさっては、クリスマスだよ。約束覚えてる？」

古屋　「覚えてるよ・」

Copyright@2026 D³S

「X接点」（第九話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「クリスマスの夜」

あらすじ

クリスマスイブの日、大谷は古屋が、亀山とも付き合っていることを知って飛び出してしまいます。
行く充てもなく歩く大谷に声をかけたのは、かつての上司　野上
そして、野上の店で働いている小村
その小村から古屋に関して衝撃の事実をきかされます。

Copyright@2016D³S

□第一幕　クリスマスの夜

今日はクリスマスイブ
それでも、今日の大谷はウキウキ気分で仕事に励んでた。
明日のクリスマスは、古屋と一日中、過ごす約束をしているからだ。
思えば、大谷がクリスマスをこんなに楽しみにしているなんて、
父が生きていた頃までだろう。

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　少年時代の大谷　クリスマスイブ

○昔の大谷の住んでいるアパートの一室

▽大谷少年　父が帰ってくるのをこたつの中で待っている

○ドアの開く音

＃　ガチャ　＃

▽大谷父、部屋に入ってくる
　父は大きな紙袋と小さなケーキの入った箱を持っている

Copyright©2026 D³S

大谷　父　「ただいま」

大谷少年　「おかえり。寒かった？」

大谷　父　「ああ、外は寒いよ」

大谷少年　「晩御飯できてるよ」

▽大谷父、大谷少年にケーキの箱を見せる

▽大谷少年、ケーキの箱を見る

大谷　父　「博紀　ほら」

大谷少年　「やった、ケーキだ」

▽大谷少年、ケーキの箱を受けとる

「まずは、博紀の作ったご飯を食べてからな」

▽大谷父、靴を脱ぎ、部屋に入る

Copyright@2026 D³S

大谷　父
大谷少年
大谷　父
大谷少年
大谷　父
大谷　父
大谷

〇（同）居間
ちゃぶ台にを挟んで、大谷父と大谷少年が食事をしている
「博紀の作ったご飯は、いつもうまいな」
「そうかな」
「うん。大きくなったらコックさんになってもいいんじゃないかな」
〇食事が終わり、コタツの上に、ケーキが載っている
「メリークリスマス」
「メリークリスマス」
「はい、プレゼント」
▽大谷　包み紙を取り出し大谷に渡す
「ありがとう、開けていい？」

Copyright©2026 D³S

大谷　父　「もちろん　いいよ」

▽大谷、包み紙を開ける
箱の中から、スニーカーが出てくる

大谷　父　「ごめんな博紀、こんなもので。
本当は、ゲーム機が欲しかったんだろうけど」

大谷　「わ！　うれしいな。カッコイイよ。この靴」

大谷　父　「ごめん、博紀、こんなのプレゼントじゃないよな」

大谷　「え？　すごくうれしいよ。新しい靴、欲しかったもん」

大谷　父　「ありがとう。来年は、もっといい物、買えるように、父さん仕事、がんばるよ」

大谷　「それより、早くケーキ食べようよ」

（ナレーション）
裕福なクリスマスでは無かったが、
いつも、あたたかい心づかいに包まれていた。
そして、父と離れ施設へ

Copyright©2026 D³S

施設でのクリスマスは、クリスマスではなかった。
単なる行事の一つにすぎなかった。

→＃　現在に戻る　＃→

〇（クリスマスイブの夜）会社
　大谷、自席で帰る準備をしている

▽古屋　亀山、大谷の席を通る

▽古屋、大谷に声を掛ける

古屋「お疲れ」

亀山「おつかれさま」

▽大谷、振り向いて古屋の顔を見る

大谷「え？　あ、お疲れ様でした」

▽古屋　亀山、事務所から出て行く

Copyright@2026 D's

（大谷）

（古屋さん、クリスマスイブだから、亀山さんと食事でも行くんのかなま、食事だけだろうから　いいや。明日は、僕の番だもんね）

Copyright@2026 D'S

□第二幕　亀山編

〇（クリスマスイブの夜）レストラン
　古屋　亀山　レストレンで食事をしている

亀山「こんな高そうな所に入って大丈夫？」

古屋「大丈夫、その分プレゼント代から引いてるから」

亀山「もう、古屋さんったら」

古屋「ウソウソ、ちょっとばかりボーナスも上がったし」

亀山「夜景が綺麗ね」

古屋「そうだね。最高のクリスマスイブだな」

亀山「そういえば、最近、大谷君とはどうなの？千里と別れた時は、かなり落ち込んでようだけど、、最近は　とっても元気がいいように見えるわ」

古屋「そうだな。割とタフなやつだよな」

Copyright@2026 D's

亀山　「千里って強引なところがあるのよね」

古屋　「強引さなら大谷だってそうかもな」

亀山　「悪かったって反省して、もう一回　やり直そうかなって言ってるの」

古屋　「そっか。今度、大谷にさりげなく聞いてみるよ」

亀山　「そうしてくれると助かるわ」

ウェイター　▽ウェイター、ワゴンにデザートを乗せて運んでくる

「デザートをお持ちしました」

▽ウェイター、テーブルのケーキの載った皿を置く

古屋　「ちょっとまって」

▽古屋、膝にかけていたナフキンを皿にかける

「ワン・ツー・スリー・メリークリスマス！」

Copyright©2026 D³S

亀山

古屋

亀山

古屋

古屋

亀山

▽古屋、ナフキンを除ける
　皿に、もう一つ小さな箱が乗っている

「これは？」

「クリスマスプレゼント」

「うれしい、ありがとう、開けてもいい？」

「どうぞ」

▽亀山、リボンを取り小さな箱を開ける
　中からネックレスが出てきた。

「ピアスは嫌いって言ってたから」

「親に産んでもらった体に穴を開けるなんて、できないもの」

▽亀山、腕を後ろに回し、ネックレスを付けようとする

「ちょっと待って」

Copyright@2026 D's

古屋　▽古屋、席を立ち亀山の席の後ろに移動

「貸して」

亀山　▽亀山、古屋にネックレスを渡す

古屋　▽古屋、亀山にネックレスを付ける

「ありがとう」

亀山　▽亀山、ウィンドガラスに映る自分の姿を見る

「よかった。すごく似合ってる」

古屋　▽亀山、ネックレスに手を当てる

○（夜）繁華街

古屋　亀山　歩いている

「今日は、ありがとう。とっても　おいしかったわ」

亀山

「我ながらいい店をチョイスできてよかったよ」

古屋

Copyright©2026 D³S

古屋　「駅まで送るよ」

▽亀山、古屋の顔を見る

亀山　「ねぇ、古屋さん　今日は、クリスマスイブよ、
このままレディを帰らせるのは失礼じゃない？」

古屋　「どうしたんだい」

亀山　「私、千里以上に強引なのかも」

古屋　「そうだな。せっかくの日をこのまま終わらせるのは勿体ないよな」

亀山　「ごめんなさい」

古屋　「いや、俺が気がつかないのが悪いんだ」

亀山　「無理だったらいいの」

古屋　「本当は、俺も　亀山さんと　もう少し一緒にいたいと思ってたんだ」

Copyright@2026 D³S

亀山　「ほんと。ウソでもうれしいわ」

古屋　「本当さ」

▽亀山、恥ずかしそうにうつむく

亀山　「古屋さんの家なんてどうかしら」

古屋　「オレの家」

亀山　「あ、いいの、いいの　忘れて。ゴメンさない。カフェか、カラオケで」

古屋　「じゃ、俺の家に行こう」

○古屋のマンション

▽古屋、ドアを開ける

▽古屋、玄関の明かりを点ける

古屋　「さぁ、どうぞ」

Copyright©2026 D³S

亀山
古屋

▽亀山、靴を脱ぎ、廊下をすすみ、奥の部屋にいく
▽古屋、ドアを閉める
※鍵をし忘れている
▽古屋、亀山の後ろをついていく
〇古屋の家のリビング
リビングは明かりを点けておらず、玄関の明かりが少し漏れて届いている
「部屋の明かりはどこ」
「ちょっとまって」
▽古屋、亀山に後ろから抱きつく
▽古屋、亀山の肩を持ち、振り向かせる
▽古屋、亀山にキスをする
〇（翌朝※クリスマス）古屋の部屋のベッド
古屋　亀山が並んで寝ている

Copyright@2026 D³S

▽古屋　亀山　ベットで寝ている

▽亀山、目覚めて体を起こす
　横に寝ている古屋に抱きつく

▽古屋、抱きしめる

（数時間経過）

▽亀山、突然起き上がる

「いけない。こんな時間」

▽古屋、上半身を起こす

「もう、こんな時間か」

「そろそろ　おいとましなくちゃ」

「シャワー浴びておいでよ。朝ご飯の支度しておくから」

亀山

古屋

亀山

古屋

Copyright@2026 D³S

亀山

「ありがとう。そうするわ」

▽亀山、身体に毛布を巻き、立ち上がる。

▽亀山、そのままシャワールームへ

▽古屋、立ち上がり窓に向かい、カーテンを開ける

古屋

「今日も良い天気だ」

Copyright@2026 D³S

□第三幕　大谷編

〇（クリスマスの朝）大谷の部屋

▽大谷、古屋と過ごす事を楽しみに準備をしている

大谷「今日は、古屋さんとのクリスマス。がんばって準備しないと」

大谷「何を着て行こうかな」

▽大谷、自分の部屋でテレビを見ている

▽大谷、時計を見る

大谷「古屋さん、そろそろ起きたかな。せっかくの休みだから昼まで寝てるのかな　そうだ、古屋さんに昼ごはんを作ってあげなきゃ」

▽大谷、出かける準備を始める

〇（午前）歩道

▽大谷、歩いて、スーパーの中に入る

Copyright@2026 D³S

（数分後）

▽大谷、スーパーから買い物袋を下げて出てくる

大谷

▽大谷、買い物袋を開けて中を見る

「えっと、サンドイッチ用のパンと、タマゴとハム、それと　ロウソク　ロウソクの明かりって、ロマンチックだよね　僕、ちょっとエッチなこと考えてる」

▽大谷、笑顔で道を歩いている

○（同）古屋のマンションの入口

▽大谷、オートロックを解除してもらうため、呼び鈴を押そうとする

＃自動ドアが開く＃

大谷

▽マンションの住人、中から出てくる

「ラッキー」

Copyright@2026 D³S

▽大谷、そのままマンションの中に入る

▽大谷、古屋のマンションの家のドア

▽大谷、呼び鈴を押そうとするが止まる

大谷「まだ、寝てるかな」

▽大谷、ドアのノブを回してみる
　ドアノブが回る

大谷「あれ？　玄関が空いている？　どうしてだろう？」

▽大谷、ドアを開ける
　シャワーの音がする

大谷「ドアの鍵を掛けずにシャワーを浴びるなんて、古屋さん物騒だな」

大谷「おじゃまいます」

▽大谷、廊下をすすむ

Copyright@2026 D's

大谷
古屋
大谷
古屋
亀山

○古屋の家、奥のリビング
古屋が腰にタオルを巻いた状態でソファーに座っている
▽大谷、リビングに入ると、ソファーに座っている古屋を見て驚く
「あれ、古屋さん。シャワーを浴びていたんじゃ」
▽古屋　大谷の声に驚く
「大谷。どうして、こんなに早く」
「お昼ご飯を作ってあげようと思って」
「そっか」
▽亀山、バスタオルを巻いて、リビングに入ってくる
「ああ、いいシャワーだったわ」
▽大谷、亀山のバスタオル姿を見ておどろく

Copyright@2026 D³S

亀山　▽亀山、大谷の顔を見ておどろく

古屋　「大谷君、どうして」

「早く来すぎたんだって」

▽大谷、古屋のタオルだけの姿をもう一度みる

▽大谷、手に持っていた、スーパーの買い物袋を床に落とす

大谷　「ごめん、僕、だいぶん、早く来すぎちゃったね」

古屋　「大谷、勘違いするな」

亀山　「大谷君」

▽大谷、リビングから玄関に向かう

古屋　「待て、大谷」

（扉の閉まる音）

Copyright@2026 D³S

（大谷）

〇街中

▽大谷、無我夢中で歩いている

（古屋さんのバカ。やっぱり、女性の方が好きなんじゃないか）

〇古屋の家のリビング

▽古屋　服を着ている

▽亀山　服を着ている

古屋　「ごめん　帰ってくれる」

亀山　「大丈夫」

古屋　「あぁ、探してくる」

亀山　「わかったわ。何かあったら、連絡ちょうだいね」

Copyright@2026 D³S

第四幕　野崎編

〇（昼過ぎ）繁華街

▽大谷、歩いている

▽野崎、大谷を見つける

野崎　「あれは」

▽野崎、大谷に声を掛ける

野崎　「おい」

野崎　「おい！　ったら」

野崎　「待てよ。大谷」

▽大谷、自分を呼ぶ声に気付き振り返る

振り返ると野崎の顔

野崎の服装は、黒のブレザー、下には黒のチョッキ

Copyright@2026 D³S

野崎　▽大谷、何があったかわらない

「ひさしぶりだな」

▽大谷、黙っている

野崎　「おい、まだ、俺を恨んでいるのか？」

▽大谷、やっと理解できる

大谷　「いえ、そんな訳では・・それでは」

▽大谷、その場から離れようとする

▽野崎、大谷の腕を掴む

野崎　「おいおい、せっかく、久々にあったんだ、邪険にすんなよ」

大谷　「別に邪険になんかしてません」

野崎　「少し話をしようぜ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「僕には話すことないですから」

野崎　「冷たいな。みんな元気にしてるか？亀山や、林は相変わらずうるさいか」

大谷　「みなさん、僕に親切にしてくれてます」

野崎　「そっか。あいつらも女らしくなってきたか。
俺は見ての通り、会社辞めて今ではバーの雇われマスターよ」

大谷　「そうなんですね」

野崎　「おい、今　暇か？」

大谷　「暇って訳ではないですけど」

野崎　「俺の店、すぐそこなんだ。ちょっと寄っていけよ」

大谷　「いいです」

野崎　「なんだよ、ちょっとだけでいいからさ
それに、おもしろい話、聞けると思うぞ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「おもしろい話って何ですか？」

野崎　「あいつだよ、
えっと、俺とおまえでサウナ行ったとき居た、あいつ」

大谷　「古屋さんですか？」

野崎　「そう、古屋だ
そいつの元彼女ってか、男なんだけど、今、俺の店でバイトしてんの
俺、驚いたよ。あいつも、こっちの世界の人間だったんだよな」

大谷　「そんなはずは」

野崎　「じゃ、自分の耳で聞いてみな。まぁ、取りあえず、寄ってけって」

○繁華街

野崎の後ろを大谷が歩いている

▽大谷、野崎の後を着いていく

○野崎の店

雑居ビルの一階にある

Copyright@2026 D³S

小村　▽野崎、店のドアを開ける

「すいません、まだ、準備中なんです」

▽小村、マスターの顔を見る

小村　「なんだ、マスターじゃないですか。表から入ってくるからてっきり客が来たかと思いましたよ」

野崎　「ああ、客を連れてきたぞ」

▽大谷、野崎の後ろから出てくる

大谷　「こんにちは」

小村　「いらっしゃい」

▽大谷、小村の顔を見る

▽小村、大谷の顔を見る

Copyright@2026 D³S

大谷　▽小村、大谷、固まる

小村　「え？」

小村　「え？」

大谷　「小村さん」

小村　「大谷、久しぶり。元気してたか？」

大谷　「はい。小村さんこそ」

小村　「あぁ、俺は元気だよ」

野崎　▽野崎、小村、大谷に指を差しながら交互に顔を見る

「なんだ、なんだ二人は知り合いか？　こりゃ驚いた」

▽小村、野崎の顔を見る

Copyright@2026 D³S

小村　「大谷は、高校の時の後輩なんですよ」

野崎　「同郷ってやつか」

小村　「そうです」

野崎　「そっか。ほら、立ち話は止めて、さぁ、座れ座れ」

▽野崎、大谷にカウンターの椅子に座るように促す

▽大谷、カウンターの椅子に座る

▽小村、カウンターの中から話しかける

小村　「ひさしぶり。俺が高校卒業して以来だよね」

大谷　「はい」

小村　「今は、社会人か」

大谷　「そうです。今は社会人です」

Copyright@2026 D³S

小村　「そっか。立派になったな。俺は、就職したけど、そこでパワハラにあってさ逃げ出してしまって、今は、ここでバイト中」

野崎　「おいおい、ここだって、立派な仕事じゃないか」

▽野崎、カウンターの中に入る

小村　「そうですよね。マスター。俺だって、いつかは店持ちたいし」

野崎　「そうそう、夢はでっかくな」

野崎　「なんか飲むか」

大谷　「いえ、大丈夫です」

野崎　「遠慮するなって。酒がいいか」

大谷　「さすがに昼間ですし」

野崎　「せっかく、再開の感動だぜ。一杯くらいいじゃないか。小村も飲め」

Copyright@2026 D's

小村　「はい」

大谷　「じゃ、一杯だけ」

▽野崎、カウンターの後ろ側で、グラスにウィスキーを注ぎ、水割りを作る

小村　「懐かしいな。みんなはどうしてるんだろうな」

大谷　「先輩達が卒業した後は、わからないですね」

小村　「そうだよな。俺も、ずっと連絡取ってないし」

▽野崎、小村の横に立つ

野崎　「しかし、おまえらが知り合いとは、世間は狭いな」

▽野崎、大谷に水割りの入ったグラスを出す

▽大谷、野崎からグラスを受けとる

大谷　「ありがとうございます」

Copyright©2026 D³S

小村　▽野崎、小村にグラスを渡す

小村　「マスターありがとう」

野崎　「そういえば、マスターと大谷はどこで？」

小村　「前勤めていた会社の上司と部下の関係さ」

野崎　「え？　マスター、マジで、サラリーマンだったんですか？」

小村　「何を言ってんだ。最初から、こんな仕事をしてるわけないっての」

野崎　「ほら、マスターだって、こんな仕事って」

小村　「ワリィワリィ、取りあえず、乾杯だ」

野崎　「乾杯」

大谷　▽三人、グラスを交わした

「ところで、野崎課長は、どうしてここで働いているんですか？」

Copyright@2026 D³S

野崎　「いろいろあってさ」

大谷　「あ、別に話さなくてもいいですよ」

野崎　「俺か、異動した部署で、ちょっかい出した奴が、会社の偉いさんの隠し子でよ。そいつにチクられて速攻クビよ。仕事しなきゃ食べて行けないし、そんで、ここで雇われマスターとして働いてるってわけよ」

小村　「マスターの男色は、抑えがきかないからなぁ」

野崎　「おい！　男色は余計だっつぅの。そういう、お前だって人のこと言えないだろ

Copyright@2026 D³S

□第五幕　小村編

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　小村　就職したての頃

〇（数年前）雨の降る　夜のビジネス街

▽小村、傘をささずに、濡れたスーツ姿でぼーっと歩いている

〇（数時間前）小村が働いている会社　事務所

「お前のような役立たずは辞めてしまえ」

「でも、課長が」

（もういやだ、あんな会社）

→＃　現在に戻る　＃→

〇雨の降る　夜のビジネス街

小村の反対側から　大学生４人が横に並んで向かってくる

小村の上司

小村

（小村）

Copyright©2026 D³S

▽小村、避けるが避けきれず、端の大学生と肩がぶつかる

大学生Ａ　「痛てぇなぁ！」

▽小村。気がつかずそのまま歩いていく

大学生Ａ　「おい！　待てよ！　待てったら！」

▽大学生Ａ、小村の肩を掴む

小村　「あ、ごめん」

大学生Ｂ　「ごめんで済んだら警察はいらないんだよ」

小村　「ほんとうに　ごめん」

大学生Ｃ　「こいつ　弱っちぃな」

＃道行く人　チラ見をするが通りすぎて行く＃

大学生Ｄ　「おいおい、どうした」

Copyright@2026 D's

▽小村、大学生Ａ、大学生Ｂから暴行を受ける

小村　「すいません」

▽小村、頭をかかえたまま　しゃがんでいる

＃少し人集りが出来ている＃
　人集りの中に、中年サラリーマンがいる
　※続編に出てくる、河合（かわい）が見ている

▽大学生Ａ、小村を足でけっている

▽大学生Ａ、小村を掴み　立たせる

大学生Ｄ　「おい、兄ちゃんよ、許してやるから、金出しなよ」

▽大学生Ａ、小村に拳を振り上げる
　大学生Ａの腕に傘の柄がひっかかる

大学生Ａ　「なんだこりゃ」

Copyright@2026 D's

古屋

大学生Ｂ

河合

大学生Ｂ

大学生Ａ

大学生Ａ

▽大学生Ａ、傘の先の方を見る
　古屋が傘の先をもっている

「いい加減に　その辺にしとけよ」

「うるせぇんだよ」

▽大学生Ｂ、古屋に殴りかかる

▽古屋、傘で大学生Ｂの背中を叩く

「あれは、古屋」

「いてぇな。もう手加減しねぇぞ」

「ああ。後悔するなよ」

▽大学生Ａ　大学生Ｂ、同時に　古屋に殴りかかる

▽古屋、簡単に傘で　大学生二人をたたきのめす

「覚えてろよ」

Copyright@2026 D³S

古屋　「ああ、覚えておいてやるから、俺のことも覚えとけ
高石（たかいし）の古屋って」

河合　「高石って」

▽大学生、走って逃げていく

古屋　「大丈夫か？」

小村　「はい。ありがとうございます」

▽古屋、小村の顔を見る

古屋　「おや、君は　あの時の」

※「私が工業高校に進学した理由　二学期」で会っている

小村　「どうかしました」

古屋　「覚えてないならいいよ。立てるか？」

小村　「はい」

Copyright@2026 D's

古屋　　▽小村、立とうとしたが、うまく立つことができない。

古屋　　「大丈夫か？」

　　▽古屋、小村のおでこに手を当てる

　　「熱があるじゃないか！
　　取りあえず、俺の家が近くだから行こう」

　　〇（その夜）古屋の住んでいるマンションの部屋

　　▽小村、目が覚める

古屋　　「気分はどうだい？」

小村　　「大分、よくなりました」

　　▽小村、体を起こそうとするが、全裸状態で布団を掛けているだけ
　　全裸ということに気づく

　　▽小村、上半身を起こす

Copyright©2026 D'S

小村上半身裸。ボクサーブリーフだけで寝ていたことに気付く

▽小村、慌てて下半身を毛布で隠す

古屋「ああ、服がびしょ濡れだったから、脱いでもらったよ。
今、洗濯しているから、もうしばらくそのままでいたらいいよ」

小村「すいません」

古屋「まだ、熱があるようだから、もう一度、薬を飲んで、休んでいたらいい」

▽古屋、小村に白い粉の入った薬と、水の入ったコップを渡す

▽小村、コップを受け取り薬を飲む

小村「助けてくれて、ありがとうございます」

古屋「あんなところで　びっくりしたよ。傘も差さずにどうしたってんだい？」

小村「ちょっと会社で　いろいろありまして」

古屋「言いたくなければいいぞ」

Copyright@2026 D³S

（＃フラッシュバック＃）

←＃　回想　＃←　　小村　会社での出来事

○小村が新入社員の頃　努めていた会社の一室

小村の上司　「俺のせいって言うのか」

小村　「いえ、そうではなく」

小村の上司　「じゃ、どう責任とる」

小村　「責任といわれても」

小村上司　「そうだよな。新人のお前に責任は取れないよな。なら、俺が取ってる
その代わりにだな」

▽小村上司、小村の肩に片手を乗せ、もう片方の手で小村の股間をまさぐりだす

小村　「何をするんですか」

Copyright@2020 D³S

小村上司　「俺が責任を取るんだぞ。これくらいの見返りはないとな」

（数分後）

○薄暗い誰もいない会社の一室

小村、前屈みになり　小村上司にお尻を犯される

小村　「あ、あ、あ」

▽小村上司、小村の尻に陰茎を入れ、腰を振っている

→＃　現在に戻る　＃→

○（同）古屋の部屋

古屋　「そっか　それは辛かったな」

小村　「僕が、仕事で失敗したせいです」

古屋　「自分を責めてはいけないよ」

小村　「でも」

Copyright@2026 D3S

古屋　「しかし、俺、その上司の気持ちもわかるな」

小村　「どうしてですか」

古屋　「それは、君が、犯したいくらい、素敵だからさ」

小村　「どういうことですか」

古屋　「まだ、体は大丈夫か」

小村　「は？」

▽小村、手を上げようとする
　力が入らない

▽小村、上半身が支えきれなくなる

▽古屋、小村の横に座る

▽古屋、小村の顔に近づける

Copyright@2026 D'S

古屋　「薬が効いてきたようだね」

小村　「何をするんですか」

古屋　「俺にも、その上司のようなことをしてくれるか」

小村　「や、やめてください」

▽古屋、小村の布団をめくる

▽古屋、小村にキスをしながら上半身を倒しベットに寝かせる

（数時間後）

▽古屋　小村、ベットで二人で寝ている

古屋　「嫌な上司のことは忘れたか」

小村　「はい」

▽小村、恥ずかしそうに古屋に抱きつく

Copyright©2026 D³S

（＃フラッシュバック＃）

→＃　現在に戻る　＃→

Copyright@2026 D³S

□第六幕　脱出

○野崎のバー

野崎　「俺も、まさかね。あいつがって」

大谷　「え？　古屋さんが、そんなのウソだ」

小村　「まさか、お前も古屋さんと？」

大谷　「いや、何にもない。何にも」

▽大谷、曖昧に返事

小村　「そうか、ならいいけど、もし古屋さんに、誘われても断るんだぞ」

大谷　「どうしてですか」

小村　「あの人の魅力に取り付かれると、逃げられなくなる。
この世界から抜けられなくなる」

野崎　「ケンが、こっちの世界に踏み入れたのも、古屋がきっかけだもんな。

Copyright@2026 D³S

（大谷）

最近、古屋に婚約者ができたって噂もあるのに
いまだに古屋に一途だもんな。決して実らない恋いなのによ」

（古屋さん・・・信じられない・・
でも、小村さんがウソをつくとも思えない
じゃ、僕は、遊ばれていたの？婚約者って、亀山さん。）

大谷　▽大谷、自分の体の異変に気づく

大谷　「あれ、手が」

小村　「あれ、あれ」

野崎　「大谷、どうした」

▽大谷、椅子に座ってられない状態になる

小村　「そろそろ、効いてきたかな？」

「マスター、大谷に何をしたんですか」

▽野崎、ジャケットのポケットから白い薬を取り出し

Copyright@2026 DES

大谷の目の前にチラつかせる

大谷　「か、か、かちょう」

▽大谷、カウンターを掴みながら床に倒れる

小村　「大谷」

野崎　「おい、ケン、運ぶの手伝え」

▽野崎　小村、カウンターの中から出てくる

▽野崎、大谷の両腕を掴む

野崎の腕に斑点模様があるのを見る

野崎　「見えちまったか。若い男とやりまくった罰があったてよ。とうとう発症してしまったんだよ。もう手遅れで、後半年ということだ最後に、たっぷりお前に仕込んでやるよ」

野崎　「おいケン、足を掴んで、テーブルの上に乗せるぞ」

小村　「マスター」

Copyright©2026 D³S

野崎　「心配するな。お前も飲んだことある薬だ。そんなことより、テーブルに寝かせてやれ」

▽小村、大谷の両足を掴む

小村　▽小村　野崎、大谷を　持ち上げ運ぶ

大谷　「大谷　大丈夫か」

小村　「僕、死なないですよね」

野崎　「心配ない。一時的に神経を麻痺させるだけの薬だから」

大谷　「そりゃそうさ、死んだら面白くないだろ」

▽大谷、店のテーブルの上に寝かせられる

野崎　「さぁて、ショータイムの始まりだ」

大谷　「何をするんですか」

Copyright@2026 D's

野崎　「まずは、服を脱ぎましょうか」

小村　「マスター、やめてください」

▽野崎、大谷のズボンのベルトを外し、ジッパーを下ろす

▽野崎、大谷の股間を撫でる

野崎　「ムヒョー　やっと俺の夢がかなうぜ」

大谷　「お願いです。止めてください」

小村　「マスター」

▽野崎、小村の事など聞かない

野崎　「楽しみはとっておいて、まずは上から脱がせよう」

▽野崎、大谷のシャツのボタンを上から一つ一つ外す

大谷　「お願いです。小村さん　助けて」

Copyright@2026 D³S

小村　「マスター」

野崎　「うるさい。口出しをするな」

▽野崎、大谷のシャツを広げる
　中のTシャツが見える

▽野崎、Tシャツを捲り上げる

野崎　「綺麗なオッパイしてやがる」

▽野崎、大谷の乳首を口で吸う

大谷　「いや、やめて、やめて」

野崎　「ズボンを脱ぎましょうね」

▽野崎、大谷のズボンを下に引っぱり脱がす

大谷　「や、め、て」

野崎　「はい、はい、止めないよ」

Copyright@2026 D³S

▽野崎、大谷のボクサーブリーフの上から、舌で舐め回す。

小村　「マスター　もう、止めてください」

野崎　「うるさい！　そしたら、今晩のクリスマス、お前が代わりになるか？」

▽小村、うつむいてしまう

▽野崎、大谷のボクサーブリーフを膝までずらす
　大谷の陰茎が野崎の目の前に

野崎　「うひょ～　これ、これ　この時を待ってたんだよ」

▽野崎、大谷の陰茎をなんども舌で舐め回す

野崎　「ち！　ぜんぜん、大きくならんな。ここまで無能にするとは
　あの薬の欠点だ。大丈夫、こんな時の為に、これがあるからな」

▽野崎　カウンターの中に入り、引き出しから小さなケースをもってくる

▽野崎　ケースを開けると、中から注射器とアンプルのような物が入っている

Copyright@2026 D's

小村　「マスターそれは」

野崎　「これか？　これをモノに注射すると、あら不思議、どんな時だって直ぐにでデカクなるのさ」

小村　「そんなもの使ったら・・・」

野崎　「心配すんなって、俺だって、人殺しで捕まる気はないからな。しかも、アソコを大きくするだけじゃないぞ。感覚だって何倍も増強してくれる。すばらしい薬だ。こいつ　きっと喜ぶに違いないぜ。しかし、快感を味わったあと体力の消耗はすごいけどな」

大谷　「お願いです。本当に、止めてください。なんでもしますから」

野崎　「嫌だね」

▽野崎　注射針を大谷の陰茎に刺し、薬を注入し、針を刺した箇所を指先でゆっくりと揉む

野崎　「ほぉら、薬が効き出すぞ」

Copyright©2026 D³S

野崎　「効いてる効いてる」

▽野崎、大きくなった大谷の陰茎を握り、扱きだす

大谷　「あ、あ、あぁ～」

野崎　「やっぱ、舶来物はよくきくな」

大谷　「あう、あ、も、もう　やめて」

▽野崎、大谷の顔を見る

野崎　「いいね　その顔。感じてるんだろ。素直になれよ」

▽大谷、ガラステーブルの上に服を脱がされた状態で大の字に寝かされている

▽野崎、下半身　裸になり　大谷の足の間に座っている

野崎　「そろそろ、入れさせてもらうぞ」

大谷　「や、やめてください」

Copyright@2026 D³S

▽野崎、大谷の校門にゆっくりと自分の陰茎を入れていく

大谷　「あ、あつ」

▽野崎、腰を振り出す
　大谷の体も揺れる

野崎　「おお、最高だぜ。お前も　いっしょにいこうぜ」

▽野崎、大谷の陰茎を握り扱く

大谷　「あ、あ、あ、あつ　あつ」

野崎　「いく、いく、いくう」

▽野崎　大谷、腰が浮く

▽野崎、大谷の肛門から自分の陰茎を取り出す
　大谷の肛門から野崎の出した精液が流れでる

野崎　「すっきりした。発症しても俺を恨むなよ
　それと、薬の効き目が弱ってきたようだ

Copyright@2026 D³S

俺は、開店の準備するから　こいつが逃げないように見張っておいてくれ。
もし逃がしたら、お前が、今夜のクリスマスパーティの出し物になって
もらうからな。それから、薬をもう一回飲ませておけ」

▽野崎、ジャケットから白い薬をテーブルの上においた

▽野崎、店から出て行く

○野崎のバーの中
大谷　小村　だけがいる

▽小村、テーブルの上の白い薬を手に持つ

「小村さん　助けて」

▽小村、大谷の顔を見る

▽大谷、目に涙が溢れている

「まずは、体を綺麗に拭いておこうか」

▽小村、カウンターから　おしぼりを数本　取ってくる

大谷

小村

Copyright@2026 D's

大谷　「お願いです。助けてください」

小村　▽小村　精液で汚れた大谷の体を　おしぼりで拭き始める

▽小村　大谷の胸を拭きながら大谷に顔を近づける

「まだ、マスターが俺が逃がさないか、見ている。もう少し我慢して」

小村　▽野崎　ドアの隙間から小村の様子をうかがっている

▽小村　大谷の頭を少し持ち上げる

「飲んだ振りをして」

▽小村　大谷の口元に封を開けてない白い薬を飲ませるふり

▽小村　薬をジャケットのポケットにしまう

▽小村　水の入ったコップを大谷の口につける

▽大谷　水を飲む

Copyright@2026 D's

▽小村　大谷の頭をそっとテーブルにおく

▽野崎　ドアを閉める

▽小村　野崎がドアを閉めたのを確認する

▽小村　大谷をロープをほどき出す

大谷　「小村さん」

小村　「シッ」

▽大谷　テーブルから置きあがる

小村　「早く　逃げろ」

大谷　「でも、小村さん」

小村　「俺の事は心配するな。早く　服を着ろ」

Copyright@2026 D's

小村　▽大谷　ジーンズを穿き、シャツのボタンを留める

「早く」

大谷　「でもコートが・・・」

小村　「これを着ていけ」

▽小村　自分が着ているジャケットを脱ぎ、大谷に渡す

小村　「早く」

▽大谷　バーから出て行く

▽小村　スマートフォンを取り出し電話をかける

小村　「もしもし・・・」

小村　「はやく　助けにきてあげてください」

Copyright@2026 D³S

Copyright@2026 D³S

「X接点」（第十話）

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル　「最終章」

あらすじ

野崎の元から無事　脱出できた大谷は、古屋の元に
大谷は、古屋に真相を聞き　決断します

Copyright@2026 D³S

□第一幕

○（夜）繁華街
　クリスマスカラーの明かりが点いており、人通りも多い

▽大谷、体力が消耗し　ふらふらを歩いている

▽大谷、倒れかける

▽古屋、正面から倒かけた大谷を抱き支える

▽古屋、大谷の顔を見る

古屋　「ずいぶん探したぞ」

古屋　「大谷、しっかりしろ、大丈夫か？」

▽大谷、顔をあげ、古屋の顔をみる

大谷　「ふ・る・や・さ・ん」

▽大谷、気を失う

Copyright@2026 D³S

（数時間後）

〇古屋の部屋

古屋は、ソファーに横になり目を瞑っている

大谷、ベッドで寝ている

▽大谷、を覚ます

大谷　「ここは」

▽古屋、大谷の声に気付く

▽古屋、大谷に近づき、顔を見る

古屋　「目覚めたか。病院に連れて行こうとも思ったけど、まずは、寝てからと思って」

▽大谷、上半身を起こす

大谷　「まだ、寝ていろよ」

Copyright@2026 D³S

大谷　「いえ、もう、大丈夫です」

古屋　「そっか、よかった。心配したぞ。けど　どうして、あんなところに」

▽大谷、黙っている

古屋　「話したくなければ、いいんだ。もう少ししたら、病院は連れていってやるからな」

大谷　「いえ、本当にもう　大丈夫です。少し寝たら良くなりました」

古屋　「ならいいんだ。今日は、ここに泊まってい休んでいけばいい」

大谷　「はい。ありがとうございます。じゃ、もう少し　横にならせてもらいます」

古屋　「ああ、そうしろ」

▽大谷、ベッドに横になる

（数時間前）

○野崎のバー

野崎と小村がいる

Copyright©2026 D³S

野崎　▽野崎、小村を殴る

▽小村、倒れる

「バカヤロー、よくも逃がしたな！」

▽野崎、小村の胸ぐらを掴み　小村を起こす

野崎　「あいつを呼び出せ」

小村　「もう、許してあげてください」

野崎　「バカなことをいうな。あいつのせいで、俺は、こんな店で一生を終わろうとしてんだぞ。そう簡単に許せるか！
今日の穴埋めは、わかってるよな。お前が、代わりになるんだぞ」

Copyright@2026 D³S

□第二幕　思い出の場所

〇（深夜0時）　古屋の部屋
　ベッドで大谷が寝ている

▽大谷、目覚めて、上半身を起こす

大谷　「古屋さん」

▽古屋、大谷の方を向く

古屋　「よく寝れたか」

▽大谷、上半身を起こす

大谷　「はい、すっかり元気になりました」

古屋　「そっか　良かった。心配したぞ。もうこのまま、朝まで　寝ていていいんだぞ」

大谷　「いえ、せっかくのクリスマスイブですから、今からでも、どこかドライブに行きませんか」

Copyright@2026 D³S

古屋　「ドライブか。無理するなよ」

大谷　「僕にとって、古屋さんとの初めてのクリスマスは　大切な夜なんです」

▽古屋、少し考える

古屋　「そっか、わかった　じゃ準備をしよう。その前に、シャワーでも浴びてこいよ」

大谷　「はい」

▽大谷、ベッドから出て立ち上がる

▽大谷、シャワーを浴びに行こうとする

▽大谷、目線を床に
　今朝家から持って来たスーパーの袋をを見つける

（一時間後）

○飛行場近くの土手
　古屋の車が止まっている
　中に、古屋と大谷が座っている

Copyright@2026 D³S

古屋

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

▽古屋、フロントガラス越しに、外の景色を見ている

「さすがに　こんな時間じゃ飛行機も飛ばないか」

▽大谷、無言

「懐かしいな」

「そうですか」

「お前と来たのが　ずっと昔のようだ」

「僕は、ついさっきのように覚えてますよ」

「そうか」

▽大谷、ここに来る前に、コーヒーチェーンで買ったコーヒーを古屋に渡す

（＃　フラッシュバック　＃）

Copyright@2026 D's

←＃　回想　＃←　一時間前の出来事

▽大谷　古屋、古屋の車の中

大谷　「少し　ノドが乾きませんか」

古屋　「そうだな。近くに、コーヒースタンドがあるから寄ってみるか」

○コーヒーチェーン店の入口

大谷　「僕が買って来ますから、駐車場で待っててください」

古屋　「寒いぞ」

○コーヒーチェーンの駐車場

▽古屋　車を止める

大谷　「ちょっと待っててください」

▽大谷、車を降り、店に入っていく

Copyright©2026 D³S

▽大谷、ジャケットのポケットに手を入れる

▽大谷、ポケットから手を出す
　白い薬の粉が入っているく

▽大谷、車に戻って運転席の窓をコンコンと叩く

▽古屋、運転席側の窓を開ける

「おまたせしました」

▽大谷、買って来たコーヒーを渡す

「サンキュー　寒いから早く乗れ」

「はい」

▽大谷、助手席側に入り、車に乗り込む

→＃　現在に戻る　＃→

▽大谷　古屋、コーヒーを飲む

大谷

古屋

大谷

Copyright@2026 D³S

大谷　「今日、待ちで偶然　野崎さんに遭いました」

古屋　「野崎か。会社辞めたのは知っていたけど」

大谷　「野崎さん、繁華街でゲイバーのマスターしていました
しかも性病にかかり、あと半年といってました」

古屋　「そっか、気の毒とは思うけど、自業自得だな」

大谷　「はい。その店で、小村さんに会いました
古屋さんは、小村さんを知ってますか」

古屋　「小村って、たしか、お前のお父さんを一緒に探してくれたやつだったよな」

大谷　「そうです。古屋さんは知らないんですか」

古屋　「ああ、俺には覚えがないな」

大谷　「そうですか。小村さんは、古屋さんのことを知っていました。
古屋さんのこと　いろいろ教えてくれました。

Copyright©2026 D's

古屋　「そっか」

大谷　「古屋さんが、僕に優しくしてくれたのは、僕の体が目当てだったんですか
最初から、そのつもりで、助けてくれたんですか」
亀山さんとは、どんな関係なんですか？」

古屋　「そっか、隠してもしょうがないな。
確かに、昔、小村と付き合ってたことがある。
そして、沢山の男と付き合ってたことも事実だ」

大谷　「小村さん言ってました。古屋さんに抱かれると、もう逃げられなくなると
僕もそうです。古屋さんと離れたくない。他の男の人と寝てほしくない。

大谷　「もう、僕で、終わりにしませんか。古屋さんは　もう、誰にも渡さない」

古屋　「何を言ってるだ・だ。あ、あれ」

▽古屋、ハンドルから手が離れ、手が下に垂れ下がる」

古屋　「力が入らない」

大谷　「薬が効いてきたようですね」

Copyright©2026 D³S

古屋　▽古屋、ぎこちない動きで、大谷の方を見る

「大谷、何をした」

大谷　▽大谷、ジャケットのポケットから、薬の入っていた袋を取り出した
袋の中は空

「これ、知ってますよね？　古屋さんが小村さんに使ったやつ。
さっきのコーヒーに混ぜておいたんです
僕も野崎さんに飲まされ動けなくなり、いろんなことされました
野崎さんに犯されました、僕も発症するかもしれません。
写真も撮られました。もう、ダメかもしれないです」

▽大谷、座席の後ろから　スーパーの買い物袋をもってくる

▽大谷、スーパーの買い物袋からローソクを取り出す
ローソクに火を付け、ダッシュボードに蝋を垂らし、
他のロウソクを立てていく

古屋　「何してるんだ」

Copyright©2026 D's

大谷　「綺麗でしょ。今晩は、クリスマスですから」

古屋　「こんなところで火を使うんじゃない」

大谷　「言ったじゃ無いですか、もう、終わりにしましょうって」

#ロウソクにズームイン#

次のシーンに繋げる

Copyright@2026 D³S

□第三幕　野崎のバーにて

＃ロウソクの火からズームアウト＃

▽野崎、ロウソクを持って立っている

〇（数時間前）野崎のバー

店の真ん中のテーブルの上に、小村がパンツ一枚だけの姿で、両手、両脚、腰、胸をロープでテーブルに固定され、張りつけ状態で寝かされている

客の数人が、小村の身体を舐めたり触ったりしている

▽客Ａ、ニヤニヤしながら小村の股間を触ったり、乳首を舐めたりしている

▽客Ａ、カウンターにいる　マスターのところにいく

「マスター　今年のクリスマスは、いいね」

「そうでしょ。ゆっくり楽しんでいってくださいよ」

▽野崎、火が着いたロウソクの載せた盆もってカウンターから出てくる

客Ａ

野崎

Copyright©2026 D³S

小村
野崎

▽野崎、小村の横に座る
▽野崎、ロウソクを方向け、蝋を小村の胸に落とす
「熱い」
▽小村、顔をしかめ、身体を動かそうとする
「悪い、悪い。ちょっと手が滑った」
▽野崎、ロウソクを　テーブルに置く
＃ロウソクの火にズームイン＃
次のシーンに繋ぐ

Copyright@2026 D³S

古屋　　古屋　　古屋

□第四幕　再び古屋の車の中

＃ロウソク火からズームアウト＃

○古屋の車の中

　ロウソクの残りが短くなり、火がダッシュボード近づきかけていた

▽古屋、薬で身体が動かない

「おい！　大谷」

▽大谷、目を瞑っている。

「聞こえてるんだろ？」

「お前は、母さんの分まで長生きするんじゃなかったのか
お父さんが一生懸命貯めてくれたお金があってこそ、
今の大谷が居るんじゃないのか
こんなところで終わってどうするんだ
自分から命を絶つなんて、俺がお前の親なら許さないぞ
母さんが、どんなに、お前の成長を見たかった、考えてことあるか
それでも、どちらかを選ばなくてはならなくなり、お前を選んだぞ

Copyright@2020 D³S

古屋　父さんが、どんなに一緒に暮らしたかったか、考えたか」

大谷　「大谷　どうなんだ！」

古屋　▽大谷、まぶたから涙が零れる

「僕は、僕は、死にたくない　生きたい
天国にいる父さんや、母さんに、生きているとこ、見せ続けたい」

「わかった。それが本心だよな。もう、二度と、こんなことをするな」

○ダッシュボードに火が燃え移り、目の前が真っ赤になる

Copyright@2026 D³S

□第五幕　野崎のバー

○野崎のバー

店の真ん中のテーブルの上に、小村がパンツ一枚だけの姿で、両手、両脚、腰、胸をロープでテーブルに固定され、張りつけ状態で寝かされている

客の数人が、小村の周りにしゃがんで小村を見ている

▽野崎、小村の前に立っている

野崎の周りに、客が群がっている

野崎「さて、ショータイムといこうぜ」

▽野崎、火の付いたロウソクを持ち立ち上がる

▽野崎、ゆっくりとロウソクを斜めにかたむける

蝋が垂れ、小村の胸の上に落ちる

小村「あ、熱い」

▽小村、体をビクビクさせる

客達から歓声が湧き上がる

Copyright@2026 D³S

小村　▽野崎、小村の胸の上に、次々と蝋を垂らす

野崎　「熱い、熱い、止めてください」

　　「熱いそうですよ」

　　▽客、小村の胸を舐める

小村　「あ、あっ」

野崎　「いい顔だ。次は、ここだ」

　　▽野崎、ロウソクを小村のパンツに近づけ傾ける

小村　「そ、そこは」

　　▽小村、目を瞑る

　　▽野崎、小村のパンツの上に、蝋を垂らそうとロウソクを方向ける

　　（バーの照明が真っ暗なる）

Copyright@2026 D's

▽客、どよめきがおこる

（数秒経過）

○野崎のバー、明かりが点く

▽小村、縛っていたロープが解かれ、テーブルの上にたっている

小村　「あれ、あれ、マスター」

小村　「マスターどこですか」

▽小村、店内を見渡す

野崎の姿は見えない

Copyright@2026 D³S

□第六幕　空港の土手

〇（クリスマスの朝）　空港近くの土手
　パトカーのサイレンが響く
　車の近くで、刑事二人が話をしている

刑事Ａ　「ゲイバーのマスターか」

刑事Ｂ　「不治の病で、余命宣告を受けてたらしいな」

刑事Ａ　「それで、覚悟の自殺か」

刑事Ｂ　「そのようだな」

刑事Ａ　「まったくクリスマスというのに」

▽警官、担架がブルーシートをかけた担架を運んでいる
　ブルーシートから運び出される遺体の腕には、黒ずんだ斑点見えている

Copyright@2026 D³S

□第七幕　会社

○（月曜日の朝）事務所
　社員達が忙しそうに朝の準備をしている

▽大谷、事務所に入ってくる

大谷　「おはようございます」

▽大谷、出勤して自席に向かう

▽大谷、古屋の席近くを通る

大谷　「あれ、この席　誰だっっけ」

▽大谷、自席に座る

（数分後）

▽亀山、大谷の席にお茶を持ってくる
　コップは、落書きされたコップを同じだが、落書きはされいない

Copyright@2026 D³S

亀山　「おはよう、大谷君」

大谷　「おはようございます」

▽大谷、コップを見て首をかしげる

（大谷）（なんか違う気が）

亀山　「そうそう、昨日のクリスマスプレゼント、千里、喜んでたわよ～」

大谷　「よかった。じっくり選んだかいがありました」

▽大谷、古屋の席を見る

▽亀山、古屋の席を見る

亀山　「どうしたの」

大谷　「えっと、あそこの席って、」

亀山　「古屋さん」

Copyright©2026 D³S

大谷　「そ、そう！　古屋さん」

亀山　「古屋さんが　どうかしたの」

大谷　「えっと、古屋さんは元気ですか」

亀山　「何言ってる。古屋さんは元気に決まってるわよ。ほら、噂をすれば」

▽古屋（別人）、ちょっと小太りの、明らかにイケメンとは言い難い中年男性が歩いてくる

▽古屋（別人）、亀山の側にやってくる

古屋（別人）　「おはよう」

亀山　「おはよう。間に合ってよかった」

▽大谷、古屋（別人）の顔を見る

大谷　「えっと、古屋さん？」

▽古屋（別人）、大谷の顔を見る

Copyright@2026 D³S

古屋（別人）「おいおい、なんだ、忘れたか。俺以外に誰か居るか」

▽大谷、しばらく間が空く

大谷「そうだ、古屋さんだ」

亀山「もう、大谷君、しっかりしてよ。
もしかしたら、お兄さんになるかもしれない人なのよ」

▽大谷、亀山の顔、古屋の顔を見る

大谷「またぁ、からかわないでください」

亀山「あら？　千里は本気よ」

大谷「そうなんですか」

亀山「そうよ」

古屋（別人）「そっか、俺は、大谷のお兄さんになるのか」

Copyright@2026 D's

大谷　「古屋さんと亀山さんの結婚式は、二月でしたよね」

亀山　「そうなの。この人が二月じゃないと休み取れないっていうから」

古屋（別人）　「君だって、新婚旅行は安く行けるから喜んでたじゃないか」

亀山　「はいはい。大谷君達は、ケチケチな新婚旅行はしないようにね」

古屋（別人）　「ああ、大谷なら大丈夫。うちの課のエースだからな」

亀山　「そうそう初詣は、４人で行きましょうね」

大谷　「はい」

Copyright©2026 D³S

□第八幕　夜に消える

〇（夜）ビル街

▽小村、ビルの前で、ウィンドの飾りを見ている

▽古屋、小村の背後から近づく

古屋　「待たせたな」

▽小村、声のする方に振り向く
　古屋が立っている

小村　「う、うん」

▽小村、古屋に腕を通し、体を寄せ合い、暗闇に消えていく

Copyright@2026 D³S

「X接点」完

Copyright@2026 D³S